

建築と社会

Architecture and Society

02

vol.97 No.1127

2016

特集：

非日常の棲み処 ～寢泊まりの進化

What's going on in accommodation?
; for the scenes beyond daily life.

03

04

05

06

07

08

09

10

11

12



Tebra

ハンズフリーマンション電気錠システム
[テブラ]

ハンズフリーで
かんたん施解錠。
もうこれが
あたりまえに
なりました。

共用部 Tebra pass

ハンズフリーで
ラクラク通過



共用部専用
Tebra pass
リーダー

専有部 Tebra

ボタンを押すだけで簡単施解錠



専有部専用
Tebra リーダー

毎日のお出かけをスムーズで快適にする Tebra

鍵はカバンやポケットにしまったままで、
施錠、解錠。
Tebra キーを持っているだけで、
マンションのエントランスから自宅の
玄関扉まで、スムーズに通過できます。
カバンからキーを探し出す必要がなく、
ストレスフリーで出入りできます。



Tebra キー

株式会社シブタニ クラビス事業部 http://www.clavis.jp	
●東京 〒113-0033 東京都文京区本郷 1-24-1 リーフスクエア本郷ビル TEL:03(5802)6887 FAX:03(5802)8070	●大阪 〒542-0082 大阪府大阪市中央区島之内 2-12-21 TEL:06(6211)0640 FAX:06(6214)3685

Clavis

写真マンガでわかる (プロのノウハウ)

工務店の クレーム対応術

日本建築協会 (企画)

玉水新吾・青山秀雄 著
阪野真樹子 マンガ

四六判・220頁
本体2000円＋税

施主の満足度を高め、
選ばれる工務店に
なるためのヒントが
満載！

住宅づくりの
現場で
よくある
クレーム
を網羅！
「事前説明のしかた」と
「発生後の対応法」
がわかる



学芸出版社

〒600-8216
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入

Tel 075-343-0811
Fax 075-343-0810

<http://www.gakugei-pub.jp/>
E-mail info@gakugei-pub.jp

第15回 読者と選ぶ 「建築と社会」賞の ためのアンケート 回答募集

2015年1～12月号
「建築と社会」誌から

*2015年の誌面詳細は、2015年12月号p48に掲載している総目録または日本建築協会HPをご覧ください。

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい地域性や社会性に配慮し、建築・環境技術の進展や文化の醸成に寄与する建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

■選考対象

「建築と社会」2015年1～12月号に掲載された作品、および論文・記事を対象とする。

- ・「作品作風頁」、「gallery頁」、「本会支部作品頁およびそれに準ずる作品頁」掲載の建築作品
- ・「特集頁」掲載の論文、特集の企画
- ・「シリーズ頁」の論文・記事（法令コーナー、構造の頁、設備の頁、再読関西近代建築、関西の建築界／群像、新建材の頁、素材最前線、REPORT頁、Member's Forumほか）

■会員読者による第一次選考

会員読者から投票された「作品」および「論文・記事」に、編集委員会の意見を加味して各部門10点程度選出。これを第二次選考対象とする。

■選考委員会による第二次選考

第一次選考を通過した選考対象を、選考委員会で選出。（該当者に写真、図面、設計主旨などの説明資料を求めることがある）

■第15回選考委員

田中直人（島根大学大学院・特任教授／選考委員長）
阿部浩和（大阪大学大学院・教授）
高砂正弘（和歌山大学大学院・教授）
多賀謙蔵（神戸大学大学院・教授）
弘本由香里（大阪ガス株式会社・文化研究所・特任研究員）
近本智行（立命館大学・教授）

■賞の部門

作品部門／1～4点

論文・記事部門／1～4点

その他部門（特別賞）

■発表と表彰

作品部門は建築主、設計者、施工者の中の代表者に、論文・記事部門は執筆者（複数の場合は代表者）に、賞状（記念楯）を贈呈する。表彰式は6月中旬を予定。入賞発表は「建築と社会」2016年7月号予定。

■投票締め切り

2016年3月1日（火）

■送付先

（一社）日本建築協会

FAX 06-6946-6984

E-mail: jigiyoka@aaj.or.jp

〒540-6591

大阪市中央区大手前1-7-31

OMMビル7階

日本建築協会ホームページ <http://www.aaj.or.jp> から、ご投票いただけます。

「建築と社会」賞 読者アンケート

送付先

（一社）日本建築協会
FAX 06-6946-6984
E-mail: jigiyoka@
aaj.or.jp

「建築と社会」2015年1～12月号で、よいと思われた作品・論文・特集企画・記事（特集の場合は個々の論文・記事を対象とする）、その他本誌に対するご意見を記入の上、E-mailまたはFAXで、（一社）日本建築協会へご投票下さい。

（2015年〇〇月号掲載の作品、論文・記事名及び同執筆者名を明記してください）

（1）お名前

（2）勤務先または連絡先

（3）とくによいと思われた作品とその理由

（4）とくによいと思われた記事とその理由

（5）本誌についてのご意見や、取り上げてほしい内容などがありましたら、ご記入下さい。

U-35委員会企画 3rd action「建築と共有」 第1回 学生アイデア コンペティション 公開審査&講評会お よび交流会のご案内

と き 2016年2月20日(土)
13:30~16:30
と ころ デザイン・クリエイティ
ブセンター神戸 (KIITO)
アクセス 阪神「神戸三宮」駅、阪
急「神戸三宮」駅、JR
「三ノ宮」駅より、フラ
ワーロードを南へ徒歩20
分、国道2号線を越えた
神戸税関東向かい



『共のレシピ』

スマートフォンは、発売以来、私たちの生活を劇的に変化させ続けている。SNSやシェアリングサービスなどネットワーク上での個人同士の自由な繋がりは、若者を中心に日常的コミュニケーションの重要な位置を占め始めており、私たちは「いつ・どこにいても」必要な情報や繋がりにアクセスできる自由を手に入れた。

一方、私たちの社会が古来より培ってきたコミュニティ母体（家族、集落、団地、公園、広場、学校、自治体、商店街、お祭りなど）の縮小化・希薄化・孤立化に対し、シェアハウスやFAB Cafe、エリアマネジメントなどは、既成の仕組みを掛け合わせることで「場所に根差したコミュニティ」を再定義し、新しい共同体としての価値を生み出していると言える。

場の拘束から離れ、自由の身となった個の集合体が、敢えて場を共有することで生まれる豊かな繋がりの場（＝『共（きょう）』）とはどういったものだろうか。素材の持ち味を掛け合わせて料理するときの「×」（掛け算）のメソッドで、次世代の社会問題に鋭くメスを入れる、独創的で美味しい『共のレシピ』を期待したい。

■開催詳細

日 時 2016年**2月20日**(土)
13:30~公開審査
15:00~交流会
※12:00より受付開始

講 評

◎猪熊 純氏（首都大学東京助教、
成瀬・猪熊建築設計事務所）

◎前田昌弘氏（京都大学助教）

会 場 デザイン・クリエイティブ
センター神戸 (KIITO)
3階 303号室

参 加 費 (交流会費込)
学 生 500円
個 人 会 員 500円
上記以外一般 1,000円

定 員 100名 (先着順)

申 込 み FAXまたはE-mailで
①催し名「U35アイデアコ
ンペ講評会」

②氏名（ふりがな）

③年齢

④学校名または職場名

⑤住所、電話番号

⑥学生・個人会員・一般の種別

⑦メールアドレス（※受付後、
参加証を送付します）

参加申込締切日 2016年2月8日(月)

申 込 先 (一社)日本建築協会
(担当：井筒)
TEL 06-6946-6981
FAX 06-6946-6984
E-mail: hensyu@aaj.or.jp

■「建築と共有」開催主旨

2015年12月より、大学院生・大
学生・短大生・高等専門学校生らを対象
に、「共のレシピ」をテーマとして、ア
イデアコンペ作品を募集しています
(作品締切日は2月8日)。

寄せられたコンペ作品は、U-35委員
会からの事前審査を経て、上位数点の作品
について、公開審査を実施。この公開
審査では、応募代表者が作品について、
プレゼンテーションを行います。次世
代（スマホ世代）は、「共有」にどのよ
うなイメージをもって語るのか…、果
たして、どのような感性・感覚をもっ
て「つながり」を「場」へと落とし込
むのか…。

ゲスト審査員の猪熊氏、前田氏には、
それらの作品について、たっぷりと講
評を語っていただきます。

賞のほか内容等については、今後、
U-35のfacebookや協会ホームペー
ジで公表しますので、右記アドレスにア
クセスしてください。

交流会では、軽食を準備します。学生、
ゲスト審査員、来場者、U-35委員会の
メンバーらが一堂に会し、それぞれが
持ち寄った共有についてのアイデアを
着に、そこそこで生み出される「共有
の場」を楽しんでいただければと思っ
ています。

ゲスト審査員プロフィール

猪熊 純



1977 神奈川県生まれ
1996 栃木県立宇都宮高校卒業
2002 東京大学工学部建築学科卒業
2004 東京大学大学院工学系研究科建
築学専攻修士課程修了
2004-06 千葉学建築計画事務所勤務
2007 成瀬・猪熊建築設計事務所共同
設立
2008 首都大学東京助教

建築をはじめ、プロダクトやまちづくりまで
様々なデザインを手がける。近年「シェア」
をテーマとして、新しい運営と空間を一体的
に捉えた活動を展開している。
代表作に「柏の葉オープンインノベーションラ
ボ（通称KOIL）」。

■U-35委員会とは

日本建築協会における「若手設計者を
中心とし業種・組織を超えた同世代
をつなげるプラットフォームの創出、
U-35世代の多角的な視野の獲得、建築
における多様な価値の社会への発信を
活動の目的としています。

1st actionは、2013年11月「建築と
木材」をテーマに、「大阪木材仲買会館」
の見学会および3名のパネリストを招
いての講演会・交流会を実施しました。
多数の方にご参加いただき、大成功を
おさめることができました。

2nd actionは、2014年6月「建築
と広場」を開催。うめきた再開発のさ
きがけ「グランフロント大阪」に携わ
る4名のパネリストを迎え、そこでの
体験を語ってもらい、ディスカッショ
ンを行いました。参加者も増え、世代
を超えた交流を生み、この企画自体が
「広場」になりえたのではないと思っ
ています。

◆
U-35委員会facebook
↓↓↓
www.facebook.com/U35.aaj
◆
日本建築協会HP
↓↓↓
<http://www.aaj.or.jp/news/u-35-01.html>

前田昌弘



1980 奈良県生まれ
1999 奈良県立奈良高校卒業
2004 京都大学工学部建築学科卒業
2006 京都大学大学院工学研究科建築
学専攻修士課程修了
2012 京都大学大学院工学研究科都市
環境工学専攻博士後期課程修了
博士（工学）
2013 京都大学助教

地域コミュニティの継承・発展、および平時－
非常時の関係という視点から居住空間づくりの
研究を行っている。京都、東北、スリランカ等
でフィールドワークや実験的プロジェクトに取り
組む。著書に「世界住居誌」、「自然災害と復
興支援」、「津波被災と再定住」（近刊）等

若き創造者たちへ

「第63回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（平成28年3月30日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
2. 原則として、すいせん者を併記する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。
3. 応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしたぐれた実績について、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。
5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第63回青年技術者特集号」（平成28年6月号予定）に掲載する。

6. 提出資料

■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードして下さい。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

A：業績資料（A3版5枚以内／書式は任意）

- ① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料
- ② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料
- ③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料

B：青年技術者の思い（A4版2枚以内／書式は任意）

上記業績資料に記載した業績において、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明をしてください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望等について簡潔にまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限りです。**この資料は、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えていますので、十分配慮して下さい。**

7. 提出期限 平成28年3月28日（月）

8. 提出先 （一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャンダイズ・マートビル7階

電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984

E-mail : jigyoka@aaj.or.jp

9. 提出方法 郵送（当日消印有効）または持参

10. 青年技術者選考委員会（予定）

委員長 米井 寛／（株）東畑建築事務所
常務取締役本社オフィス代表

委員 佐々木 栄／（株）昭和設計執行役員建築部門設計推進室室長
高梨雄二郎／（株）竹中工務店開発計画部長（西日本担当）
長尾 健／長尾健建築研究所代表
吉岡 聡司／大阪大学大学院キャンパスデザイン室准教授
辻 聖晃／京都大学大学院工学研究科建築学専攻准教授
山浦 晋弘／（株）安井建築設計事務所構造部長
小倉 良友／（株）日建設設計エンジニアリング部門
設備設計グループ副代表兼部長
井村 隆／清水建設（株）関西事業本部設備設計部
劔古 敬／（株）大林組大阪本店建築事業部生産技術部部長
山辻 直樹／大成建設（株）関西支店建築部購買管理室課長

会告

日本建築協会

<予告>

第32回茶室見学会
大徳寺
三玄院の篁庵(こうあん)
と玉林院の蓑庵(さあん)

通常非公開

日 時 2016年**3月26**日(土)
14:00~17:00 (予定)

講 師 中村昌生氏
京都工芸繊維大学名誉教授

見 学 先 大徳寺 三玄院
京都市北区紫野大徳寺町76
大徳寺 玉林院
京都市北区紫野大徳寺町74

集合場所 未定

最 寄 駅 地下鉄「北大路」駅
市バス「大徳寺前」

定 員 35名/会員優先

※参加費、その他、申込方法の詳細は、
3月号およびホームページに掲載致
します。主 催 (一社)日本建築協会事業委
員会情報見学小委員会日本建築協会中国支部主催
建築工事实務講習会

■講習会会場
(広島工業大学 広島校舎)
・広島市内電車 袋町または中電前
下車
・広島バス 平和記念公園前下車



この講習会は、建築CPD情報提供
制度プログラムです。
(公社)広島県建築士会 (6単位)
(公社)日本建築家協会 (6単位)

日 時 2016年**2月18**日(木)
9:30~17:00

会 場 広島工業大学 広島校舎
広島市中区中島町5-7

定 員 60名

受講料 15,000円(含テキスト代 税込)
※テキストは、当日配布させていただ
きます。

■申込方法
FAXまたは中国支部へ直接

- ①講習会名
- ②〒・住所
- ③受講者氏名
- ④事業所名
- ⑤担当責任者
- ⑥電話番号・FAX番号
- ⑦受講料支払方法(銀行振込等)
- ⑧CPDを申請される方は、申請先の団
体名をお知らせ下さい。

受講料は前払制となっていますので、
併せて銀行振込等で納入して下さい。
受講料入金確認後、受講票をお送りい
たします。

■申込締切 2016年2月10日(水)
(定員になり次第締切)

■受付時間 9:00~17:00
(土、日、祝除く)

■申込先
(一社)日本建築協会 中国支部
〒730-0805 広島市中区十日市1-1-9
(相生通り鷹匠ビル4階山陽工業(株)内)
TEL 082-232-6471
FAX 082-291-2233
E-mail: info@aaj-chugoku.jp
URL: http://www.aaj.or.jp

<取引銀行>

- 広島銀行
本川支店(普通 3424438)
シャ)ニホンケンチュクキョウカイ
一般社団法人日本建築協会

■趣旨と内容

- 本講演会は、官公庁・設計事務所・
建設業をはじめ、設備・営繕など幅広
い分野の技術者を対象としたものです。
- とくに取り付きにくい施工計画と仮
設見積、現場実務の基礎である積算業
務に重点をおき、講義します。
- 都市環境の変化に伴う法令・基準の
改正なども加え、技術の進歩に即応し
た知識の習得をはかります。
- 「積算業務」では具体例より、その
着工準備から完成に至るまでをわかり
やすく解説します。

施工計画

井上 昇 氏

清水建設(株)広島支店
工事長

適切な施工計画を立案できることが、
建築現場技術者の必須条件です。
安全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積

尾野本 悟 氏

広島工業大学
教授

仮設工事費は、一般には非常に把握し
にくい面があって、ついつい単位面積
当たり、あるいは請負金比率のみで処
理されがちです。
施工計画に基づいた合理的で迅速な見
積方法を解説します。

積算業務

横段 隆弘 氏

横段建築事務所

見積業務のなかで基本となるのは、数
量積算です。この手順、基準を基本に、
より合理的で正確な積算業務を解説し
ます。

建築と社会

Architecture and Society

2

vol.97 No.1127

2016

特集予告

03 04
月 月
号 号
… 第22回会員作品
東 私の空間作法
海 特集

今月の表紙

高瀬川源流苑



京都・木屋町界隈の風景をつくる高瀬川。
高瀬川は、1611年に角倉了以によって舟運のために開削された、鴨川を水源とする運河である。その取水口に「高瀬川源流苑」はある。

もともとは角倉邸内の庭園で、つまり高瀬川は一度ここを流れていくのである。

明治期には山県有朋のもと小川治兵衛により改修されており、また苑内に小堀遠州の茶庭があるなど、歴史が積み重なっている庭園である。

現在はレストランチェーン会社により所有・管理されており、レストラン内の庭として鑑賞することができる。

(多田正治)

表紙デザイン・撮影 多田正治
(多田正治アトリエ)

特集： 非日常の棲み処～寝泊まりの進化

目次

【総論】

旅行＝移動すること・滞在すること | 柏木 博 14

【各論】

1 寺に寝泊まりした人々 | 井上章一 18

2 宇宙に住む～宇宙ステーションとそれ以降～ | 岩田 勉 20

3 高野山ゲストハウス | 竹口健太郎+山本麻子 22

4 インタビュー リノベーション系ホステル | 中谷ノボル 24

5 グランピング～オルタナティブリゾートの観点から～ | 加藤文人 28

6 DANCHI Caravan in 町田山崎団地
～団地deキャンプ&防災ワークショップ～ | 吉田裕輔 30

【編集後記】

32

連載	会告	第15回読者と選ぶ「建築と社会」賞のためのアンケート回答募集	1
		U-35委員会企画 3rd action「建築と共有」第1回学生アイデアコンペティション公開審査&講評会および交流会のご案内	2
		第63回青年技術者顕彰のご案内	3
		予告 第32回茶室見学会 大徳寺三玄院の簠庵と玉林院の蓑庵、平成27年度建築工事実務講習会（中国支部）	4
作品作風		京都学園大学 京都太秦キャンパス	6
		EXPOCITY	8
		浄土宗龍淵寺 本堂	10
gallery		医療空間に生まれる優しさをデザイン	12
法令コーナー		集合住宅に附置すべき駐車施設の整備基準を見直し—「神戸市民の住環境等まもりそだてる条例施行規則」を改正—	33
再読 関西近代建築 一論考・ 記事編一		江村郊邸「住宅改造博覧会を覧て」	34
建築と社会を 考える		日土小学校と建築家・松村正恒から考えた「もうひとつの」建築と建築家について	36
設備の頁		一時避難エリアの活用により歩行困難者等の避難安全性を高めた超高層分譲住宅	42
新製品レビュー		キーはカバンに入れたまま。『Tebra』ならハンズフリーでかんたん施錠。 株式会社シブタニ クラビス事業部	43
		グラフィックコンクリート～新しい打ち放しコンクリート～	44
information		長谷寺の名宝と十一面観音の信仰／ポッティチェリ展／志村ふくみー母衣（ぼろ）への回帰—伊豆山神社の歴史と美術	46
月間の動き		平成27年12月	48



所 在 地 京都府京都市右京区山ノ内五反田町18番地
 敷地面積 32,567.21㎡
 建築面積 5,264.07㎡
 延床面積 16,555.41㎡
 構造規模 RC造・S造 地上4階
 工 期 2014年1月～2014年12月
 最 寄 駅 京都市営地下鉄東西線 太秦天神川駅
 撮 影 エスエス（大阪）

京都学園大学 京都太秦キャンパス

建 築 主 学校法人京都学園
設計・監理 清水建設関西事業本部一級建築士事務所
施 工 清水建設

京都学園大学の新キャンパス。大学学部の改組新設に伴い、京都市の山ノ内浄水場跡地活用事業に応募し京都学園が事業者決定。従来の亀岡キャンパスとあわせてダブルキャンパスとなった。

建物配置は、平安時代に定められ現在も京都の街区形成の基本となっている120mグリッドの考え方を踏襲し、京都の街並みとの調和を図った。外観は「新しい大学・新しい魅力」をキーワードに、御池通に対して掘りの深いランダムな開口部を設ける等、各面でデザインに変化を与えた。2層分のスペースを利用したみらいホールには500席のロールバックチェアを設置し、各種講演会やイベントにも対応できるよう計画した。

外構は開かれたキャンパスとして街との境界を無くし、敷地中央に配置されたセンタープラザは周辺地域の方々の憩いの場になっている。ランドスケープは雨水の浸透貯留をデザインに反映した「レインガーデン」の考え方に基づいて計画した。

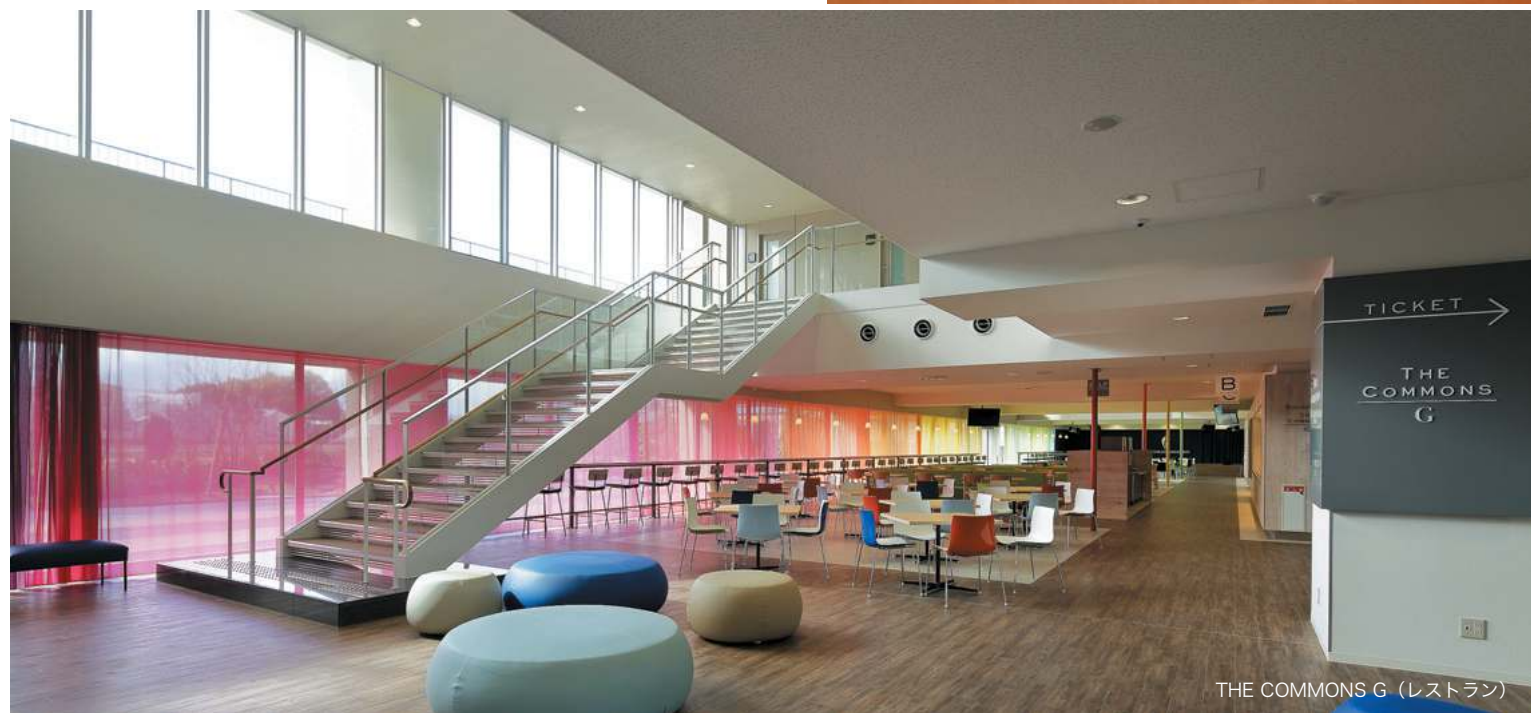
(加藤 均・松田 大／清水建設)



センタープラザ（レインガーデン）



みらいホール



THE COMMONS G（レストラン）



ロビー



EXPOCITY

建 築 主 三井不動産株式会社
 設計・監理 竹中工務店
 施 工 竹中工務店・竹中土木共同企業体

■非日常のドキドキと未体験のワクワクを！

「EXPOCITY」は吹田市の万博公園にオープンした、商業施設とエンターテインメント施設群からなる日本最大級の複合施設です。千里丘陵の起伏ある地形や豊かな自然を取り込んだデザインとすること、そしてEXPO'70の熱気と興奮をここに新たに呼び起こすことを目指しました。

■街としてのスケール

多彩なエンタメ施設群を分棟配置して、個性豊かで賑やかな街並みを創出しました。アプローチに沿って10mの高低差を持つオープンモールは、上下移動と視線の変化を伴う楽しい歩行空間となっています。

■ワクワクするモール空間

商業棟内部は、EXPO'70のレトロフューチャーな高揚感を呼び起こすダイナミックな立体天井のある「東モール」や、カスケード状に連続する光庭から溢れる自然光と木々の緑のある「西モール」、そして「太陽の塔」の赤と白で構成された象徴的な「光の広場」、それぞれに特徴ある内部空間が連続しお客様の回遊性を高めます。屋外広場は、リズムカルに並ぶ樹々や光と音の演出装置「KAZAMI」を備えた賑わいのあるオープンスペースです。

■環境への配慮

敷地の高低差をそのまま利用することで造成を極小化し環境負荷低減を図りました。また敷地の21%を緑化し、緑豊かな外部環境の形成を目指しました。

■海遊館が初プロデュースする「NIFREL」

「感性にふれる」をコンセプトとして、生物多様性をアートと融合させた新しい展示にふさわしい非日常空間の創出を目指しました。EXPOCITYのランドマークとなるこの建物には、水生生物を連想させる多孔質で有機的なフォルムと、耐力壁のない自由な展示空間を実現する新技術「ウェブ・ウォール構造」(特許出願済)を採用しました。自然採光と自然換気により照明・空調エネルギー負荷低減もはかる、環境にやさしい建築です。

(原 哲也・茨木 保・山田義浩・酒井道助・北村仁司・伊藤 剛・

内田恭一郎・藤井洋之・浮田長志／竹中工務店)



所在地 吹田市千里万博公園2-1
 敷地面積 171,485.63㎡
 建築面積 82,752.11㎡
 延床面積 222,506.22㎡
 構造規模 S造・一部RC造 地下2階・地上3階(主要建物)
 工期 2014年7月～2015年10月
 最寄駅 大阪モノレール・万博記念公園駅
 撮影 古川泰造／竹中工務店
 空撮撮影 エスエス大阪支店



オープンモール



NIFREL 外観



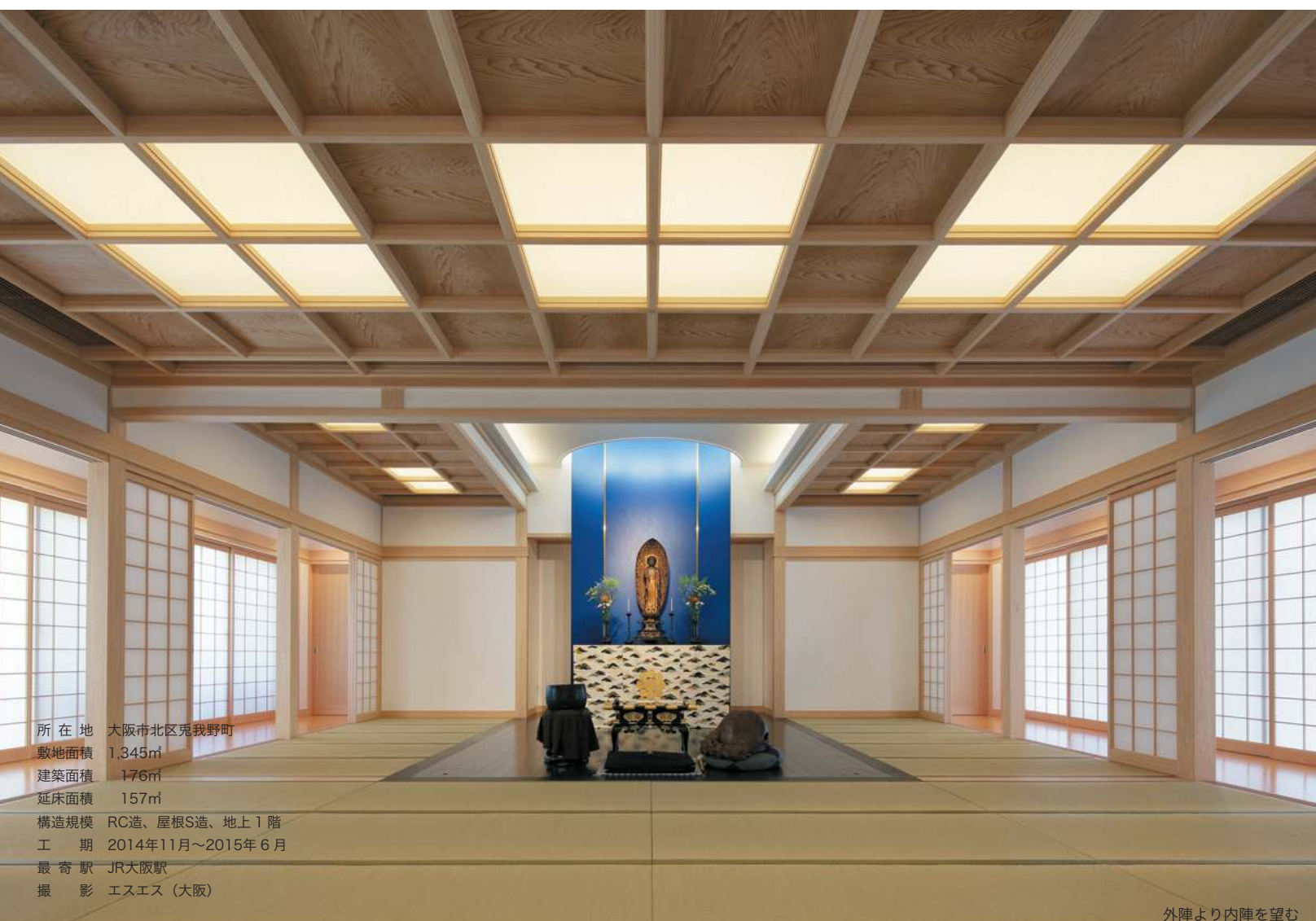
ウェブ・ウォール構造の外壁



展示室「みずべにふれる」



展示室「いろにふれる」



所在地 大阪市北区兎我野町
敷地面積 1,345㎡
建築面積 176㎡
延床面積 157㎡
構造規模 RC造、屋根S造、地上1階
工期 2014年11月～2015年6月
最寄駅 JR大阪駅
撮影 エスエス（大阪）

浄土宗龍湫寺 本堂

建 築 主 宗教法人龍湫寺
設計・監理 大林組大阪本店一級建築士事務所
施 工 大林組

浄土宗龍湫寺は大阪梅田に程近い小さなお寺である。かつて寺町と呼ばれたこの地域も都市化の影響を受け、周囲に事務所ビルや高層マンションが建ち並んでいる。

今回は、通りに面した本堂を接客・寺務機能に改修し、庫裡とに挟まれた境内中央に新たに本堂を建設する計画である。都会の中でも御仏と静かに向き合うことができる落ち着いた空間が住職の願いであった。

屋根は、境内の中心であることから、宝珠を据えた六寸勾配の方形とし、外壁は柱梁の構成を素直に表現するにとどめた。新本堂へは、改修された旧本堂から新たに渡り廊下で接続した。内部空間は白木の造作による明るく落ち着いた雰囲気としつつも、端正な格天井が程よい緊張感を持たせている。また内陣と外陣は一体とし、過剰な装飾は用いず、唯一御仏の背面を群青色の独立壁とし、三方からの採光を確保、日毎に変化する光が御仏の様々な表情を映し出すしつらえとした。

墓地の横で静かに佇む新本堂を囲むこの境内が、都心の景観の一部としてひいては人々の心象風景にまで溶け込んでいくことを願っている。

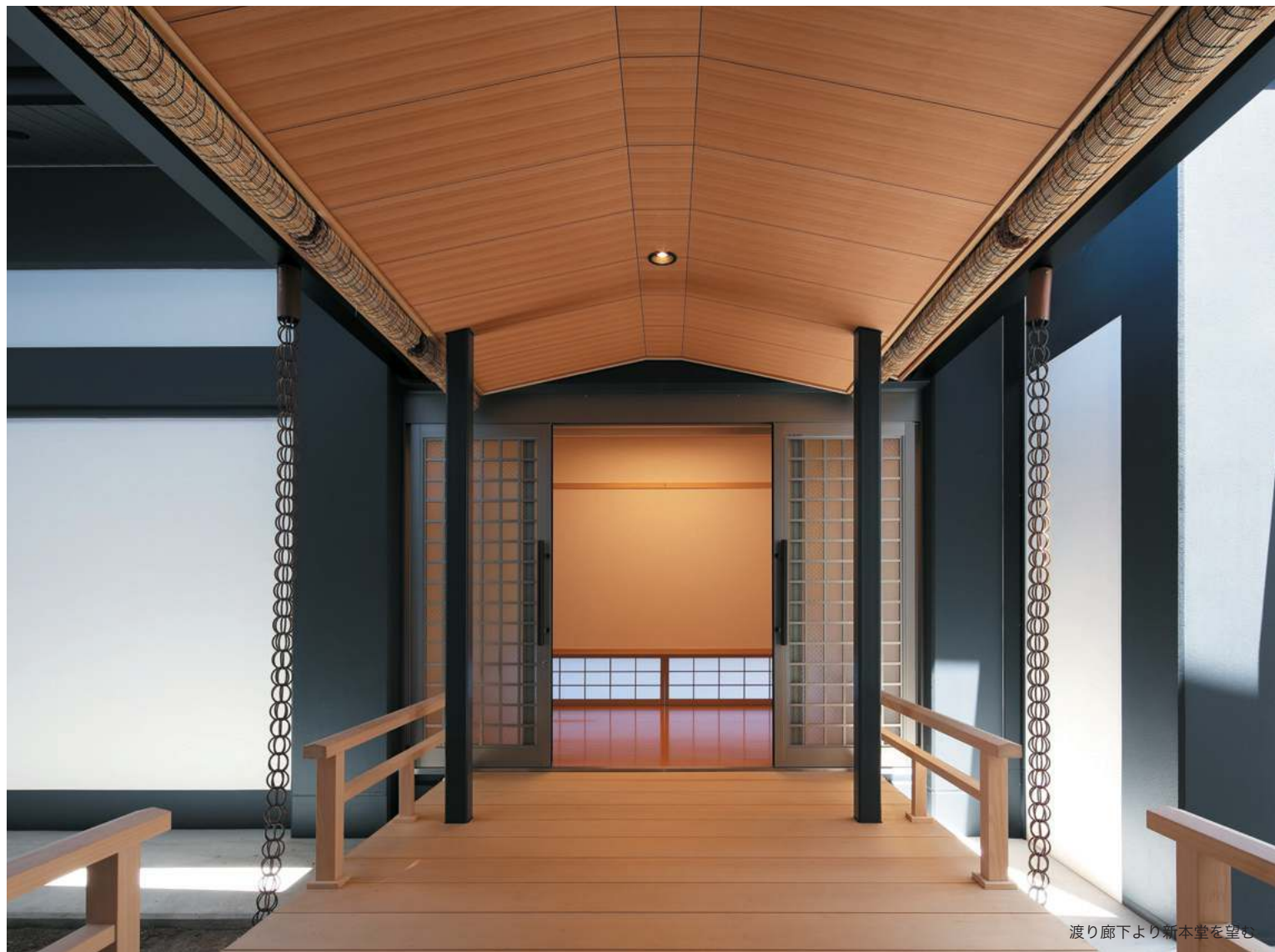
(稲葉一秀／大林組)



境内全景



南側道路より旧本堂を望む



渡り廊下より新本堂を望む

まち

建築

ひと

gallery

医療空間に生まれる
優しさをデザイン

インテリアデザイナー

西尾 敏靖

社会情勢の変化と共にまち、建築とひとの関係が多様化しています。

医療施設においても高齢化や少子化と共に求められる役割が変化し、総合病院と地域のかかりつけクリニックではその機能や目的も異なりましたが、より一層それぞれに求められるものが進化しています。

生活に密着している地域のかかりつけクリニックは、専門性が必要となり、その役割と機能を介して地域や人と密接な関係を築く街のコミュニティースペースとしての役割も求められるようになりました。

膨らむ健康への関心と不安に応えるため最新でスピーディーな検査機器導入やデジタルシステム化など最新鋭のハイテク技術の必要性、その一方では体についての思いや不安感を共有するために、日常の会話が出来たり暗くなりがちない思いを明るく気持ちにする温かみやぬくもりのあるローテクな空間がニーズであると考えています。

そこで会話を生むスペースとしてソファには円をデザインし、繋がるというテーマを持たせました。

隣りに座る人との距離を埋め、共通の空間を実感しながら自然に会話が始まるスペースをイメージしています。

地域医療クリニックでは、診察や検査を受ける不安感を、デザインの意図で優しく包み込める空間になればと願い、デザインに取り組んでいる次第です。

西尾 敏靖（にしお としやす）

1960年 岐阜県生まれ

1982年 愛知工業大学土木工学科

1983年 東京デザイナー学院SD科

1985年 T&O+STUDIO

1990年 松田平田設計

2003年 240design studio設立

企画編集：居内章夫（作品作風小委員会）



囲むように座る待合空間（たきかわ循環器内科クリニック）



大きな木の壁面イラストに包まれる待合空間（しんむら整形外科クリニック）



公園にいる心地よさを意図した待合空間（パークサイド脳神経外科クリニック）

特集

非日常の^す棲み^か処～寝泊まりの進化

私たちはその人生において、幾度となく自分の住み家ではない場所で寝泊まりする。かつては旅館・ホテルがその中心的役割を担っていたが、(現在もそうだが)近年、新しい寝泊まりのありかたを模索する動きが活発化してきている。人は様々な場所で、様々な状況で寝泊まりする。仕事であったり、レジャーであったり、一人であったり、多人数であったり・・・

現代社会において、旅は「行く」だけではなく「過ごす」事こそ重要視されるようになってきている。人々が旅先(=非日常)に求めるものはどう進化してきているのだろうか?その非日常の「棲み処」での「過ごし方」に様々なアプローチで果敢にチャレンジしている取り組みにスポットを当てることで、「寝泊まり文化」の進化を探ってゆきたい。

編集委員 黒柳 亮



【総論】

旅行＝移動すること・滞在すること／柏木博

【各論】

- 1 寺に寝泊まりした人々／井上章一
- 2 宇宙に住む～宇宙ステーションとそれ以降～／岩田勉
- 3 高野山ゲストハウス／竹口健太郎＋山本麻子
- 4 インタビュー リノベーション系ホステル／中谷ノボル
- 5 グランピング～オルタナティブリゾートの観点から～／加藤文人
- 6 DANCHI Caravan in 町田山崎団地～団地deキャンプ&防災ワークショップ～／吉田裕輔

【編集後記】

企画：インテリア・住宅系分科会

今井充彦／川合隆之／工藤理隆／黒柳 亮／酒井雅男／塚口眞佐子／ペリー史子／間瀬一博

総論

旅行＝移動すること
・滞在すること

柏木 博

武蔵野美術大学 教授

柏木 博

1946年神戸生まれ。武蔵野美術大学卒。
現在、視覚文化に関する本をまとめようと思っている。
著作『家事の政治学』岩波書店、『モダンデザイン批判』岩波書店、『「しきり」の文化論』講談社、『玩物草子』平凡社、『探偵小説の室内』『日記で読む文豪の部屋』白水社ほか多数。
勝見勝賞、意匠学会賞受賞。

移動空間のすこし方

それが仕事のためであれ、観光のためであれ、あるいは他の目的であっても、いずれにせよ、「旅行」は、空間を移動していくことであり、日帰りということもあるが、多くはホテルや旅館など仮の住まいにある期間、仮の生活をするということだ。

まずは、移動ということについてである。ホテルや旅館あるいは下宿などの仮の住まいについては、その後に検討することにしよう。そして、そのどちらもが、非日常的な空間体験になっているといえるだろう。

徒歩や自転車での移動の場合、クルマや列車のような移動空間の中から窓外の風景を体験するのではなく、ある場所から目的の場所までの風景の中にあって、それを体験していくことになる。自動車や列車での移動であれば、窓外の風景を視覚的に体験すると同時に、移動していく室内を体験しているということになる。これが航空機での移動となると、窓外の風景を体験することは、ごくわずかになり、ほとんどが移動する室内体験でしかなくなる。

19世紀から20世紀にかけての世紀転換期の鉄道について、同時代に出現したガラス建築（たとえば水晶宮）による空間体験と同様の衝撃をわたしたちに与えたのだとヴォルフガング・シヴェルプシュ『鉄道旅行の歴史』¹⁾は述べている。

「時間・空間の意識、つまり運動の意識は鉄道によりショックを受けたが、ガラス建築も建築に対する空間意識に、これと同じショックを与えた。技術改革上その後に現われたもの、人工照明と自動車とは、いわばこの最初の強いショックに鍛えられたあとで、体験されることとなる」

旅の体験を語った「旅行小説」に終止符を打ったのも鉄道だとシヴェルプシュは指摘している。風景の中を、それまでにない速度で直線的に走り抜けていく鉄道が、旅行者と風景空間との親密な関係を破壊する。「風景空間（der Landschaftsraum）が地理的空間（der geographische Raum）になった」（シヴェルプシュ）ということだ。旅行者は、移動する

室内空間によって外部空間を分離する。したがって、移動する室内を体験するとともに、窓外の流れる風景の視覚体験をする。この視覚体験をシヴェルプシュは「パノラマ的」視覚体験という。

「パノラマ的にものを見る目は、知覚される対象ともはや同一空間に属していない。この目は、それが乗って移動する装置越しに、対象、景色その他を見ている。この装置、つまりこの装置が作りだす動きが、この目に作用し、それゆえこの目はもっぱら動きながら物をみることしかできないのである」

この視覚体験は、窓というフレームをとおくことでしか成立しない。したがって、窓の内側の室内でこそその視覚体験である。「鉄道が速い動きで作って見せる舞台面は、強調するまでもなく、パノラマである」と、シヴェルプシュは、視覚装置「パノラマ」と車窓を結びつけている。さらにいえば、ヴァルター・ベンヤミンは、『パリ ― 十九世紀の首都』で、「パノラマは写真をとびこえて無声映画の、さらにはトーキー映画の先駆けとなっている」²⁾という。列車の「窓」についていえば、それは映画フィルムのフレームに似てもある。たしかに、それは映画というイメージ体験へとつながっていた。

列車による旅は、風景を眺める非日常的な移動室内の体験だといえる。しかし、列車の中にいるわたしたちは、流れていくパノラマをひたすら眺めているわけではない。列車の中での行為について記述した小説は、おそらく無数にある。ミシェル・ビュトールの『心変わり』³⁾では、パリからローマにむかう列車の窓からの風景の流れ、そして乗客や彼らの衣服や荷物についての詳細な描写が積み重ねられていく。そうしたことによって主人公の心の動きを語っている。

たとえ同じ場所に向かう同じ時刻の列車に乗ったとしても、日程が違えば二度と同じ視覚体験を与えてくれるわけではないことを、ビュトールによる視覚体験の微細な描写は、伝えてくれる。移動空間での体験というのは、一回性しかない、したがって非日常的な体験

なのである。旅の多くは視覚的体験をするということだといえる。

さらにいえば、わたしたちのまなざしは、一点に向けられているわけではなく、窓の外や、乗客や荷物などをきざぎざに見ていることを認識させてくれる。それは、移動空間の中でのわたしたちの思考が長時間持続することはまれで、断片的でしかないものであることを教えてくれる。1957年に書かれた『心変わり』は、移動空間を中心とした新しい「旅行小説」だったといえる。

日本文学に目をむけるなら、漱石の『三四郎』⁴⁾の冒頭が、熊本から東京にむかう列車での物語となっている。それは、この物語全体からすればごくわずかな部分であるが、東京という新たな空間へと入り込んでいく旅として、小さくはあるけれど重要な物語となっている。物語の一行目は、次のように始まる。

「うとゝゝとして眼が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めてゐる」

主人公の三四郎は、列車の中で眠っていた。眼が覚めると、三四郎が気になる乗り合わせた女が合い席をしていた爺さんと話をしている。列車は、居眠りをしたり、出会った誰かと会話する空間でもあった。

「三四郎は鮎の煮浸しの頭を啣へたまま女の後姿を見送つてゐた。便所に行つたんだなと思ひながら頻りに食つてゐる」

列車は弁当を食べるダイニングでもあり、トイレも用意されている。

「本でも読んで気を紛らかさうと思って、革靴を開けて見ると、昨夜の西洋手拭が、上の所にぎつしり詰つてゐる。そいつを傍へ掻き寄せて、底の方から、手に障つた奴を何でも構はず引出すと、読んでも解らないペーコンの論文集が出た」

三四郎は、鞆の中に書物を用意していた。列車は読書空間でもある。さらに引用してみよう。

「髭のある人は入れ換つて、窓から首を出して、水蜜桃を買つてゐる。

やがて二人の間に果物を置いて、

『食べませんか』と云つた。

三四郎は礼を云つて、一つ食べた。髭のある人は好きと見えて、無暗に食べた。三四郎にもつと食べろと云ふ。三四郎は又一つ食べた。二人は水蜜桃を食べてゐるうちに大分親密になつて色々な話を始めた」

広田先生に果物をすすめられる場面だ。列車の室内は、社交の空間になる。

そうした列車の室内は、まさに非日常的な室内空間であった。ホテルや旅館に劣らぬ多機能空間である。そうした多機能のなかからいくつかが今日では特化された移動室内としての列車がデザインされている。現在、九州で運行されている「ななつ星」は、ほとんど移動するホテルあるいはダイニングである。こうした移動空間は、戦前からあるタイタニックに象徴される客船がモデルになっている。いわば移動するホテルである。移動する室内のもっとも特徴的なことは、視覚装置だということだ。

他方、窓外の風景をほとんど見ることもない長距離航空機では、パノラマ装置とはなりえない。したがって、今日では、映画などを見せるDVD装置（それは風景を見せる列車の窓＝ウインドウにかわるものになっている）がセットされている。そして、機内は宿泊空間となる。したがって、座席がベッドとして機能するようになる。座席には、テーブルやマガジンラックなどが設置されている。したがって、長距離航空機では、快適な居住性を実現することが、デザインの課題になっている。しかし、窓外の風景にかわるDVDの映像、そして居住性の良さを実現した航空機も、おそらく列車の延長上にあるといえる。

列車にしても航空機にしても、めざすところの主題（テーマ）は、ふたつだろう。ひとつは、いかに移動時間を短縮できるかということだ。もうひとつは、室内空間の居住性をいかに高め、いわば室内の楽しみを生み出すかということである。

したがって、そのふたつの主題とは、簡単にいってしまえば、「時間」と「空間」ということになる。「空間」÷「時間」＝「速度」。



ロンドンからノーリッチへの列車の客室

このように書いてしまうと味気ないが、この三つの項が、移動する「旅」の体験にかかわっているといえるように思える。

日本の新幹線についていえば、東京から最終駅までの移動時間が四時間を切るかどうか、時間的な主題とされてきた。

航空機に関しては、かつてイギリスとフランスによって超音速旅客機コンコルドが開発され、1976年から2003年まで就航していた。通常の旅客機の約二倍の速度であった。東京・ニューヨーク間の飛行時間は、現在一二時間から一四時間。したがって、仮にコンコルドであれば、六時間から七時間半ということになる。東京から博多までは、「のぞみ」で約五時間、「ひかり」で六時間。いかにコンコルドが時間の短縮をしたかがわかる。しかし、ファーストクラスの約二割増しの高額料金であった。

結局、コンコルドは経済的に成り立たず、就航を終わらせた。現在、航空機は、座席空間を広げ、居住性を向上させつつある。究極的には、ホテルに近い個室の宿泊空間が理想なのだろう。

シヴェルプシュは、1833年にドイツで書かれた列車についての記述を紹介している。

「この汽車の動きは、軽やかで穏やかで快適なものだから、車室で読書ができるばかりでなく、書くことさえできるほどだ。したがって将来旅は、少なくともある種の人たち、たとえば学者、役人、商人といった多数の人たちには、仕事の中断あるいは休息を強要するものではなく、むしろ彼らは車中でそれを続行できるようになるだろう」

列車が移動するオフィスや書斎あるいはリビングの空間になることを180年前の人は夢見ていたのである。

ホテル=仮の住まい・まるで自宅

さて、旅行で体験するもうひとつの空間、つまりホテルなどの宿泊の施設である。ホテルもまた、居住性を主要な主題（テーマ）にしている。しかし、その居住性は、「まるで自宅」に在るかのような体験を与えるものなのか、あるいは自宅では得られないような体験をさせるものか、少なくともふたつの異なった方向があるように思える。

そして、居住性とはまったく重ならないとは言いきれないが、視覚の体験もホテルの性格をきめる要素としてある。その視覚の体験として、もっとも直接的なことは、部屋の窓からの風景である。たとえば、リゾート・ホテルなら海や湖や山あるいは森などさまざまな自然の風景が求められるだろう。都市のホテルでも、窓からの風景がどのようなものであるかが意味を持つ。もちろん、現在では、TVのモニターやパソコンの窓（ウィンドウズ）が室内にあつては、わたしたちの視覚の対象となる。さらに視覚的な対象として設置されているのは、室内に掛けられた絵画や写真のたぐいである。

窓からの風景やモニターや壁を飾る絵画など、視覚的な対象が存在するか否かは、極言すれば、ホテルと監獄の独房とをわける決定的な要素といえる。一望監視という視線こそが監獄の管理の重要なシステムであることは、ミシェル・フーコーが指摘してよく知られている。加えていえば、外界への視線を遮断することが独房空間の重要なシステムだといえるだろう。してみれば、あらゆる生活空間において視覚について操作することが、いかに大きな意味を持つかがわかる。ただし、アメリカの監獄では、窓からの風景は望めないが、独房に段ボールで柵を作ったり、そこに家族の写真や私物を置いたりすることは許されている。独房での生活者が部屋を自らの住まいに近づけていくということである。⁵⁾



バンクーバーのホテルの窓からの風景
港の風景が目を楽しませる

ビジネスであれ観光であれ、ホテルなどの宿泊の施設は、「まるで自宅」のようだと感じられるほどに居心地は良くなる。部屋に持ち込んだ鞆やスーツケースから、自宅ですべてのものを宿泊する室内のしかるべき場所に置く。衣服をクローゼットに入れ、わずかではあれ持ってきた書籍をデスクに置く、そして、パソコンをセットする。

わたしたちは、ホテルのような仮のいわば非日常的な住まいに宿泊するにしても、自宅（日常的な住まい）から、わずかながらでも荷物を持ち込む。この荷物が日常的な住まい、あるいは生活にわたしたちを結びつけているのである。

したがって、そうした自前のものを置くしかるべき家具や設備あるいは空間があることが、居心地を良くする。どうやら、わたしたちは生きるという面では、きわめて保守的だといえるだろう。「まるで自宅」のような部屋を心地良く感じるのは、保守性によっている。こうした保守性は、人間以外の動物にも共通しているのではないか。

もちろん、風景や料理、そして温泉などの設備を楽しむことを目的に特定のホテルなどの宿泊施設に行くということはある。それは、自宅とは異なった非日常的な生活空間を求めたことだといえる。しかし、そうした施設に宿泊しても、「まるで自宅」のようになごすること（日常生活）を、どこかでわずかながら求める保守性が、わたしたちにはあるように思える。たとえば、部屋に、さまざまな飲み物の入った自由に使える冷蔵庫が置かれていることで、やはり「まるで自宅」のような居心地を感じるはずだ。

ホテルなどの宿泊施設の居住性についてさらにいえば、最低限の設備しか持たないホテルの部屋であれ、贅沢なスイート・ルームであつても、通常は、ホテルの客室はキッチン設備を持たない。ホテルでは、朝食だけを取り、昼と夜はレストランなどを利用する。もちろん、キッチンを組み込んだ客室があつたわけではないが、キッチンがついているか否かは、宿泊施設の性質を決定的に変えるものとなる。

四年ほど前に、パリの人類学系の研究所が用意したレジデンスを一週間使わせてもらっ

たことがある。寝室、書斎、バスルーム、トイレ、そしてキッチンがついていた。書斎とキッチンがついているだけで、ずいぶんと「まるで自宅」のような快適さがでてくる。パリのスーパー・マーケットや市場で買った食材を料理して口にできることが、とても新鮮な体験となった。国内でも海外でも同じことなのだが、宿泊先の現地のスーパーや市場で魚介や肉や野菜を見かけても、それを買うことはできない。キッチンがないからだ。してみれば、キッチンがついた宿泊施設は、「まるで自宅」（日常生活）のようなのだが、いつもとは異なる食材を口にできるという非日常的な体験を楽しむことができる。



パリの研究所のレジデンス
書斎の隣に小さなキッチンがついている

旅先で、スーパーや市場の食材を見ることは、そこに生活する人々の暮らしの一面を見る楽しみを与えてくれる。そうした食材を買うことができるということは、スーパーや市場に並ぶさまざまな食材を見る目がそれまでとは違ってくる。

ホテルには、キッチンが無いということ、思い起こされるのは、ル・コルビュジエがつくった「カバノン」というわずか八畳ほどの、別荘である。平面図には、ベッド一台（二台の図もある）、サイドテーブル、ワードローブ一台、洗面器つき棚、本棚、テーブル、箱型スツール2本、そしてフック（ペグ）のついたパネルとトイレが示されている。これだけである。つまり、わずか八畳ほどの空間を家具で構成しているといつていい。キッチンと風呂はない。カバノンをつくるにあつて、ル・コルビュジエは、その土地を隣接する「ひとで軒」というレストランから借り受けた。したがって、食事はレストランを利用するということがキッチンはつくられなかった。キッチンは設けなかったが、自分の別荘であるという意識が、「まるで自宅」（日常生活）のような気分をル・コルビュジエに与え



イギリスのノーリッチのペンションの外観
何も表示がないので、
ここがペンションだとはわからない



同じペンションの部屋
家庭的で気持ちの良い部屋だった

たのだろう。実際、その部屋には、彼が持ち込んだ仕事の道具やさまざまな日用品が置かれていたはずだ。しかし、食事はレストランを利用するという非日常的な生活を楽しむということだったのだろう。

わたしたちは、旅先の宿泊（生活）においても非日常的な生活とともに、「まるで自宅」（日常生活）のような生活を捨てがたく思っているということなのだろう。

ところで、漱石は、1900（明治33）年から1901年にかけて、ロンドンでの生活を日記に記している。また、「永日小品」にロンドンの下宿について述べている。下宿はホテルよりも逗留期間が長くなる。

「始めて下宿をしたのは北の高台である。赤煉瓦のこじんまりした二階建が気に入ったので、割合に高い一週二^{ポンド}の^{しゅくりよう}宿料を払って、裏の部屋を一間^{ひとま}借り受けた。其の時表を専^{せんりよう}領してゐるK氏は目下^{スウェットランド}蘇格蘭巡遊中で暫くは帰らないのだと主婦の説明があった」⁶⁾

この仮の住まいがどのようなものであったのか、漱石はほとんどふれていない。むしろ、下宿の家主の家族についての記述が多い。しかし、K氏の部屋については、よほど気に入ったらしく、その様子を書いている。⁷⁾

「K君の部屋は美しい絨毯が敷いてあって、白絹の窓掛が下がつてゐて、立派な安楽椅子とロッキング・チェアが備え付けてある上に、小さな寝室が別に付属してゐる。何より嬉しいのは断えず^{ストーブ}暖炉に火を焚いて、^{おしげ}惜気もなく光つた石炭を崩してゐる事である。是れから自分はK君の部屋で、K君と二人で茶を飲むことにした」

しかし、

「ある時自分は、不愉快だから、此の家を出やうと思ふとK君に告げた。K君は賛成して、自分はかうして調査の為方々飛び歩いてゐる身体だから、構わないが、君^{など}はもつとコンフオタブルな所へ落ちて着いて勉強したら可^よからうと云ふ注意をした」
そして「一箇月の後^{のち}自分は此の下宿を去つた」

と漱石は述べている。

漱石は、ロンドン滞在中、たびたび下宿を変えている。居心地があまりよくなかったのだろうか。K君の部屋が漱石にとって好ましく思えたのは、家具や調度品が整って見えたからだろう。家具や調度品が、安定した日常的な生活を感じさせたと思われる。ロンドンで、漱石が精神的に消耗したことは、よく知られている。その要因が何であるのかは、わからないが、そのひとつに「住まい」への不満があったかのかもしれない。

1901年2月16日の日記に、漱石は、次のように記している。

「ウチノ下宿ノ飯ハ頗ルマツイ此間迄ハ日本人ガ沢山居ツタノデ少シハウマカツタガ近頃ハ段々下等ニナツテ来タ尤モ一週25shil.デハ贅沢モイヘマイ夫ニ家計ガ頗ル不如意ラシイ可哀想ニ」⁸⁾

旅先では、「まるで自宅」にいるような安定した住まいは、なかなか得られない。もちろん、その非日常的な住まいを楽しむことが、旅行のもたらすもののひとつである。しかし、比較的長期の滞在では、やはり、その室内に「まるで自宅」のような生活空間を望みたくなる。

旅行先の滞在場所の持つ非日常性を楽しむことと「まるで自宅」のような日常性を望むことは、つねにわたしたちの気分のなかで共存している。そのどちらに比重を置くかということが、その時々旅行の仕方や目的によって異なってくるように思える。

（かしわざ ひろし）

参考文献

- 1) ヴォルフガング・シヴェルプシュ『鉄道旅行の歴史 — 19世紀における空間と時間の工業化』加藤二郎訳、法政大学出版局、1982年
- 2) ヴァルター・ベンヤミン『パリ — 十九世紀の首都』、『ベンヤミン・コレクション1 近代の意味』所収、浅井健二郎編訳・久保哲司訳、ちくま学芸文庫、1995年。
- 3) ミシェル・ビュトール『心変わり』清水徹訳、岩波文庫、2005年。

たとえば、列車の窓からの風景を次のように描写していく。
「そとの空間が急に拡大する。小さな機関車が接近してきては軋轍機（てんてつき）が縞（しま）模様をなした地面の上を消えてゆく。きみのまなざしは一瞬それを捉えることができただけだ、ちらりと見えた、きみがよく知っている巨大な建物の、まるで癩（らい）を病んだ皮膚のような汚い表側、組み合わされた鉄の小梁、大きな橋、その上を牛乳屋のトラックが通りかかる、シグナル、カタナリ架線、それを支える鉄柱、その分岐、外の光景が流れてゆくなかをとおして見える通り、自転車に乗ったひとがひとり、街角をまわろうとしている、鉄道線路に沿って走るその通りと線路とをへだてるのは、貧弱な柵と、ひよろひよろと元氣なく生えた草の狭い帯だけだ。……」
このように延々と流れる風景が描写されていく。

- 4) 夏目漱石『漱石全集第七巻』岩波書店、1979年。
- 5) 拙著『デザインの教科書』でもふれたが『囚人の発明品（考案）』という本は、アメリカの監獄（独房）での工夫を紹介している。

たとえば、段ボールの箱を独房の壁に接着剤で取り付けると、室内用の小さな柵ができる。このやり方は収容者たちによく行われている方法だという。そして、この柵の中には、手作りのフレームに入れた家族の写真を飾ったり、IDカードや筆記具、眼鏡など細々としたものをに入れておく。

想像もしなかったことなのだが、監獄の中では小さなモノをどのようにまとめておくかを解決しなければならぬのだという。すぐにモノが見つけられ使いやすいうにする。また、独房検査の時に看守に没収されないようにまとめておくのだという。そのためには、著者の方法は、歯磨き粉（コルゲート）の空き箱を筆記具入れにするというものだ。小さな箱も実に捨てがたい素材となる。独房の照明は食べ物や暖める装置として使える。また、温かなコーヒーやスープをつくるための湯沸かし（スティンガーと呼んでいる。スティンガーには「刺すもの」という意味もあるが「携帯用対空ミサイル」の意味もある）はいくつかの方法でつくることができる。基本的には、二枚の金属の板でプラグをつくり、それをコンセントに差し込み、そこからプラスとマイナスの金属板へとつなぎ、その金属板をコーヒーなどの液体に入れるというのだ。金属板はカミソリの二枚刃でつくる。いちばんの問題は絶縁体をいかにつくるかである。これは歯ブラシのプラスチックを利用したりする。

また、塩や胡椒入れは、Bicのプラスチック製使い捨てライターのケースを利用すればできるというわけだ。PRISONERS' INVENTIONS, Written and Illustrated by Angelo, whitewalls, distributed by the University of Chicago Press, 2003.

- 6) 7) 夏目漱石『永日小品』『漱石全集第十六巻』岩波書店、1979年。
- 8) 夏目漱石『日記及断片』『漱石全集第二十四巻』岩波書店、1979年。

寺に寝泊まりした人々

井上章一

国際日本文化研究センター
教授

井上章一

1955年、京都府に生まれる。
1980年に京都大学の工学修士を建築学で終えた。その後文転。次第に建築学への関心を失っていく。
ただ、著述の多くは、建築学的な背景をとどめているように思う。

公使館や領事館ができるまで

江戸時代の日本は、オランダ以外の西洋諸国と、外交関係を結んでいなかった。だが、19世紀の半ばを過ぎるころから、様子も違ってくる。イギリスやアメリカをはじめとするいわゆる列強が、一斉に日本へやってきた。そして、幕府はそれらの国々と、通商条約などを交わし合うようになる。

オランダ人たちには、以前から長崎の出島を居留用の土地として与えていた。他の諸外国に対しても、幕府は同じような方針で臨もうと、目論みだす。事実、いわゆる居留地を造成して、彼らには提供してもいた。

しかし、その居留地ができるまでには、時間もかかる。やってきた西洋人たちが滞在できる臨時の場所を、どこかに設けなければならない。例えば、アメリカ領事館やイギリス公使館を、あてがわねばならなくなる。

結局、幕府はいくつかの寺に因果を含め、宿舎となる場所を用意した。アメリカのハリスには、下田の玉泉寺を斡旋している。イギリスのオールコックは、高輪の東禅寺に住ませた。そして、玉泉寺や東禅寺は、そのまま米英の外交拠点にもなっている。

歴史の好きな読者なら、この東禅寺が攘夷派の武士に襲われたことを、ご存知だろう。世にいう東禅寺事件だが、1861年と翌年の二度にわたり、ここは襲撃された。

この話と出会った時、私は思ったものである。幕末の西洋人たちは、みな本陣や旅籠じゃあなく、寺に寝泊まりしている。幕府は寺の部屋を貸し与え、宿屋を使わせようとしなかった。寺こそが、彼らの宿泊にはふさわしい。それが、幕府の考えだったのか、と。

長崎でも、大浦の妙行寺にイギリス領事館はできている。幕府が寺にこだわっていたことは、疑えないだろう。

京都に、欧米諸国の外交施設は、できていない。だが、西洋人を泊めるホテルは、明治のはじめごろから営まれている。1879年にできた也阿弥ホテルがその嚆矢となることは、多くの本に書いてある。

也阿弥というこの名を、抹香臭いと感じる向きは多かるう。実際、その通りで、ここはもともと寺である。東山の安養寺にある也阿弥という塔頭が、ホテルになった。京都でも、

最初に西洋人を泊めだしたのは、仏教にゆかりのあるところだったのである。

本能寺の変がしめすこと

話はさらにさかのぼる。今度は、16世紀、戦国時代に目を向けたい。

周知のように、織田信長は京都四条の本能寺で、明智光秀の襲撃を受けた。歴史の読み物には、たいてい本能寺のことが、こう説明されている。信長が気に入って、常宿にしていたところだ、と。

信長に自前の京都屋敷が、なかったわけではない。だが、そこで寝泊まりするより、本能寺で過ごすことを、信長は喜んだようである。実際、自分がこしらえた京都屋敷の方は、後で手放している。

信長ひとりに限ったことではない。南北朝時代以後、京都にやってきた武将たちは、たいてい寺に宿を取った。彼らは、たいてい自分の常宿となる寺を決めていたのである。

南北朝時代より前がどうなっていたのかは、わからない。確かな史料が見当たらないので、なんとも言いかねる。ただ、南北朝期に寺が武人を泊める習慣のできていたことは、確かだろう。

信長が本能寺をホテル代わりに使っていたことも、その延長上へ位置づけうる。幕末の幕府当局が、西洋人を寺にいざなったのも、同様であろう。寺には、それだけ長いホテルとしての歴史もあったのだと、みなしうる。

一般に、宿の歴史を説明する本は、旅籠や茶屋の成立などを、大きく取り上げる。あるいは宿場町、本陣などにも、ページを割くこととなりやすい。しかし、寺に言及することは、あまりなさそうな気がする。

寺の歴史を読み解く本も、その点は変わるまい。たいていの論じ手は、仏教施設としての寺院史で、話をまとめようとする。宿泊施設、ホテルとしての寺院史を追いかけた読み物は、まあ見ない。

私はこの点を、以前から飽き足りなく思っていた。私自身にその能力はないけれども、心ある歴史家が挑んでくれないかなと思って、いる。ホテルとしての寺院史に。

禅に向きあう、その傍らで

京都には、美しい庭を持つ寺、特に禅寺がたくさんある。春や秋のシーズンには、日本中から、大勢拝観者がやってくる。いや、このごろは海外からの来訪者を見かけることも、増えてきた。

しかし、仏教の施設が、どうしてあのように美しく、庭を整えねばならなかったのか。あの庭園美と禅の教えに、果たしてどのようなつながりがあるのだろうか。

中国や東南アジアに、日本ほど庭の手入れへ力を尽くす寺はない。いや、西洋のキリスト教や中東のイスラム教でも、事情は変わらないだろう。聖職者の集う施設は、あまり庭の形などにとらわれないものである。比べて、日本、とりわけ京都の寺が示す庭へのこだわりは、きわだつ。

ただ、寺のことをホテルだと捉えれば、疑問はたちまち氷解する。武将たちを接待する都合で、ああいった庭は形が整えられた。そういうもてなしの空間だったのだと考えれば、不思議なところはどこにもない。仏教の、禅の場だと思うから、わけがわからなくなってしまうのである。

明日は戦場へ赴く人殺し、武人たちの目を、ひと時なりとも慰める。そんな寺の庭園が、今はビジネス戦士たちの休目に供される。そう考えれば、寺院庭園のありようが、ひときわ味わい深く見えてくる。寺院のホテル的な側面は、侮れない。

念のため断っておく。禅寺の中には、庭の造りを禅の公案めいた理屈で解説しているところも、なくはない。かくかくしかじかの哲理とこの庭は、互いに響きあっている。そう語りかけてくる庭園ガイドの本なども、ままた見かける。

だが、私はそういう物言いを、たいてい後付けの屁理屈として受け止める。元々は、目を喜ばせるために、庭の形を案配した。それを事後的に神秘化しようとして、あのような言辭は動員されているのだと、考える。

モドキ料理の成立事情

あとひとつ、寺が出す精進料理についても、述べ添えたい。とりわけ、モドキと呼ばれるそれを、検討していこう。

精進料理は、肉を素材に使わない。野菜や豆、海藻、そして根菜などだけで、調理は組み立てられる。とはいえ、ただベジタリアン向きだというだけの料理とは、また違う。精進料理のモドキには、フェイクを楽しむ娯楽気分も潜んでいる。肉食を禁じるだけのそれとは、決定的に異なっているのである。

例えば、一見鰻のように見える鰻モドキを、例にとってみよう。もちろん、精進料理だから、鰻そのものをはじめ魚肉は、一切使わない。鰻らしさは、他の素材で演出されることになる。木綿豆腐とクワイを白板昆布に乗せたりして。

巧妙な鰻モドキが似ているのは、外観だけに限らない。味覚の方も、本物と変わらないように、仕上げられていく。のみならず、触感さえ、可能な限り歩み寄るよう工夫がなされるものである。

寺で暮らす以上、肉は食べられないというだけなら、菜食にすれば事足りる。形や味、そして食べ心地まで鰻に似通わせる必要はないだろう。にもかかわらず、モドキ料理は、ありとあらゆるところで本物の肉に近づこうとする。いったい、これはどういうことなのか。なぜ、そこまで似せなければならないのだろうか。

私は、ここでも寺が持っていたホテル的な側面に、想いを馳せたくってくる。

接客を事とする寺では、客に様々なサービスを施すだろう。料理へも、もてなしの心を込めることになると思う。味を磨き上げるだけではなく、視覚面でも楽しめるよう。

だが、寺には肉を出しにくいというハンディキャップがある。だからこそ、そこを逆手に取る作戦が、ひねり出されたのではないか。

うちでは、肉を使いません。野菜や海藻などだけで、この肉めかした料理はこしらえられています。どうです、面白いでしょう。寺だといって、見くびらないでくださいね。他ではできないこんな細工も、うちだと味わえるわけですから。

ええ、どうぞ。お召し上がりください。味だって、本物に引けは取りませんよ。旬を過ぎた鰻なんかと比べれば、うちのほうがよほどおいしくはないですか・・・

こうして、寺はある種の驚きを、来客へ提

供することができるようになる。それは寺＝ホテルのレストラン部門がひねり出す、アイデア料理でもあった。接客のサービス精神が、こういうモドキ料理をもたらしたのだと、私は考える。

本当にこういう展開が、史上のどこかにあったのかどうかは、わからない。今述べた話は、私が頭の中で組み立てた幻である。ただ、モドキの料理が、仏教的な必然性だけから浮上することは、ないだろう。食べる側の驚きを当て込む場からしか、浮かび上がってこないと思う。やはり、それらは寺のホテル的な側面に支えられていると、そう判断する所以である。

寺院史を見直したい

庭の美化が本格的に始まるのは、室町時代あたりからだろうか。しかし、精進料理の発達史が、いつどのように進んだのかは、わからない。こちら、どなたか専門の歴史家に探っていつてほしいところである。

いずれにせよ、寺には様々なサービスの人材が、集っていた。話芸の達人、歌舞音曲の名人もいただろう。阿弥号を持つ室町期の僧たちは、そういう人材だったのだと思う。

そんなもてなしの精神があったからこそ、信長も本能寺を選んだのではなかったか。自前の館で家来と過ごすより、寺の方が面白おかしく時を過ごせる。そんな想いもあったから、自分の京都屋敷は手放したのだろう。

史料的な裏付けのない放恣な空想へ、今回は走りすぎたかもしれない。精進料理の話などは、噴飯物だったかなとも考える。さらに、私の目自体が、今の世俗的な寺院像でゆがめられている可能性も、あるだろう。

だが、寺にホテル的な一面のあったこと自体は、否めない。そして、今のホテル史は、旅籠や本陣などばかりを、その前史に取り上げる。寺の担った役割に光を当てようとはしてこなかった。

「旅の文化」を書けという注文をもらい、ふだん考えていた寺院史を書きつけた。まだ、私の中でも生煮えの、熟さぬ論述である。だが、こういう機会はあまりないと考え、あえて踏み切った次第である。

(いのうえ しょういち)

各論

2

宇宙に住む

～宇宙ステーションと
それ以降～

岩田 勉

元JAXA筑波宇宙センター所長

岩田 勉

1946年生まれ。東京大学教養学部卒、ハーバード大学理学修士。1969年創設された宇宙開発事業団に入り、技術研究本部副本部長、筑波宇宙センター所長等歴任。衛星画像解析、H-IIロケット概念企画、月探査利用研究などを創始。2007年退職。著書『宇宙人に会いたい！（2000 集英社）』、『宇宙の目で日本を読む（共著2005 丸善プラネット）』、『人類が宇宙に住む（2006 丸善プラネット）』、『宇宙から地球を診断する（2010 SCC）』、『神仏を信じない人々（2015 デザインエッグ）』など。監修『国際宇宙ステーション（2009 NHK-DVD）』、『宇宙飛行士85の秘密（2011 PHP文庫）』など。

はじめに

人間は魚の一種である。つまり魚の子孫は魚というべきであるから。

魚の一種はなぜ陸に上がって陸上動物になったのか？

約4億年前頃、空気呼吸用の肺を備えた肺魚類は全盛を極めていたが、その中に4本のヒレを足のように使って陸に上ってきた新種がいた。現在の陸上脊椎動物の祖先である。その後まもなく魚類の世界では、肺を浮袋に変えてしまった条鰭類が圧倒的に増えた。肺魚類は、現在、絶滅寸前となっている。

陸上に上がって成功した四足動物のうち恐竜が、しばらくの間、大繁栄を誇ったが結局絶滅した。その恐竜が多種多様に進化して地上の王者であった2億年前頃、前肢を翼にして空に進出した珍種の恐竜だけが絶滅をまぬかれ現在大繁栄している。鳥類である。

現在、地球上、全人類の体重の総和は人類以外の全陸上脊椎動物の体重の総和の八倍である。これでは、地球は人類で飽和状態ではないか、という気がする人は多いだろう。人類（ホモサピエンス）が地球上に現われて十数万年が経ったが、今から数万年後、人類は地球からあふれ出て、宇宙にどこまで進出しているのか？筆者にもさっぱりわかりません。

国際宇宙ステーション

宇宙建造物の特徴

そもそも人間は宇宙に住むことができるのか？百年前の人であれば、できっこないよ、と笑い飛ばしたに違いない。しかし現在、宇宙を飛んでいる国際宇宙ステーションに常時、米国、ロシア、ヨーロッパあるいは日本の宇宙飛行士が滞在している。最近ではJAXAの油井亀美也宇宙飛行士が2015年7月から5か月間滞在し無事に帰還した。

これは、人類が宇宙に住めるということなのか？まあイエスともいえるが、ちょっと、ノーのところもある。宇宙空間で生存を持続する、という意味であればイエスである。数か月、数年にわたり、安全に生きることができ。しかし宇宙ステーションは、特殊な訓練を受けた宇宙飛行士が、地球からの全面的な物資補給を受けて、任務の期間だけ滞在する施設であって、ふつうにだれでもが寝泊ま

りできる施設ではない。まして、ふつうの人たちが家族として居住して子供を産み育てられるような施設ではない。そういう意味では、ノー。つまり宇宙は現在、人類が家を作って住むような場所ではない。

ふつうの人たちが地球上の家と同じように家族として住み着いて子供を育てる場が、地球外に実現するのはいつのことだろうか？

宇宙ステーションでの生活は、写真で見ると地上の家に住むことに似ているように見えるが、実際は相当違う。まず、ふつうの家では必ず簡単にできて宇宙ステーションでは絶対にできない機能は、窓を開けることである。

現在の宇宙ステーションに窓はある。分厚いガラス窓だが、もちろん密閉されていて開閉できない。仮に開閉式に作っても、開けたとたん室内の空気は真空の外部に逃げてしまい、内部はゼロ気圧になってしまう。つまり、宇宙ステーションの室内は与圧モジュールと呼ばれる名からわかるように一気圧に保たれていて、外壁が真空にさらされていても空気が抜けないように作られている。



宇宙ステーションの窓（NASA）

外壁はアルミ合金、窓の部分はガラスで作られているが、地上の建物との大きな違いは、この構造が何のために必要か、である。地上の建物の構造は、重力の圧縮に耐えて、屋根や上層階の重量を支えるためにある。しかし、宇宙ステーションの構造は、圧縮ではなく引っ張り張力に耐えて、一気圧の気密を保つためにある。大きな圧力容器である。

圧力に耐える軽い構造として球形や円筒形が採用される。宇宙ステーションは、円筒をいくつも接続した建造物となっている。各円筒はモジュールと呼ばれ、その内装は、居室、実験室など目的に応じた機器設備で満たされる。モジュールの中央部には、地上の室内空間と同じように見える床、天井、壁からなる

内装がなされているので、宇宙飛行士は各モジュールを地上の室内と同じような感覚で使える。ただし無重力という環境が地上と絶対的に違う。

無重力環境

ご存知のように、宇宙ステーションの内部は無重力である。もちろん、外部も無重力であるが、外部に宇宙遊泳する宇宙飛行士は自分の周辺に地球や星が見えるので、宇宙を航行している感覚を持つことができる。地球の水平線に向かって秒速 8 キロで飛んでいるのを実感できれば、自由落下しながら地上との距離が一定を保つ運動体感を持つことができる。一方、宇宙ステーション室内にいる宇宙飛行士は床や天井や壁が自分の体と同速度で飛行しているという体感を持っていないから、ただ空中に体が浮かぶ環境に自分がいるとしか感じられない。ここでは、体重がなくなる、物の重さがなくなる、と感じる。

20世紀の後半になって、初めて人類は宇宙空間を経験できるようになったが、その結果わかった最大の事実は、人間は無重力空間でも健康に生きていられる、ということであった。現在の私たちは、なんだ、当たり前だ、と思うが、ガガーリンが1961年に地球を一周する直前まで、科学者はこのことに自信がなかった。宇宙から生きて帰ってくることは不可能ではないか、とか、病気になるだろう、という心配は無ではなかった。理論的には悪影響の原因は具体化されない、というだけで、人体実験が進んだ、といえる。その意味でガガーリンは人類の英雄である、といえる。

月探査

アポロ月面探査

1969年から1972年にかけてNASAはアポロ有人宇宙船による月面着陸を 6 回成功させており、12人の宇宙飛行士が月面での生活を体験した。このミッションにより人類は無重力空間ばかりでなく、6分の1の低重力の下でも健康に生活し、複雑な作業をこなすことができることが実証された。

人間が地球以外の天体上で生活できることがわかったことは、世界観の大転回といえる。現在では当たり前の科学知識にすぎないが、数百年後の人類の運命を決める重要性を持つ

ているかもしれない。太陽系の天体は惑星や彗星など数多くあるが、どの天体の物質であろうとも、私たちが地球上で使っている物理化学の応用技術によって加工することができる。コストの低減が最大の課題ではあるが、原理的には太陽系のどの場所でも地球で発展した産業技術を適用することで拡大再生産のプロセスを開始できる潜在的可能性を持っている。アポロ計画によって実証されたこの原理はその後各国の宇宙開発の原動力を支えている。

火星探査あるいは月面基地

火星探査

アポロ計画の前後から間断なく続けられてきた太陽系の無人探査のうちで、最大規模での探査対象は火星である。

火星は地球に似ている。詳細な表面環境データが得られている天体のうちで、火星ほど地球に近い環境を持つ地球外天体はない。目に見える大きさの動物や植物はいないが、微生物の存在は否定できない。少なくとも過去には生命が存在したと考えられる。

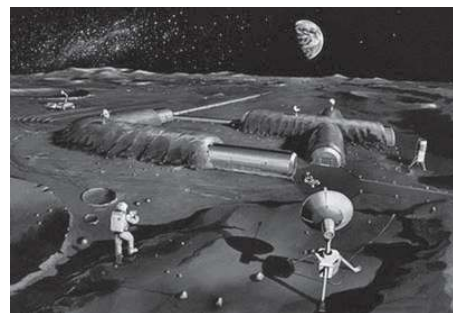
火星の空気はほとんどが二酸化炭素で酸素はない。氷はあるが、気圧が低いので液体の水はない。過去には地熱や火山活動で気温が高く気圧も高かった時代もあるので、川が流れ海もできただろうと推測されている。火星探査機の取得画像によれば、各所に水が流れた痕跡が発見されている。火星での生命発生の可能性は、地球生命の発生に関する謎と科学的にリンクしているので、科学界全体の大きな興味を引き、前世紀から現在まで五十数機の探査機が打ち上げられている。初期の多くは旧ソ連で、最近は多くがアメリカであるが、ヨーロッパと日本も打ち上げている。

有人火星探査

問題は有人の火星探査であるが、これはむずかしい。NASAの長期目標は宇宙飛行士を火星に送り十数か月以上滞在させ、往復3年かかる宇宙飛行によって地球に帰還させようというものであるが、これほどの規模の宇宙プロジェクトは過去に実行された事例がない。最大の有人宇宙ミッションはアポロ計画であったが、火星有人探査のロケットの規模と経費はそれを上回る。

アポロから半世紀を経て宇宙技術は格段に進歩したにもかかわらず、こうである。その大きな理由は月に比べて火星が大きく重力が強い、からといえる。月面の重力が地球表面重力の17%であるのに対して、火星地表の重力は38%ある。火星から帰ってくるためには、火星表面に大型の帰還用打ち上げロケットを持ち込まなければならない。この帰還ロケットは地球から超大型ロケットで打ち上げることになるが、その規模はH-2Aロケットの数百倍に達する。アポロミッションに使われたサターン5ロケットを十機以上束ねたものとなる。現在の技術でも、ミッションの組み立て方や機器設計の改良で、コストは半減くらいまで縮小できる可能性があるが、それでも歴史上最大の探検ミッションになり、国家計画としても国際協力計画としても実現するには大きすぎるだろう。革新的技術を開発する努力を怠れば実現の見通しは持てない。

月面基地



月面基地概念図 (JAXA)

有人火星探査と並んで次世代の大規模宇宙ミッションとして想定されているのは、有人月面基地である。有人火星ミッションに比べれば技術的にも資金的にも実現性は高い。月は宇宙ステーションよりも距離が遠いので、運搬コストは数倍かかる。しかし月面には土砂岩石など構造物や充てん剤に使える物質が豊富にある。月面土壌を電熱焼結して気密居住施設を製造する案を筆者はかつて考案したことがある。月面の居住施設は1気圧を保つ気密機能、宇宙放射線や微隕石を防ぐ遮蔽天井、断熱壁構造などが必要であるが、これらは現地で容易に製造できる、レンガ、セラミックス、ガラス、コンクリートなどが使われるようになるだろう。

(いわた つとむ)

高野山ゲストハウス

竹口健太郎
＋
山本麻子

株式会社アルファヴィル

ともに1971年生まれ
1998年アルファヴィルを設立

竹口健太郎

ロンドンAAスクール留学後、
1998年 京都大学建築学科修士課程修了
現在、大阪産業大学特任教授
日本建築設計学会理事

山本麻子

パリ建築学校ラ・ヴィレット校留学後
1997年 京都大学建築学科修士課程修了
1998年 山本理顕設計工場
現在、京都大学、大阪工業大学で非常勤講師
著作
ALPHAVILLE ARCHITECTS, Equal books, 2014
COME GIARDINI, LIBRIA, 2015

受賞

2014年 Daylight Spaces Award (オーストリア)
2013年 DFAA金賞 (香港)
2013年 日本建築家協会関西建築家新人賞
2010年 大阪府建築士会 渡辺節賞 等

真言宗の聖地、高野山

高野山は和歌山県の山頂に位置する真言宗のメッカである。今からちょうど1200年前、開祖空海が大阪、京都、奈良、和歌山のどこからとも一定の距離があるこの場所を選び、金剛峰寺を中心にいくつもの伽藍が立ち並ぶ、ひとつの街がつくられた。現在では世界遺産にも指定された人気のある観光地で、域内にはお土産屋さんや食事処などが点在し、一般の人も住んでいるが、宿泊施設といえば、いわゆる宿坊、お寺に宿泊して精進料理が供されるというスタイル以外に、ホテルや旅館は一切なかった。

高野山で生まれ育ったオーナーは、世界をバックパックで放浪し、高野山が日本仏教の長い歴史を今に伝える場所として観光客に人気がありながら、アクセスが悪く、日帰りが難しく、宿泊施設のバリエーションが少ないことに気づき、これから宗教の地だけでなく、観光地としても発展していくために新しいスタイルの宿泊施設が必要だ、自分がこれまでの経験を活かして始めよう、と考えたのが、このプロジェクトの出発点だった。

当初は、民間の用地に立っていた大きめの住宅を改装し、海外のユースホステルを参考に2段ベッドをならべた、最も簡易な宿泊施設を想定していた。その一方で、高野山というスペシャルな場所にふさわしい空間についてあれこれ思い巡らせていたときに、私たちの事務所に来られたのである。私たち自身、学生時代、ヨーロッパを中心に貧乏旅行をしていたときは、最も安いホテルや、部屋を他の宿泊客と共有するユースホステルばかりに泊まっていたものだ。そして、日本には馴染みが薄い、海外のバックパッカー向けのこういった宿泊スタイルが、プライバシーは少ないものの、宿泊客同士の垣根が低いことにいったん慣れると、訪れた場所の魅力に加えて、日常では会おうことのない人たちと、旅先ならではの会話がかわせる大きな機会になることを発見した。こういった、それぞれの経験をふまえ、「ぜひ、高野山の新しい名所をつくろう！」という意気込みで高野山ゲストハウスはスタートしたのだった。

2 段ベッドからカプセルルームへ

まず改装予定だった住宅に2段ベッドを並べてみたが、6畳や8畳といった部屋には希望の台数が入らず、20人程度の宿泊客皆がくつろげるラウンジを設けるにも、構造的な制約が大きかったため、改装とともに新築案も並行して検討していった。同時に、京都や東京の新しい簡易宿泊所に泊まりあるいて日本の観光客の宿泊感覚について研究していたオーナーからも、この頃提案があり、オープンな2段ベッドでなく、占有面積はほぼ同じながら、クローズドなカプセルタイプの宿泊スペースへと宿泊スタイルの大きな変更があった。このように、宿泊スペースのプライバシーを高め、高野山という祈りの地で自分をみつめて過ごせる場所を確保しようという方針変更の一方、非日常的な場所での新しい発見を、気兼ねなく交換し合えるラウンジ・バーも重要であり、孤独を楽しむことと他者との交流を楽しむこと、この二つが同時にかなえられる空間が必要であることが、共有され始めた。

こういった何度かの話し合いの後、私たちが提案したのが、ツーバーフォー材の細くて薄い柱を林立させることで、立つ位置や視点によって、空間のつながりが感じられたり遮られたりする、親密で隔離されながら緩やかにつながりあっているようなゲストハウスだ。

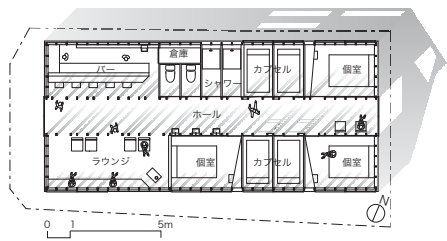


図1 455ミリピッチで柱の並ぶ平面図

建物奥の宿泊部分では、455ミリピッチの柱は、2段に積み重ねられたベッドの足であり、3スパンでひとつのカプセルとなり、マットレス一枚に荷物を置くスペースからなる極小の宿泊室となる。天井の高さは1.3メートル程度。立つことはできないが、ゆったり座れる高さを吟味して、狭すぎず、広すぎない一人の空間を確保した。

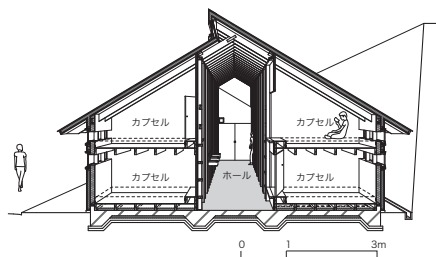


図2 2段になったカプセルの断面透視図

一方、カプセルの扉をあけると、そこはエントランスまで一直線に続くホールに面している。ホールは通路よりも幅を広くとり、また向かい合うカプセルの扉を少しずらして並べることで、宿泊室の扉をあけた時、他の宿泊客との間に適度な距離が保てるよう留意したが、おもしろいことにこの距離が、逆にこのホールで顔を合わせた宿泊客同士が言葉をかわしたくなる余裕につながるようだ。

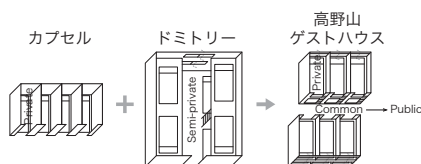


図3 宿泊スタイルのダイアグラム



写真1 カプセルの扉をあけて語り合う

目に見える空間構成、構造と設備

宿泊スペースから共有シャワーやトイレといった水まわりスペースを経て、薪ストーブのあるラウンジとハイカウンターのあるバーからなる共有スペースまで、列柱のホールが貫く、一目で構成を把握できる平面計画だが、宿泊・水まわりスペースでは壁と一体となっ

ている列柱が、共有スペースでは壁のない、ラウンジとバーを柔らかく仕切る境界となっている。これによって列柱は、宿泊スペースからエントランスへの動線を確保すると同時に、ラウンジとバーとの間に視覚的な一体感をもたらし、他者との距離を保ちたい、あるいは縮めたいという相反する要望に応える。



写真2 ラウンジから列柱越しにバーをみる。

冬の冷え込みが厳しいため、開口は最小限にし、木造架構の外側を断熱材でくるみ、鋼板の小波板でくるんだシンプルな建物だが、カプセルの窓は通風を確保し閉塞感を感じさせないよう、低い窓を部屋の端から端まで設ける、また家型の棟部分の梁を片方持ち出すことで頂部に雨仕舞いの良いハイサイドライトを設けるなど、少ない開口で効果的な採光を工夫した。また共有シャワー前のホールに設置された洗面台を含め、給水や給湯といった設備配管、さらに照明やスイッチのための電気配線が露出しているのは、冬季の凍結防止やメンテナンスを考慮したものだが、同時にこの施設によそゆきでない近しさをもたらす。このように、わかりやすい平面構成、表された構造、そしてブラックボックスでない設備は、この建物を、オーナーを含めた利用者に対して長期にわたって開かれた建築としたい、という試みでもある。



写真3 山並みになじむ濃灰色の外観

陰影ある木の空間

新しい宿泊スタイルを模索する一方で、高野山という歴史ある場所に宿泊していることをいかに感じさせるかが、最後の重要な課題であった。上質な日本建築であふれた高野山に、現代の素材・工法で実現可能な伝統空間のエッセンスとは何なのか？この問いに対して私たちは、木の架構をあらわにし、空間に柔らかさを感じさせたうえで、これを明るさをごくおさえた自然光で照らすことに集中した。

柱の455ミリピッチは、列柱を通りぬける必要に応じて、部分的に606ミリと303ミリピッチとなっているため、エントランスから一望すると、全体にゆらぎを感じさせる。白色に塗られたこの繊細なひだに、ハイサイドライトからの間接光が降り注ぐ時、わずかな光の変化が、複雑な陰影をもたらし、シンプルな室内に豊かな奥行きを与える。決して和風とはいえない室内だが、時間に応じた光の変化を感じられる空間に、私たちが考える伝統的な木造空間の美しさを局所的とはいえ、写せたのではないかと考えている。

開業から3年。高野山初のゲストハウスには、当初目論んだ以上に、国籍も年齢も多彩な多くの老若男女が訪れ、ホールでラウンジで、宿泊客同士、オーナーと宿泊客、また時には僧侶の方なども訪れて、豊かな交流が実現されている。そしてトラベル・アンド・レジャーという米国の旅行ガイド誌の、「高野山ゲストハウスに宿泊することそのものが、高野山での、他にはない経験になる」という評を読んだ時、オーナーと私たちが模索した、特別な宿泊空間が、高野山にふさわしい宿泊スタイルであると、日本人だけでなく、文化を異にする人々にも認められたことを発見したのである。

(たけぐち けんたろう+やまもと あさこ)



写真4 エントランスから列柱を見る

インタビュー

リノベーション系
ホステル

中谷ノボル

株式会社アートアンドクラフト代表

中谷ノボル

建築家。
京都工芸繊維大学 造形学部建築学科卒業。
不動産営業、建築設計、現場監督などに従事
したのち、1994年に株式会社アートアンド
クラフトを設立。
以来、「均質化されていない住まい あたら
しい都市居住のスタイル」をテーマに活動す
る。自称「住まいの求道者」として、自らが
倉庫やキャンピングカーでの暮らしを実践し
てきた。
2010年、HOSTEL 64 Osakaを開業。2011
年、大阪R不動産をスタート。そして2015
年12月、SPICE MOTEL OKINAWAを開業。

最近、「寝泊まり」を取り巻く状況がおもしろいことになってきている。

そこで、今までの枠にとらわれないスタイルで活動が続けている株式会社アートアンドクラフトの代表、中谷ノボル氏に、約6年前に開業された「HOSTEL 64 Osaka」を中心に、寝泊まりという視点からの宿と住まいについて、そして、寝泊まりの文化についてお話を伺った。

—まず初めに、ホテルをやってみようと考えたきっかけは何だったのでしょうか？

そういう質問には決まった答えを用意しておくべきなのですが、本当にないんです。「これだ！」と言う理由がなくて。ただ、自分の中では、今回のテーマとつながるかもしれませんが、「宿」と「住まい」の境界線はあるのか？ということ、ずっと考えています。

若い頃、旅をしていて、普通にホテルに長期滞在する人もいれば、コンドミニウム¹⁾に泊まる人もいます。海外ではそんな文化もあるのに、日本の場合は所轄が分かれていて、「宿」となると急に保健所が絡んできたりする。この辺りが不思議です。不動産屋として入居者を募集する時は月極めですが、ホテルは毎日入居者を集めているというように、違いといえば日数だけなので、そこの境目はないだろうと僕は思っていました。実際にやってみても、そんなになんとも思っています。

アートアンドクラフトは、「人が長く滞在する空間」を設計し、商品として造っていこうという会社だったので、ホテルを運営することに対して、正直なところ「垣根を超えた」という感覚はないのです。

「ホテルをやりたい」という思いはずっと前からありました。僕らの会社では、新しい事業を始める時の基準は、スタッフ自身の「こんな〇〇がほしかった」という思いで、いつも言っているのは、社員自身が常に「一番意識の高いユーザー」であるということです。

宿に関しては、10年くらい前から大阪でもゲストハウスが出てきて、若い人たちが楽しんで利用していました。僕たちも行っていました。40才にもなると「もっとゆっくり、静かに過ごしたい。でもホテルに籠るのでは

なくて、気が合ったらご飯でも一緒にというような感じのものがほしいな」と思うようになってきました。まだ、日本ではホステルという言葉が広まっていない頃で、じゃあ造って見たらどうだろう、と思ってやってみたのです。

ホテルをやるということで、すごく高いところに敷居が上がったという感覚はないんです。同業者には「よく運営までしたな」ということを言われたりしますが、そこまでしないとおもしろくないという思いもありました。元々、不動産の管理や募集もしていたので、その延長線上でできたのかなと思います。

—HOSTEL 64 Osakaに続いて、今話題になっている沖縄のSPICE MOTEL OKINAWAですが、どんな目的で、どんな人のために造ったのか、どんな新しい事に挑戦したのか、お聞かせください。

SPICE MOTEL OKINAWAは、ある物件でモーテル²⁾形式での営業をやめるという話があり、それを引き継ぐかたちで始めました。最初はアパートにしようと思いましたが、それではおもしろくない。そういう思いで沖縄のホテルを見渡すと、ゲストハウスも高級リゾートもたくさんあるのですが、中間くらいのものがあまりないのです。それで、その中間くらいのものがほしいなということになりました。僕らの世代にとってモーテルといえ、山道を走っていると突然現れるものとい



HOSTEL 64 Osaka 外観



HOSTEL 64 Osaka 人気の部屋

うイメージですが、20代の社員はすごく良いイメージを持っているので、モーテルというものをもう一度新しく打ち出してもいいのではないかと思いました。

それからエリアについてですが、今は、宿のあるエリアは那覇に集約されていて、リゾートという北部か西海岸という感じになっています。その一方で、僕たちが住んでいるところは那覇から車で40分くらいの中中で、そのエリアを指す言葉も地名もないのです。でも、僕たちはそこがとても好きだし、雰囲気も気に入っているので、そこから文化発信のようなことをしたいと思いました。地元にも街づくりやアートイベントをやっている人たちがいて、そのための一つの舞台としてSPICE MOTEL OKINAWAを使ってもらえたら、という思いもあります。

ーリノベーションホテルの持つ新しさや魅力、リノベーションホテルとしてのこだわりなどについて、教えてください

リノベーションを始めたころによく「リフォームとどう違うのか」という質問を受けたことがあって、やはり、そこに集約されていると思います。リフォームは形を変えとかか元に戻すといったハード面の話ですが、リノベーションは、もちろんそういった面もあるのですが、それ以上に、その「入居者を変える」という感覚なのです。築後何十年かの建物は、建物自体も古くなっているのですが、元々の建った時のソフト自身が陳腐化しているのです。だから、それを変えないといけない、そのためにはそこを使う人を変えないといけない、そのためには、こういう風なかたちにしよう、という感覚で、つまりはソフト面を変えていくという感覚でしょうね。

SPICE MOTEL OKINAWAでは基本、全面的にリノベーションしていますが、部屋のうち2つくらいはオリジナルのモーテルを復元したり、ちょっとラブホテル的に使われていた雰囲気などを残したりしています。

ーHOSTEL 64 Osakaをやり始めてからの5年を経て、以前と変わったこと等はありませんか？

想像していた通りだなというのはありますね。始めた当時は円高だったし、震災が起こって原発問題で外国人が来なくなったし、本当に散々だったんです。ここだけではなく、アートアンドクラフトのリノベーション業や不動産業もあったので、景気にはなんとか耐えられましたが、3年やってきて、安倍政権になったら今度は急に円安になりました。今は正直なところ、どんな宿を造っても流行ると思います。そこがつまらないというか、実力を問われないところでもあり、自分たちの方もさぼっているかなと感じるところがあります。だから、満室が続いてはいますが、単なるリフォームではなく、内容もちよつと変えることを考えています。

ーHOSTEL 64 Osakaができ、これがきっかけとなって、最近は個性的なホテルが日本全国にできていると思うのですが、この動きをどのように捉えていますか？

「きっかけになった」と言ってもらえるととてもうれしいです。やはり、「ないから作るう」というのが会社のテーマなので。

多様化したということは、旅行者にとって選択肢が増えたということですから、すごくよいことだと思っています。

ブティックホテルやデザインホテルであればカッコいいものはありましたが、僕はそれに飽きてしまったし、ゲストハウスも泊まらないし、そういったものとは違ういろんなものが出てきたというのは、すごく楽しくなってきたなと感じています。(国は)多くの観光客を迎えると言っているのに、その多様化がなされておらず、どちらかというと遅れていくらいだと思います。タイやマレーシアに行った方がおもしろい宿があったりするし、そういう意味でもよかったなと思います。

ー自分がこんなところに住みたいとか、周囲の人の「ホテルはありきたりでおもしろくないよね」といった意見を吸収していくアンテナのようなところに、何か違いがあるのでしょうか？

いやあ、どうでしょう……。そのように思っている人はたくさんいると思いますよ。自分たちは常にユーザーの視点を持っていることが大切だと思っているんですが、一般のユーザーからは確かに発想は出てくるかもしれないけど、実際にどうやっていくのか、という大事な部分はプロにしかできないですね。だから、僕たちは「一番のユーザーであるプロ」、つまり、「ユーザーの中で一番のプロ」というスタンスでいようと言っています。だって、不動産のことを知らないと出来ないわけだし、リノベーションでDIYを、といっても、工事をしないとできないわけですから。



プロとしてのこだわりがユーザーの思いを形にする

ー不動産オーナーは既成概念もあって、新しいことには抵抗を感じる人もいます。それでも説得して、やってみたら思った通りに人が集まってくるということですが、そのように進められる原動力は何ですか？

それはもう単純な話で、まず自分たちがやってみるのです。リノベーションも「こんな家、いいじゃないですか」と言っても、誰もやってくれないと思います。だから、最初は本当に造って販売から始めました。1998年にマンションリノベーションで、ほぼすべて内部を入れ替えて造ってオープンハウスにした時、「マンションでそんなことができるのか」とか、「お風呂入れ替えられるんだ」とか、「壁動かせるんだ」とか、みんなそういうことを知らないで、それを見て、とても驚いていました。

また、その時、実際に造るだけではなく、営業スタイルなども全部変えました。まず広告には、平面図を載せないで写真だけ、折り込み広告ではなくてポスティングという方法をとりました。それから、スーツではなく私服、「いらっしゃいませ」ではなく「こんにちは」でやろう、とか。

HOSTEL 64 Osakaも築50年以上のビルをこんな風にできるんだよという事例です。古くて解体するしかないと思っているオーナーに対して、いや違いますよ、めっちゃカッコいいですよって伝えるんです。そして、ここをこうやったらいいだけですって。すると、事例があるので、「ああ、そうか、こんな風にできるのか」となるんです。これが僕たちの営業ツールになっているんですね。やはり、まずやってみると。でもそんな大資本を動かせるわけではないので、小さいところでやってみるという感じです。

一寝泊まりの場所をどのように進化させたいと思っていますか？

実は僕らには裏テーマがあるんです。僕は今ほとんど沖縄にいるんですが、本当は常勤の役員だから絶対ここ（大阪）にいないといけない。でも、転勤や出張はもちろん役員にもありますよね。そうすると、どこまでがどこに住んでいると言う話なのか、宿と住まいの境界線ではないけれども、そういう考えがあると思うんです。現場監督はさすがに現場の近くにいないといけないだろうというのはありますが、スタッフも同様で、本当にここにいないといけないのか、とか、もっと自由にいろいろなところで暮らしたいよね、とか。そこで、まず出勤しないといけないのか、出勤もしなくてもいい仕組みはないのかという考えの一環で、僕が今沖縄に住んでいて、普



SPICE MOTEL OKINAWA 外観

段はテレビSkypeで会議をやったりしています。で、意外とできていますね。最初の半年間はわざと大阪に帰ってこなかったんですよ。でも、「回るよね」、「いけるよね!」という話になって。今は、それを続けている感じです。

だから、ワークライフバランスという言葉が何年前かに話題になりましたが、それはすごくいいことだと思います。ただ、仮に大企業に勤めていても、日曜日でもメールを返さないといけないような時代にきているようにも感じています。だから、仕事のオン／オフを切り替えるのではなくて、（手を交差しながら）こんな感じになるのもありかなと。

一それはハーフオン、ハーフオフという感じですか？

そうですね。今は「公私混 “働”」と言っているのですが、この言葉を広げたくて。もっとカッコいい言葉が見つかるかと思っているのですが。

HOSTEL 64 Osakaのマネージャーは育休から復帰した女性なんですが、子供が風邪をひいたら迎えに行かないといけない。キーパーさんに「ちょっとフロント見てて」と頼んで迎えに行き、子供を連れてきてフロントで寝かせながら仕事する、というようなことをやらざるを得なくなってきたり、そんな風にはできないと難しいよねと。それなら、もっと

入っていったいいんじゃないかという発想で、それをこのSPICE MOTEL OKINAWA でやろうと思っています。

例えば、お客さんとの打ち合わせや現場監督のない週があれば、その週の3日分だけ有休をとって、残りの3日は有休も何もなくて、向こう（沖縄）に6泊いられる制度を作ろうかという話をしています。その代わり、4掛けくらいか半分くらいの働き方をしようと。だからモーテルにただ泊まっていいし、車も用意するから乗ってくれていいよと。朝からいきなり海に潜りに行きたい人はそうして、昼からちょっと仕事するとか、その逆とか。そういうライフスタイルをやってみない？という話をしています。有休は3日分だけ沖縄には6日間いて、トータルで考えたら半分くらい働いているかなという感覚で。

旅行に行って3泊だったら、とにかく遊びたいので、朝から美ら海（水族館）まで車を走らせたりして。住民から見ると、そんなことしないよねって。でも1週間あると、雨の日には水族館に行って遊ぼうとか、そういう過ごし方が出来ると思うし、そうしてほしいと思っています。

一すごくおもしろいですね

自分自身でやってみて思ったのは、Amazon, Skype, LCC、この「新・三種の神器」、中でもインターネットだと思うのですが、このおか



SPICE MOTEL OKINAWA 内装

げで、僕たち普通のサラリーマンでも、いろんなところで暮らそうと思えば出来る時代になってきたんじゃないかと感じています。今までだと村上春樹さんくらいしかできなかったようなことが。ならば、やってみよう。だから、十数年前にサバティカル休暇³⁾を取り入れました。今は制度化しており、今年も二人取ります。

—今のお話だと、そのうち本当に「働く」「住む」「旅する」の垣根をなくせるんじゃないかと思えてきます

そうです。この科学技術の発展と共に、人々が獲得できる状況が増えていると思います。後は、対外的な部分で、例えば取引先に「なんで沖縄に行ってるの？」などと怒られたりしないようにうまくやっていって、それを当たり前にしていくとか、そういう会社なんだと思われるようにしていくしかないと思っています。

—寝泊まりの文化のこれからについて、次なる目標や、やってみたい事などについてはいかがでしょうか？

「暮らすように旅する」とか「旅するように暮らす」ということをテーマに生きてきた若い人が増えていると思います。

以前、キャンピングカーをリノベーションして住んでいたことがあるんです。会社から家までは自転車です。10分なんですけど、それでも帰るのが面倒臭くなった時はそこに泊まったりしていました。

キャンピングカーって何人乗れるかという

スペックを宣伝するんですが、別に一人でもいいじゃないかと。そう考えていく内に、寝ようと思えば3人くらいは寝られるけど、ベッドを外して本棚を作ったりしていました。また、僕たちは連休が少ないのですが、土曜日の仕事が終わって急に思い立って、事務所の駐車場に停めているキャンピングカーに乗って金沢に行って、遊んで帰ってくる、ということもしていました。宿を事前に予約する必要もなく、お風呂付きの道の駅ができたりととても便利になり、これは旅のスタイルとしておもしろいなと。

「家が動く」というのも好きで、オランダのハウスボートを1週間レンタルして住んでみたこともあります。以前は貧しい人が川に住むという感覚であったのが今はもう逆転して、川沿いやオーシャンフロントの方が金持ちの住むところになっています。

大阪では、中之島の対岸に戸建住宅を建てて住んでいて、そこに船をつけて暮らしていました。小さなボートはほぼ車の代わりで、大阪城とかUSJとか主要なポイントは川沿いにあるし、いろんなところに早く行けます。川によって、大阪の街の見え方も変わりましたし、信号がないので、移動がとても早く感じました。

—最後に、旅好きと伺っていたので、旅先で出会った「心地よい」空間があれば、聞かせてください

最近では、ジェフリー・パワ⁴⁾設計の、「ザ・ヴィラ・モホティ」ですね。パワが自分のアトリエをゲストハウスのように使っていたのですが、それをどこか

が買い取って、7室の宿にしています。その中のある部屋のところにアトリエがあったらしく、パワが使っていた机なんかも残っているんですよ。

そこに泊まった時、シーズンオフだったのかもしれませんが、客が一人で行っていた僕だけだったんです。ホテルスタッフは20人くらいいて、現地の装束を着て、

掃除したり、草を刈ったりしていて、建物は一応二階建てですけど、敷地は広くてどこからどこまでかわからないようなところでした。

そこで僕が一人でイタリアンを食べていたら、机の下で2匹の犬が守っているような感じで。

そして、部屋には何もないんですよ。質素で、エアコンもなくファンが回っていて、虫が入ってきたりして。でもかっこいいですよ。床などもモルタルにペンキを真っ白に塗っているだけなんですけど、やっぱりかっこよくデザインされていて。インターホンもない部屋を出て食事していると、装束を着たスタッフが長い箸を持って、2、3人で部屋を掃除してくれていて、という光景がすごいと思いました。こんな優雅な、自分の家のような、本当に使用人がいて暮らしているような感じで、あれは良かったです。旅行に行ってどこが良かったかって聞かれたら、この話をするようにしているんです。一泊ですけど、良かったですね。

インタビューを振り返って：

単に「宿」、「住まい」ではない、日常・非日常も入り混じった新しい生活スタイルの提案まで盛り上がり、多岐に渡るお話を伺うことができた。

聞き手 黒柳亮、ベリー史子

とき 2015年11月16日

ところ アートアンドクラフト事務所

註

- 1) ホテルの部屋が宿泊に特化した造りであるのに対し、コンドミニアムはキッチンやリビングなども備え、「宿泊する」というよりも「現地で暮らす」という意味合いが強い。
- 2) 以前は自動車で乗り付けられるラブホテルというイメージであったが、現在では本来の「motor（自動車）」+「ホテル」＝「自動車旅行者のための宿泊所」という意味で使われることが多い。
- 3) 長期間勤務者に与えられる長期休暇。通常の有給休暇等とは異なり、使途に制限がない。期間は少なくとも1ヶ月以上、長い場合は1年間となることもある。主に大学教員に対し採用されていることが多く、ヨーロッパなどでは企業でも取り入れるところが出てきているが、日本企業での導入例はまだ少ない。
- 4) スリランカを代表する建築家。トロピカル建築の第一人者として多くのホテル建設を手掛けた。



アートアンドクラフト代表 中谷ノボル氏

グランピング

～オルタナティブリゾートの 観点から～

加藤文人

オルタナティブリゾートプロデューサー
縁側研究家

加藤文人

1961年愛知県生まれ。明治大学商学部卒。
1995年、三井系企業の社内ベンチャーとしてアウトドアリゾート「PICA（ピカ）」を立ち上げる。
「喪われた日常への回帰」をテーマとした「オルタナティブリゾート」を推進し、富士五湖、伊豆などでエコビレッジ「PICA山中湖ヴィレッジ」やテントリゾート「アイランドリゾート初島」など多数の次世代のリゾートをプロデュース。独立後軽井沢、箱根、シンガポール、マレーシアなどでオルタナティブリゾートを提案。東京、岐阜で地域のセレクトショップカフェの開発等を行う。
オルタナティブリゾートプロデューサー、縁側研究家、(株)リゾートコミュニケーションデザイン代表、日本観光研究学会会員、アウトドアデザインジャパン実行委員会事務局長。

グランピングとは

「グランピング」とは「グラマラスなキャンプ」という意味で、日本での使われ方は従来のキャンプ場に「贅沢さ」と「快適さ」の要素を加えた「ラグジュアリーなキャンプ」といったところか。しかしながら欧米でのグランピングは幾分意味合いが異なる。

欧米での「グランピング」は①自然と溶け込むまたは一体感のある宿泊スペースやアウトドアリビングがある。②サービスや食事がその土地ならではのまたはその土地とのギャップ（ラグジュアリー感）を楽しむことができる。③その土地ならではの多様なアトラクションやガイドツアーを楽しむことができる。といった要素を持つ。

これらを楽しむ人たちを「グランパー」と呼ぶ。植民地時代の欧米人がシェフを連れてアフリカを旅したのが発祥と言われる。

今のグランピングに近い「快適」「贅沢」「遊べる」といったリゾートキャンプの展開は、1990年代前半からアメリカの「KOA」（キャンプグラランドオブアメリカ）・イギリスの「ブリティッシュ10」・オーストラリアの「BIG4」など、「チェーン展開する会社」や「個人キャンプ場が連携するグループ」が場内の一區画に「スイートサイト」というラグジュアリーなサイトを作ったことに始まる。またそのころには「ある遊びに特化した」個人のキャンプ場も散見された。例えばアメリカ、イエローストーンの近くの「フィッシングロッジ」は30数キロのプライベートリバーを持つフライフィッシング専用のキャンプ場だ。定員は10人にも満たない。ラスベガス郊外のパームスプリングスにはゴルフ場コースの脇にキャンプ場があったりもした。キャンプ場といっても、日本でいう高級貸別荘のようなロッジだったり、8フィート以上のキャンピングカーやトレーラーをゆったりと留めて楽しむことができるRVパークだったりする。

「自然と溶け込むまたは一体感のある宿泊スペースやアウトドアリビングがある」キャンプ場やリゾートホテルが目立つようになったのは2000年代前半からだろう。アマンリゾーツのテントリゾート「アマニカス」は2003年オープンである。

施設として森と一体となったツリーハウス

や豪華なテント・海辺のケビン。そこに宿泊し食事は地元ならではの食事、豊富なガイドツアー、ワークショップなど年々充実した施設ができた。

日本のグランピング

バブル崩壊後1990年代初め節約ブームの中、割安なレジャーとしてオートキャンプやBBQブームが到来した。そのころ今までの「汚い」「危険」などの従来のキャンプ場のイメージを一新する民間のキャンプ場が数多く誕生した。中には「欧米型キャンプ場」を標榜するキャンプ場も現れ、この時期が「日本のグランピング創成期」となる。アメリカでその当時キャンプ場を400か所以上展開するKOAの日本法人がFC展開を始め、(現)伊勢志摩エバークレイズ(三重)・(現)キャンプ・アンド・キャンピズ那須高原(栃木)が当時FCとして参加。アメリカ型の「快適」「遊べる」キャンプを始めた。1995年、三井系の社内ベンチャーで筆者がおこしたPICA(ピカ)は、「お出かけ気分」でキャンプする、PICA流キャンプ…ハイヒール・ミニスカートで来られるキャンプ場として山梨にオープンした。「快適」「遊べる」に加え出不精な日本人に対して「気軽さ」を強調した。また結果的にグランピングの主要素の一つである「自然と溶け込むまたは一体感のある宿泊スペースやアウトドアリビングがある」ことに重要性を置き、自然に近い「キャンプ」→「パオ」→「簡易キャビン」→「トレーラーハウスやコテージ」など「自然との距離感」や「顧客が誰と何の目的で来るのかで選べる宿泊形態」「屋根付きで雨でもBBQのできるアウトドアリビング」は「PICAスタンダード」として展開していた。

第二期は2000年代初めと考える。2006年筆者がプロデュースしたテントリゾート「初島アイランドリゾート(静岡)」が欧米でのグランピングスタンダード第一号で、同様に2008年のパーマカルチャーガーデンのあるエコビレッジ「PICA山中湖ヴィレッジ(山梨県)」がそれに続く。その後「北軽井沢スウィートグラス(群馬)」・「伊勢志摩エバークレイズ(三重)」・「キャンプ・アンド・キャンピズ那須高原(栃木)」や富士五湖を中心に9か所のキャンプ場を展開する「PICAグループ(富

士急行関連会社)」の個々の事業地が施設更新や増設の際「快適」「贅沢」「遊べる」をテーマにバージョンアップした。2010年代に入って「RENヴィレッジ（静岡）」、「FBI淡路（兵庫）」、「ライジングフィールド（長野）」など個性的な施設もでき、星野リゾートも2015年10月に山梨県河口湖町でグランピング施設に参入した。

また宿泊施設とは別に日本固有の展開として「グランピングテイストの飲食業」というカテゴリーが急拡大している。新豊洲にある「ワイルドマジック」など欧米での「グランピング」とは違う展開も日本では見られる。



初島アイランドリゾート（静岡県熱海市）

オルタナティブリゾートとは

本来、リゾートの語源はフランス語の“resortir” ル・ソルティで、「再び出かける」という意味。一度で終わることなく、何度でもそこに行きたい場所である。もう一度自分を取り戻すために、もう一度自分を見つめ直すために、そこを訪れあらゆる自由を満喫する。リゾートの本質は「文化」でもある。

今までのリゾートは、日常とは違う空間でサービスを受ける非日常生活の場「束の間の夢」を求めて出かける、いわゆる憧れの非日常体験の場としての「リゾート」だった。

しかし今では、失われた豊かな日常生活への回帰の場「本質的で豊かな暮らし」を求めて出かける「オルタナティブリゾート」へと変容している。具体的に「オルタナティブリゾート」とはどんなリゾートなのか。「初島アイランドリゾート（静岡）」を例にとってみよう。テーマは「R-Asia アールアジア…あるアジアつまりどこかのアジアリゾート」。事業地全体が40年近く続く熱帯植物園で、ヤシの木が大きく育ちリュウゼツランなど珍しい熱帯植物も点在し、宿泊施設は海を眺めるように島の一番高いところに点在するオリジ

ナルのテントである。夕食は海鮮BBQが用意され自分で焼くか、近くの漁師さんがやっている店舗でとるか選べる。朝食は宿泊施設に運ばれる。お風呂は東南アジアのリゾートのように浴槽と水平線が切れ目なく設計された海水を温めたお風呂、熱帯植物に囲まれた広場では木陰でハンモックに揺られ、ライブや食事、ショッピングも楽しめる。夏はプールもあり、「さるとび」という森のアスレチックでは木の上から海が見える絶景が楽しめる。近くにはダイビングスクールもあり、島を回るガイドツアーもあるので長期滞在しても飽きない。この初島は東京都心から最も近い有人の島で、熱海から船で30分かかる。日帰りも可能だ。

テントの布地一枚で風を感じ、その土地ならではの自然の音に耳を傾け、その土地ならではの気配を感じ、時にはハンモックで読書を楽しむなど暮らすように過ごせる。また自然と親しむ施設やガイドツアーや地元の漁師さんの食事などを楽しむ。土地の自然を知り、土地の人々との交流を通して今の日常とは違う自然体の日常を過ごす。そしてもう一度訪れたい。まさに「オルタナティブリゾート」だ。今この初島が「グランピング施設」として注目されている。「グランピング」は単なる豪華なキャンプではなく、私が提唱する「オルタナティブリゾート」の一形態なのである。

リゾートにおけるコミュニケーションの重要性とその仕掛け

明治初期のベランダ建築と縁側そして土間

ベランダ、バンガローはインド起源のことばだ。植民地時代のインドではイギリス人がインドでの居住性の観点からベランダ建築を進めた結果、“ベランダの出現はヨーロッパ人と現地人のコミュニケーションの向上につながった”「ベランダができて初めて現地人と話したというヨーロッパ人も少なくなかった」（『日本の近代建築〈上〉―幕末・明治編―』岩波新書 藤森照信著）とのこと。つまり内でも外でもないこの空間はコミュニケーションの場になった。日本ではご存知の通り「縁側」だ。近所の人が縁側に腰掛けて、お茶を飲み話して帰っていくコミュニケーション

の場である。日本の「土間」は庭の畑から直接食材を採ってきて食事を作る場所。自然や文化とのつながりを大切にしたいキッチンだ。

今後のリゾートにとってコミュニケーションの仕掛けはかせない。なぜなら「本質的で豊かな暮らし」はコミュニティなしには成り立たないからである。「グランピング」にはアウトドアリビングやアウトドアキッチンがある。それは「縁側」だったり「土間」の機能を持つ。「内でも外でもない空間」の演出とコミュニケーションのデザインが重要である。

今後のリゾートの方向性

これからは「リゾートにおけるコミュニケーションをいかにデザインするか」という多種多様な取り組みが行われていくであろう。その取り組みこそが「オルタナティブリゾート」である。また私がエコビレッジ「PICA山中湖ヴィレッジ」で試みた宿泊場所のコンセプト「座して半畳、寝て一畳」「足を知る」などは今後さらなる展開が可能だ。昨今アメリカで住みたい街で常に上位のポートランドでは「タイニーハウス」というミニマムに暮らすムーブメントもある。ミニマムな暮らしとシェアコミュニティもキーワードのひとつだ。都市型リゾートであれば「ゲストハウス」「ドミトリ」「Airbnb」などの民泊、いわゆるシェアリングエコノミーも今後さらに注目されるであろう。暮らしとリゾートが混在し「縁側化」「土間化」することがオルタナティブリゾート化しているともいえる。

もう一つは「ワーキングリゾート」（ビジネスリゾート）。それはリゾートで仕事をするという概念である。ネットがつながりクリエイティブな仕事ほど仕事場を選ばない。「リゾートに仕事を持ち込む」というネガティブな側面ではなく、リゾートで仕事ができるからこそ「リゾートで家族と過ごす時間ができる」というポジティブな側面が重要になる。先述の富士山の麓、山中湖のほとりにある「PICA山中湖ヴィレッジ（山梨県）」はWi-Fiも繋がるし経済紙も置いてある「ワーキングリゾート」だ。カンファレンスルームもあり、ミーティングはもちろん研修も可能だ。「ワーキングリゾート」は今後とも広がっていくであろう。

（かとう ふみひと）

各論

6

DANCHI Caravan
in 町田山崎団地～団地deキャンプ&
防災ワークショップ～

吉田裕輔

UR都市機構 東日本賃貸住宅本部
住宅経営部 管理企画チーム主査

吉田裕輔

1981年 兵庫県生まれ

2006年 東京都立大学大学院都市科学研究
科修士課程修了

2006年 UR都市機構入社

団地管理業務に関わる傍ら団地を舞台とした
新たな取組みに取り組んでいる。

はじめに

2015年2月28日、3月1日の2日間、UR都市機構東日本賃貸住宅本部では、UR賃貸住宅町田山崎団地（東京都町田市）において、DANCHI Caravanと銘を打ち、「防災」をキーワードとした屋外でのキャンプとワークショップイベントを開催した。本稿では、本イベント開催に至る経緯とイベントの様子などについて紹介する。

団地でキャンプ？

若手チャレンジプロジェクト

2014年度、UR都市機構東日本賃貸住宅本部では、本部長直轄の新プロジェクトとして、若手が自発的・積極的に今後のUR賃貸のあるべき方向性を打ち出すことを目的として『若手チャレンジプロジェクト』が立ち上げられた。このプロジェクトの中で「UR賃貸住宅の新たな需要喚起プロモーション方策」について検討していた1チームが、団地の多様な屋外環境に着目したことからDANCHI Caravanの取組みは始まった。

UR賃貸住宅では、団地建設当初から屋外空間を確保し、快適な住環境を提供するために、住棟配置に配慮した設計を行ってきた。これにより生み出された豊かな屋外空間を体感し、団地の魅力に気付いてもらうとともに、その魅力を発信することで多くの方にUR賃貸住宅の住環境の良さを知ってもらいたい。このため、共用部である屋外も一つの居場所であることを体験するための取組みとして、これまで団地内の敷地では実施したことがない宿泊を伴うキャンプをやったらどうか、という発想に至ったものである。

「防災」をテーマに

ただ単に団地でキャンプを実施するだけでは魅力の発信としては弱く、団地で開催するイベントである以上、居住者にとっても意義があり、魅力を感じてもらえるコンテンツとする必要があった。

これらをふまえ、キャンプに関する知識の多くが被災時にも役に立つものであることに着目して、「防災」をテーマとして組み込み、東日本大震災が発生した3月11日の直前に、キャンプを軸として幅広い世代に「楽しい防災」を体験してもらうことを狙いとした。

実施団地

UR賃貸住宅には、豊かな自然環境がある。この点を多くの方に知ってもらうために、広大かつ魅力的な屋外空間を有している団地で実施する必要があった。このため、東京都内随一の敷地面積を有し、本イベントの開催趣旨に団地自治会が共感・協力をしていただけた町田山崎団地で開催することとなった。

参加団体の広がり

団地でキャンプをする。言葉でいうのは簡単だが、これまでURが団地内の屋外空間で大規模なイベントを主催したことは一度もなかった。当然のことながら、イベント開催に必要なノウハウも持ち合わせていなかった。

このため、民間企業などに対してDANCHI Caravanの開催趣旨などを案内し、本イベントへの参加を打診したところ、開催趣旨について共感、賛同して頂けた無印良品キャンプ場を運営する（株）良品計画が企画・運営として、桜美林大学、（株）エフエムさがみ、コールマンジャパン（株）、（株）ジェイコムイースト、（株）ハクサン、町田山崎団地自治会・自主防災会、三菱自動車工業（株）などが協賛企業・団体として参加していただけることになった。

イベントの内容を固めていく過程で、キャンプイベントでは参加者数が限られるため、キャンプイベントの参加者以外の方も「楽しい防災」を体験できるように、団地外の方も参加できる体験型の防災ワークショップを合わせて開催することとした。

防災ワークショップ

防災ワークショップでは、団地居住者だけではなく、会場に訪れたすべての方が参加できる7つのコンテンツを実施した。

ここでは主なものについて紹介したい。

いつものもしも（良品計画）

「食事時の節水方法」や「もしもの時のトイレ」など、ふだん使いできるモノをいざというときの防災用品として役立てる策を大人から子供まで学べるプログラムを実施した。



写真1 いつものもしも～食事の時の節水方法～

いつも街に花を（ハクサン）

東日本大震災の被災地をはじめ、様々な被災地で花が被災者の心を癒し、コミュニケーションを育んだ事例を踏まえ、団地に花が根付くように苗植え体験などを実施した。

車はもしものセカンドハウス(三菱自動車工業)

プラグインハイブリット車を使って、停電時に非常電源として使用する方法を紹介するとともに、被災時に自宅に戻れない時の車両を活用した快適な宿泊方法を紹介した。

団地deキャンプ

キャンプイベントについては、無印良品キャンプ場のスタッフとコールマンジャパンのスタッフが講師となり進められた。なお、真冬の開催であったことから、緊急時に速やかに避難できるようにキャンプイベントの参加者は団地内及び団地近隣の居住者に限定した。

多様な参加者

団地deキャンプの参加者は、8組の家族と自治会・自主防災会の方々であった。最年長は82歳、最年少は1歳と、実に幅広い世代の方々に参加してもらうことができた。

	大人	子供	属性
①	1人	2人	町田山崎団地 居住者
②	2人	1人	
③	2人	1人	
④	2人	2人	町田山崎団地 周辺居住者
⑤	2人	2人	
⑥	2人	2人	
⑦	2人	1人	
⑧	2人	3人	自治会・自主防災会 員
他	8人	0人	
合計	23人	14人	計37人

表 団地deキャンプの参加者

いざテント設営

団地deキャンプはテントの設営から始まった。昨今のキャンプ用品の発達と熟練されたスタッフの丁寧な説明により、子供でも簡単に組み立てることができた。設営されたテントが大きかったこともあって、子供たちを中心に盛り上がり、多くの参加者がキャンプの手軽さ・魅力に入り込んでいる様子であった。



写真2 参加者によるテント設営



写真3 団地deキャンプ会場（住棟屋上より）

夕食づくり

夕食は、水が最大の貴重品である災害時でも役に立つ調理法によって調理されたパスタのほか、子供向けにバーベキューを用意した。子供たちは外で食べるバーベキューに大満足であった。一方で、大人からは少量の水で茹で上げるパスタの調理方法について、味が落ちることなく、災害時に十分活用できる調理方法であったため驚きの声が上がっていた。

たき火を囲んで

夜も更けてきたころ、初日最後のプログラムである「たき火」をスタート。子供たちはたき火を囲んで焼きマシュマロを楽しみ、大人たちはその様子を見ながら、思い出話や被災時の万が一の状況を想像して会話をするなど、それぞれに普段の生活では体験することのできない時間を満喫しているようであった。



写真4 たき火を囲んでマシュマロ焼き

朝食、そして片付け

朝食は、普段から住宅にストックしておけるシリアルなどの簡単なものを用意した。何気ない食事ではあったものの、普段からこのような食材をストックしておく重要性を感じている参加者もいた。

朝食後はテントの片づけへ。こちらも設営同様スタッフからの丁寧な説明のあと、家族で協力し合いながら無事に片づけを行っていた。

テント片付け後、天気も崩れ始めていたため、団地deキャンプは終了となった。

参加者の声

後日、団地deキャンプの感想をアンケート形式で尋ねたところ、「団地内でキャンプを行うことは画期的である。」「このような機会が

あると若い世代も参加しやすいので団地のイメージも変わるのではないか。」「災害時は皆で助け合い、協力し合うことが必要なので、今後も続けた方が良い。」「有料でもいいので次回も参加したい。」という意見が寄せられた。

寄せられた意見はこのようなポジティブな意見ばかりであり、アンケートに回答を寄せた全参加者から「また参加したい」という意向が示された。また、自治会・自主防災会の方々からも災害時に備えた事前学習の場として非常に有益であるばかりでなく、コミュニティ活性にも一定の貢献が見込めるイベントであったという嬉しい意見も寄せられた。



写真5 団地deキャンプ参加者全員の集合写真

終わりに～今後の展開～

防災ワークショップとキャンプで構成されたDANCHI Caravanは、いずれのコンテンツも好評であり、普段の生活の中にあるものを災害時に活用する知識を身につけ、楽しく防災を学ぶというコンセプトは非常に有意義であったと実感することができた。また、イベントの様子について20以上のメディア媒体で取り上げられるなど、UR賃貸住宅が持つ魅力的な屋外空間を発信することにも十分な効果があつたと感じている。

一方、事前周知の方法や当日の会場への誘導などを改善できれば、より多くの方に参加いただけて、さらに効果的なイベントにできるのではないかと感じたのも事実である。

これらの反省点も踏まえ、第2回目として2016年3月5、6日の2日間、再び町田山崎団地でDANCHI Caravanを開催する予定である。イベント概要については、ホームページ「O-LDK」¹⁾に順次アップしている。町田山崎団地のお近くに足をお運びの際はぜひDANCHI Caravanにお越しいただきたい。

1) DANCHI Caravanホームページ「O-LDK」

URL : <http://www.ur-net.go.jp/o-ldk/>

(よしだ ゆうすけ)

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。言わずと知れた松尾芭蕉のおくのほそ道の冒頭のくだりであるが、300年以上前に既にこれほどまでに前衛的に生きた彼の人の言葉は今なお新しくあり、それでいてずっと心に入ってくる親しみがある。今回、中谷ノボル氏とお話する機会を得て、現代社会で働く事によって芭蕉のように生きられないという先入観が見事に打ち碎かれた。インターネットが人と情報を繋ぐこの21世紀は、誰もが様々なスタイルで旅人たりえるのかもしれない。

(黒柳 亮)

長野県小谷村に梢乃雪という古民家ゲストハウスがある。そこには何も無いが理想的な『田舎』の体験がある。自然に抱かれた風景の中、何もせず縁側でまどろみながら過ごす。気が向いたら山や川に遊びに出かけ、夜になると満天の星空が広がる。それはこの地域の人にとっては当たり前の日常である。しかし私にとってはお金を払い、何時間もかけて来訪しないと得られない非日常の棲み処になる。これは寝泊まりの場の進化ではなく、再発見なのかもしれない。ただ、多くの現代の人にとっては真新しい体験であり、こうした場に価値を見出すことに今後の可能性を感じる。

(今井充彦)

生活をしていく基礎となる「衣住食」。今回はその一つ「住」の中でも、様々な視点から「住（棲み処）」として取り上げておりますので、多彩な内容となっております。

残念ながら採用を見送った他の内容につきましても、別の視点から取り上げており、純粋に住に関する色々な体系に触れる事ができ、感心と驚きがありました。

選定する側である私も楽しみながら作業させていただきましたので、是非、一読してみてください。

(川合隆之)

編集後記

インテリア・住宅系分科会

年に数回ビジネスホテルを利用することがありますが、近年はサービスが多様化しており、またその質の高さにも驚かされます。加湿器・空気清浄器の標準設置、新聞の配達、ピュウフェ形式の朝食は当たり前になっており、最近では自分にあった枕をコーディネートしてくれるサービスや、大浴場やサウナ付きのホテルもあるようです。これまでのビジネスホテル選びではいかに利便性の良い場所にあるかが最重要でしたが、今ではサービス内容も決め手の一つになっており、そのサービスを受けることが、私の身近な「非日常の棲み処」における楽しみでもあります。

(工藤理隆)

昔から遊牧的に暮らすことへの憧れのようなものがあります。一方で旅先からの帰宅時に「我が家が一番」と思うこともあります。本特集での事例の中には、その中間のようなリラックスした寝泊まりがいくつもありました。約30年前に伊東豊雄氏が都市生活者の空間をダイナミックに表現し、東京遊牧少女の包を提案しました。いまだに色褪せない興味深い提案だと思います。本特集での寝泊まりを通して見た空間はとても多様性があり、社会構造の変化に密接につながっていることがわかりました。これからもライフスタイルの変化に呼応する建築に注目してきたいと思います。

(酒井雅男)

ここ数年、海外ではホテルではなくアパートメントやB&Bに泊まることが多い。地元暮らし感覚は圧倒的で、流儀の多彩さやオーナーの個性が楽しめる。ピンからキリのピンを選ぶせいか、運営にプライドが込められレベルは高く、価格以上のクオリティがある。常駐人不在も多く、鍵の受渡しや到着時刻の予告・厳守といったハードルは決して低くはないが、満足度が凌駕する。これらの魅力は昨今の話題性の方向とは距離がある。『民泊』への追い風は、レベル向上にはリスクともなり得る。しかしそれも過渡期として、開拓が進む分野になる筈だ。旅の強者は増えている。

(塚口眞佐子)

インタビューでも話題にあがった「旅するように暮らす」というのは、私の求めている、憧れている暮らし方でもある。旅が楽しいのは、基盤となる「家」があるからかもしれないが、それらが同等になる事も可能ではないかと。「宿」と「家」との違いを深く考えていくと頭が混乱もしてくるが、ずっとそこで暮らすことの安心感に、移動による新鮮さや日常と非日常が入り混じる生活も加わると、とても魅力的だと思う。インターネットの時代、ある期間は山とか海辺等を拠点（移動拠点）として仕事／生活しながら時々都市生活も楽しむ、そんな生活に早く入りたい。。

(ペリー史子)

連載 No.542

法令コーナー

集合住宅に附置すべき
駐車施設の整備基準を
見直し—「神戸市民の住環境等まもり
そだてる条例施行規則」を
改正—

酒井 優

神戸市住宅都市局建築指導部建築調整課建築調整係長

神戸市は、集合住宅（共同住宅又は長屋）における駐車施設の整備基準の総合的な見直しを進めている。

このため、平成27年4月に新たな指導対象としてオートバイ等（その他二輪車）を追加するとした「神戸市民の住環境等をまもりそだてる条例」（以下、「本条例」という。）の一部改正を行った。

また、平成28年2月には、具体的な基準を定めている「神戸市民の住環境をまもりそだてる条例施行規則」（以下、「本条例施行規則」という。）について、整備基準の見直しや運用基準を新たに定める等、一部改正を行うこととした。

条例改正の背景

神戸市では、自動車の保有台数が大幅な伸びを示していた平成2年に、集合住宅の建設に伴う路上駐車を防止する目的で敷地内に駐車施設を確保するよう集合住宅駐車場整備基準（要綱）を定めた。

平成6年には整備基準を見直し、整備率を引き上げるとともに、総合的かつ計画的な住環境等の保全及び育成を図ることを目的として、それまで個々に運用されていた施策を統合し本条例を制定することによって、集合住宅を建築しようとする事業者に対して駐車施設の整備基準を課すなど近隣住環境に及ぼす影響に対して適切な措置をとるよう指導してきた。

本条例制定から20年あまりが経過し、自動車については一世帯当たりの保有台数も減少傾向にあり、取締り強化により路上駐車も減少した。

しかし、オートバイ等については所有率が増加傾向にあり、路上駐車が多く見られるようになるなど、施行時と自動車・オートバイ等を取り巻く社会状況が大きく様変わりしている。

平成24年度に神戸市が行なった集合住宅

の駐車施設に関するアンケート調査からも駐車場需要の減少やオートバイ置場の必要性が高まっている結果となっている。

また、平成27年4月には集合住宅を除く建築物に対して駐車場の附置義務を定めた「建築物に附置すべき駐車施設に関する条例」を改正し、駐車場整備率の引き下げや新たにバイク置場の義務化を行った。

このような状況をふまえ、集合住宅に附置すべき駐車施設の整備基準を定めた本条例施行規則の見直しを行うこととした。

施行規則改正の概要

■オートバイ等置場の整備基準の新設

オートバイ等の置場の整備基準を新設し、その整備率は「住戸数の10%以上」とした。

また、基準台数の20%以上を自動二輪用置場（1.0m以上×2.3m以上）とし、残りを原動機付自転車等の置場（0.8m以上×2.0m以上）と定めた。

神戸市は坂が多く自転車よりもオートバイ等の需要が多数あることから、基準値を超えて整備されたオートバイ等の置場の台数を、自転車置場の整備基準台数から減ずることができるものとした。

■駐車場整備率の緩和

建設敷地の用途地域及び集合住宅の住戸数に応じて、整備率を満たす駐車場を確保することとしており、次のとおり引き下げることとした。

①ファミリー住戸（専用面積30㎡以上）

ファミリー住戸の用途地域ごとの駐車場整備率を、下表のとおり5ポイント程度引き下げる。

用途地域	住戸の数	整備率 (改正前→後)
第1・2種 低層住居専用地域 第1・2種 中高層住居専用地域	10戸以上30戸未満	30% → 25%
	30戸以上70戸未満	50% → 45%
	70戸以上	70% → 65%
第1・2種、 準住居地域 準工業、工業地域	10戸以上30戸未満	20% → 15%
	30戸以上70戸未満	40% → 30%
	70戸以上	50% → 45%
近隣商業地域 商業地域	10戸以上30戸未満	10% → 5%
	30戸以上70戸未満	20% → 15%
	70戸以上	30% → 25%

表 ファミリー住戸の駐車場整備率

②ワンルーム住戸（専用面積30㎡未満）

ワンルーム住戸の駐車場整備率を、「ファミリー住戸の1/2」から「ファミリー住戸の1/3」に緩和する。

■ワンルーム住戸の自転車駐輪場整備率の緩和

ワンルーム住戸に対する駐輪場整備率を、「住戸数の100%以上」から「住戸数の60%以上」に緩和した。

ただし、整備率が住戸数の100%を下回る場合は上段の利用が難しい上下2段式を避け、平置きにするよう指導する。

■敷地外駐車場を認める場合の基準の緩和

①距離制限の緩和

建築物の構造又はその敷地の状況により、市長がやむを得ないと認める場合の敷地外駐車場については、敷地から敷地外駐車場までの距離を、「概ね200m以内」から「概ね350m以内」に緩和する。

②地域のまちづくり等に資する場合の容認

まちづくり協定や景観形成市民協定の区域等において、敷地が「駐車場の出入口を設けない」等のルールが定められている道路に接し、かつ、敷地内に駐車施設を設けないことが当該協定等の趣旨に適合する場合は、敷地外への駐車場確保を認める。

■既存駐車場についての緩和制度の新設

建設当時、駐車場の需要が高かった集合住宅でも自動車の保有率の低下等により空き区画が増え、その維持管理の負担が大きくなり、適正な管理が困難になっている駐車場が増加している。

そこで、既存の集合住宅に附置された駐車場で利用されていない部分について、整備率以下に緩和（撤去）できる制度を新設した。

緩和される台数は整備基準台数の1/2を上限とし、緩和される期間は概ね3年で再申請により期間の延長は可能とした。

【要件】

- 完成後10年以上経過した集合住宅に付属する駐車場であること
- 過去5年間の利用実態等からみて当面の利用見込みがないこと
- 近隣住環境の維持に支障がないと認められること
- 今後、駐車場が再び必要となった場合を考慮し、撤去した駐車場部分は容易に復元できる利用形態とすること

おわりに

今回、駐車施設の基準を見直したが、今後とも住環境等の保全及び育成を図るため、その時勢に応じ、基準の見直しや新たな施策を行っていきたい。

（さかい まさる）

酒井 優

1989年神戸市役所入庁。

再読 関西近代建築
— 論考・記事編 —

2

江村郊邨
「住宅改造博覧会を
覧て」『建築と社会』第5輯第11号
(大正11年11月号)

和田康由

大阪市立都島第二工業高校

日本建築協会は、設立当時から近代法制的の整備、住宅難緩和、生活改善・住宅改良などの調査・研究を実施し、それらの成果を披露すべく、東西の政財界の叡智を集めて住宅改造博覧会を開催した。採り上げた記事は、協会の一員である江村郊邨が博覧会を見聞した内容である。本稿はその見聞を通じて博覧会を論考したものである。

■社団法人日本建築協会誕生と住宅
改造博覧会の背景

第一次世界大戦が終結した大正7年前後には、国の富国強兵政策や産業の発達、戦後の好景気も手伝って都市に人口が集中し、全国的に都市問題や住宅問題が顕在化していた。建築界では、それら社会の潮流に反応し、日本建築学会(明治19年(1886)設立当初、造家学会、以下学会)の活動に加えて、大正6年(1917)、後藤新平、池田 宏など内務省を中心とする都市研究会(以下研究会)や、関西においては片岡安を中心とする日本建築協会(当初、関西建築協会、以下協会)などが立て続けに設立される。これらの3会は、都市問題の改善、住宅難緩和、生活改善・住宅改良やイギリス人社会改良家E. ハワードが提唱した田園都市論の受容などを目的に都市計画法、市街地建築物法や住宅組合法など近代法制的の調査・研究を重ねていた。政府は、3会の研究成果を受け、同7年11月小住宅改良要綱の答申、同8年4月都市計画法と市街地建築物法の公布、昭和2年(1927)3月不良住宅地区改良法の公布など近代法制的の整備を行う。さらに、住宅政策の一環として大正期から住宅建設資金として低利資金貸出の実施、主要都市には公営の貸長屋や共同宿泊所などを建設するとともに、労働者向けの貸家供給を推進するための住宅組合法を大正10年4月に公布するなどの政策を打ち出した。この低利資金の貸出を受けた会社は、大阪では藤田系安治川土地(株)(同6年12月22日設立)、住友系大阪北港(株)(同8年12月24日設立)、大阪商船系山岡順太郎が率いる大阪住宅経営(株)(同9年3月10日設立)の3社のみである。

これらの社会情勢を背景に、協会は同8年12月5日、大阪住宅経営(株)から「改良住宅(四戸建)設計懸賞」の募集及び審査の委嘱を受け、研究会は同9年1月大阪住宅経営(株)の親会社である北大阪電気鉄道(株)から「田園都市の設計」の依頼を受ける。さらに、協会理事葛野壮一郎は大阪住宅経営(株)の経営地千里山住宅地の技師長と同時に住宅改造博覧会(以下博覧会)臨時博覧会部幹事長を務め、同理事小笠原鋳は大阪北港(株)の住宅・住宅地の開発や博覧会に携わる。このように3会は、黎明期の近代住宅政策や生活改善・住宅改良などの試験的の取り組みを通じてそれらの実効性を探っていったといえよう。

■社団法人日本建築協会による住宅
改造博覧会への路

都市問題や住宅問題などが社会問題化していた時代の機運に促され、関西では片岡安と波江悌夫が連名で関西の建築家たちを結集す

る。片岡安、波江悌夫、池田實、設楽貞雄、武田五一は同6年3月30日に創立総会(出席者39名)を立ち上げ、協会を設立させる。協会に結集した人々は、創立委員に加え宗兵蔵、野村一郎、松本兎像、葛野壮一郎、小笠原鋳らであった。当初会員の条件には、「当分学会正員の関西在住者を以て組織する」とあり、学会と同レベルの人材の確保に努めていたようである。名誉賛助員には後藤新平、中橋徳五郎、池田宏、山岡順太郎、柿崎欽吾、関一らが名を連ね、研究会には関西から永田三十郎(北大阪電気鉄道(株)取締役社長)、山岡順太郎、片岡安ら、特別会員には池上四郎(大阪市長)ら、賛助会員には池田らが加わり、東西の叡智を集める陣容であった。

協会は設立後、調査・研究事項を12項目掲げ、さらに6項目に絞って、第一部委員〔現行関西の建築取締規則の改正〕、第二部委員〔仕様書及契約書案〕、第三部委員〔細民住宅問題〕、第四部委員〔建築に関する時事問題〕、第五部委員〔建築に関する迷信及伝説の調査〕、第六部委員〔大会準備委員〕を組織した。協会は会誌『関西建築協会雑誌』(同9年『建築と社会』に改称)の発行や講演会・講習会などの実施で、これらの成果を次々と発表する。協会は、こうした普及・啓発活動を通じて近代法制や生活改善・住宅改良などを人々に浸透させ、博覧会へと機運を高める。

■住宅改造博覧会と改良住宅懸賞図
案募集・審査

協会は同10年2月、新旧理事会で博覧会の今秋開催、副会頭片岡、会頭後藤に委嘱することなどを決定し、同月博覧会準備委員に片岡、宗、武田ら34人を選出、3月学会の意向を受け開催日を今秋から明秋に変更するなど、学会との調整を図る。また、同年4月には博覧会懸賞委員会を始動する。

協会は、博覧会に向けて短期間に3度の改良住宅懸賞図案募集を実施する。第一回と第三回は一戸建住宅、第二回は田園都市の影響か大阪住宅経営(株)の設計懸賞と同じ四戸建である。博覧会は一戸建で構成されているが、長屋建は建てられていない。おそらく、第二回は、洋風の二戸建、四戸建、六戸建で構成された大阪北港(株)の経営地用であったと推察される。このことは、同じ改良住宅の懸賞による大阪住宅経営(株)が開発した千里山や鶴ヶ丘の経営地に、二戸建が多数建設されていることと何らかの関係があると見てよい。

第一回と第三回改良住宅懸賞図案募集はそれらの規定から第一条に「日本建築協会は本規定に基づき改良住宅設計図案を一般競技により募集す」とし、「当選及び選外優秀図案は



大正11年9月開催予定なる本協会主催の住宅改造博覧会に之を陳列す尚其の数案に基づき建築の実施又は模型の作製を為すことあるべし」と唱え、協会の生活改善・住宅改良の意気込みを強調する。第二条の設計条件は、「市街地に於ける一戸建住宅、市街地建築物法の制限に適合すること、家族は主人、主婦、老人1人、子供2人、女中1人の計6人、敷地は、前面のみ道路（幅員4間）に面し間口5間以下とす、敷地面積50坪、二階建、延坪35坪以内、建築費約6千円（門塙、庭園費を含みます）、構造及び様式は設計条件の範囲内に於いて自由、設計の主旨は生活改善の意義を闡明にするもの、締切同10年8月31日」と定める。

第三回で第一回と異なるところは、第二条の設計条件では「郊外に於ける一戸建住宅、敷地面積150坪以下、二階建又は平家建、建坪（1坪6尺4方）は法規の制限及び建築費の範囲内に於いて任意とする、建築費1万2千円で、締切同年1月31日」である。

第一回の応募図案の内容については、概評によると応募数は118通、その1割は急進的改良、8割は漸進的改善、残り1割は従来の住宅に多少の改良を加えたものと分析する。

第三回の応募数は124通、その8割迄が急進的なもので前回の審査発表の影響を受けたのではと分析し、漸進的なものが現代に適応するのではと捉え、日本の気候風土に対して研究考慮した点の少ないのは甚だ遺憾であると評している。協会は懸賞の当選案の中から8案を選出し、手を加えて博覧会に出品した。

■住宅改造博覧会の出品住宅

協会は、同11年9月21日から11月26日の期間、大阪府豊能郡箕面村桜ヶ丘において博覧会を開催する。協会は当初会場を天王寺公園に予定していたが、田園都市を標榜する意図から箕面有馬電気軌道（現、新・阪急電鉄）が明治44年に開発していた郊外の桜井住宅地の北方、田村眞策の所有地を借り受け変更している。会場は標高70m程度の見晴らしの良い丘にあり、敷地面積は15,000坪、そのうち住宅地は約5,000坪で、出品住宅は25戸、総経費は25万8千円であった。

主催は協会、博覧会会長は片岡、博覧会総裁には後藤が就任した。目的は「現代の国民生活に適応した中流の住宅を実現して聊か国民生活の文化向上に資する所ありたい」とする。出品住宅は合資会社竹中工務店（A・B号）、田村地所部、（株）大林組（A・B号）、片岡建築事務所（甲・乙）、横河時介、あめりか屋大阪支店、（株）大阪橋本組、（株）鴻池組、眞水三橋建築事務所、大阪住宅経営（株）、（株）銭高組、葛野建築事務所、合資会社清水組大阪支店、（株）横

田組の17戸と協会の8戸の計25戸である。大阪住宅経営（株）は、自社の出品住宅と協会の改造住宅を建設し博覧会に貢献する。

博覧会では、半円の同心円状に道路を配した田園都市を彷彿とさせる街区設計を行い、上下水道の設備を施した。ガスはまだであったが、電気はすでに供給されており、住宅の展示にとどまらず実用の居住地としても充実したものを実現した。

出品住宅の平面計画は、広間（ホール）と廊下により各室に連絡し、室の独立性を高めるものが多い。また、居間、食堂及び居間兼食堂の脇に、床より一尺余り高い4畳程度の畳敷きを設けたり、同様の方法で洋室と和室とを一室化する工夫が出品住宅の半数以上で採用されている。

協会は、出品住宅以外に大阪毎日新聞社出品「簡易テント村」、暖房設備などの他、西洋及日本の住宅建築の変遷を解説する図、大阪北港（株）住宅経営配置図、内務省出品田園都市及労働者住宅の写真と図面、改良住宅懸賞図案当選案図面などを展示し博覧会の意義を啓発する。

■住宅改造博覧会の評価と今

博覧会副会頭片岡は、博覧会について「家が悪いんだ、一万二千円で、第一値が高い。さう云ふやうな家をキャッシュで出して買ふやうな人は自分で建てる、まあ、四五千円までと土地を入れて五六千円がねらひ所だつたんだけれども、殆ど競争で我も我もで遂々、一万円程度までにせり上つて了つたんだ。然し兎に角大事業だつた」（創立満15年記念号

一その頃を語る座談会一 本会創立当時の懐旧（昭和7年10月）と分析する。協会の意図する「中流住宅の実現」は、十分には達成されたとはいえないが、改良住宅設計図案懸賞当選案の実現・分譲、会場がそのまま住宅地となったことや生活改善・住宅改良などの提案はその後の住宅・住宅地に大きな影響を与えたといえよう。

協会が博覧会を通じて学会、研究会とともに都市問題や住宅問題などの解決に向けて、黎明期の近代法制や住宅政策を試み、新時代の住宅・住宅地のモデルの一例と指針を一般大衆に具体的に示したことは評価に値する。

平成27年（2015）10月現在、25戸のうち3割程度が現存する。この博覧会場の住宅地の一部は、箕面市景観計画で都市景観形成地区（同17年）とされるエリアで、箕面市都市景観条例で都市景観形成建築物（同10・15年）、国の登録有形文化財（同10・11年）や大阪都市景観建築賞特別賞（同9年）の指定を受ける。同住宅地は一部を除いて第一種低層住居専用地域（同8年）に指定され、さまざまな規制や指定を受けながら、住民の高い意識によって生垣や緑豊かな落ち着いた佇まいを今も保ち続けている。

（わだ やすよし）

参考文献：

坂本勝比古「建築と社会からみた大正期と昭和期の都市・住宅・建築論・住宅コンペ」
『建築と社会』昭和47年2月
『建築と社会』大正6年～昭和7年
日本建築協会『住宅近代化への歩みと日本建築協会』昭和63年5月12日



住宅改造博覧会配置図



当時の様子



現在の様子（筆者撮影 撮影日：平成27年10月4日）

連載

建築
と
社会
を
考える

NO.5

連載
建築と社会を考える日土小学校と
建築家・松村正恒
から考えた
「もうひとつの」
建築と建築家について

花田佳明

神戸芸術工科大学教授

花田佳明

1956年愛媛県生まれ。1980年東京大学工学部建築学科卒業、1982年同大学院修士課程修了。1982～92年日建設計勤務、1992～97年神戸山手女子短期大学専任講師・助教授、1997年神戸芸術工科大学助教授を経て2004年から現職。博士（工学）。

主な著書に『植田実の編集現場』（ラトルズ、2005年）、『建築家・松村正恒ともうひとつのモダニズム』（鹿島出版会、2011年）など。主な受賞に2011年日本建築学会教育賞（教育貢献）、2012年日本建築学会賞（業績）、2012年ワールド・モニュメント財団／ノール・モダニズム賞など。

[1] 「建築家」・「作品」批判

「建築と社会を考える」という大きなテーマである上に、いわゆる建築ジャーナリズムを賑わす「建築家」とその「作品」への強烈な批判ともいえる舟橋國男の「総論」（本誌2015年10月号）から始まった本企画への原稿を依頼され、さて自分に何が書けるのだろうかかと頭を抱えました。

舟橋の文章の中で特に印象的だったのは、同じように「建築家」批判をした飯島洋一の『「らしい」建築批判』（青土社、2014年）に対してすら、「採りあげられている『建築家』達の言動も『作品』も正当な批判の対象たる資質を有していないことは既に明らかであり、今更ながらの感が否めず、著者の努力は虚しく不毛である」（「総論」の注47）と書かれた部分でした。「既に明らか」「今更ながら」といった言葉に滲み出る「建築家」と「作品」に対する舟橋の絶望の深さに驚いたからです。

たしかにそのような思いを抱くことは私もあり、とくに現代建築について考える際は建築家の作為性の問題が常に気になってきました。一方、もともと建築設計からキャリアをスタートした私は建築への思いも強く、その設計を生業とすることは途中で諦め教師稼業に転じた今も、「建築じゃないとできないことがある」との確信は揺るぎません。

したがってこれら両者が、つまり＜「建築家」・「作品」批判＞と＜「建築じゃないとできないことがある」という確信＞とが相矛盾せず両立した状態とはどのようなものか、そのような状態を作るにはどうすればよいかという命題は、私にとって最も切実な問いであると思ってきました。

明快な答えはまだわかりません。しかし、舟橋の「総論」への私なりの応答として、また少しでも「建築と社会を考える」という本企画のテーマへの手がかりになればと願いつつ、「建築じゃないとできないことがある」という確信を支える極私的根拠の断片を描いてみようと考えました。素材は、私が長く調べてきた建築家・松村正恒と彼が設計した愛媛県にある八幡浜市立日土小学校です。同校は、私も深く関わった活動によって保存再生されたことで有名ですが、今回のテーマはそれではなく、元の建築の背後に潜む設計方法です。

[2] 何を批判したくなるのか

ところで、私が「建築家」・「作品」批判をしたくなるのはどのようなときか。

たとえば、「都市という罫 あるいはTOYO ITO的思考批判序説」（『アーキ・フォーラム in OSAKA』創刊号、1993年11月）では、伊東豊雄の文章を材料にして、消費社会における若者の生活行動の軽さを語る言葉から遊牧民族の住居である「パオ」を連想し、それを建築化するという思考の単純さを指摘しました。また「拡張された住宅 建築を開くこと」（『住宅特集』1995年1月号）では、新しい家族関係を住宅の平面計画へと置き換えることで新しい住宅ができたとする姿勢を「家族論強迫神経症」と呼び、疑問を投げかけました。

つまり、建築以外の領域の概念や言葉を建築の「言葉」（＝具体的な平面構成や素材など）へと翻訳する際に厳密な論理を欠いていると思えたとき、私はその手続きの曖昧さを批判しているわけです。

同様の問題があると私には思える事例はいろいろあります。たとえば磯崎新の引用論は、「どう引用するのか」はわかっても「なぜ引用するのか」が十分には説明されていないという意味において論理性を欠いているし、建築家自身の宇宙観などを反映したというような個人的説明によって公共的建築が設計される場合にも説得力を感じません。

この点について舟橋がどう考えているかは「総論」からはわかりませんが、少なくとも私にとっては、そのような方法をとる設計者とそのような方法によって特徴的な形態となった建築が、「建築家」・「作品」批判の対象となってきました。

[3] 「建築家」・「作品」批判不在の幸福感

ところが、そのような「建築家」・「作品」批判を一切受けつけない、あるいは、そのような批判を一切する気にならない建築家と建築に出会ったのです。それが松村正恒と彼が設計した建築でした。

私が彼の建築を初めて見たのは1994年6月です。建築雑誌の特集記事（「四国・公共建築行脚からの発見」『建築ジャーナル』1994年11月号）のために、友人（中川理、松隈

洋)といっしょに四国を車で回りました。メンバーは誰も松村のことを詳しくは知りません。訪問先を決める際、松村が設計した別の小学校のお別れ会のことが『日経アーキテクチャー』(1991年10月14日号)に載っており、とにかく行ってみようということになったのです。

午後3時過ぎに日土小学校(写真1、2)へ飛び込みました。私は言葉を失い、気がつくと、カメラのシャッターボタンを押しまくっていました。大急ぎで、松村の設計した江戸岡小学校と神山小学校にも行き、暗くなりかけた放課後の校舎の中を走り回りました。同行した編集者から、「花田さんは泣きながらシャッターを切っていた」とからかわれたくらいですから相当慌てていたのでしょう。

あっという間に夜になり、興奮冷めやらぬまま次の目的地である高知県へと車を走らせました。神戸に帰ってからも、八幡浜のことを思い出した際に、まるで夢でも見ていたかのような気分になりました。

その後、松村を知る愛媛県の建築関係者の皆さんと接点を作って調べ始め、あっという間に20年が過ぎたというわけです。

その間に考え続けたのは、なぜひとつの建築によってあれほどの感情の昂りが自分の中に生まれたのか、そのような建築を設計した松村とはどんな人物なのか、そして、彼と彼の設計した建築について詳しく調べれば調べ

るほど「建築家」・「作品」批判からは無縁の感情に包まれていくのはなぜかということでした。それは現代の多くの建築家と建築からはめったに得ることのない幸福感でした。



写真2 竣工直後の日土小学校。川側外観
(日本建築学会蔵)

[4] 日土小学校と松村正恒

日土小学校は、1956年から58年にかけて建設された木造の小学校で、木造モダニズム建築の傑作です。教室と廊下を分離したクラスター型の平面計画が有名で、建設当初、たいへんに高く評価されました。

松村正恒(1913~1993年)(写真3)は、八幡浜市の隣町・大洲市に生まれ、武蔵高等

工科学校(現在の東京都市大学)で蔵田周忠の薫陶のもと建築を学びました。その後、土浦亀城の事務所と農地開発営団で働き、終戦とともに故郷に帰りました。そして1947年に八幡浜市の職員となり、1950年代を中心に、日土小学校などの学校建築や、市立八幡浜総合病院関連施設の秀作群を設計したのです。1960年には、『文藝春秋』5月号で「建築家ベストテン 日本の10人」のひとりにも選ばれました。

松村は1960年に松山市で独立しますが、建築ジャーナリズムの最前線からは消えました。しかし1999年、ドコモ・ジャパンによって、日土小学校が日本を代表する20の近代建築のひとつに選ばれ、再び注目を集めます。そして同校は、保存再生活動に支えられて2009年に改修工事が完了し、現役の小学校として使われ続けています。2012年には、その保存再生活動メンバーに対し日本建築学会賞(業績)とワールド・モニュメント財団/ノールモダニズム賞が与えられ、さらに日土小学校は、戦後建築では4番目となる国の重要文化財に指定されました。

日土小学校の保存・再生の経緯については詳しく説明する紙幅はありませんので、他の文章や資料を読んでください(注1)。



写真3 晩年の松村正恒(日本建築学会蔵)

[5] いくつかのヒントと私が考えたこと

さて、松村正恒や日土小学校のことを調べていくにつれ、「子供のための」とか「優しいデザイン」といった表現はよく見かけました。しかし、そういった言葉は私が感じている幸



写真1 竣工直後の日土小学校。運動場側外観(撮影:村井修、日本建築学会蔵)

福感を全く説明できません。私は自分が感じたものと齟齬のない言葉を懸命に探しました。

5-1 自己参照的操作の反復による爆発的で後戻りのない進化

私も当初は日土小学校などの代表作しか知らず、松村といえば日土小学校みたいな感じという先入観をもっていました。しかし、彼が八幡浜市役所で1947年から1960年に退職するまでの13年間に設計した37物件を詳しく調べてみると、当初は下見板張りの木造校舎を設計していたことがわかりました。しかし、彼のデザインは、この13年間に爆発的で後戻りのない進化を遂げ、日土小学校へ到ったのです。しかも各建物のデザインは、自分以外の建築家や建築思潮、あるいは地域的・歴史的モチーフなどには依拠せず、常に前作を変形するという自己参照的操作の反復から成り立っていると私には思えました。

詳しく説明する余裕はありませんが、たとえば日土小学校のクラスター型と呼ばれる平面計画は、教室の両側から採光と通風を可能にするというシンプルな目標のもとに、断面計画と平面計画を進化させ続けた結果です。外装デザインや内装も、それ以前の建築の未操作部分を進化させるか、既に発見したヴォキャブラリーをさらに変形したものでした(図1)。

もちろん日土小学校などでは、平滑な外壁

と水平連続窓が目につき、欧米の近代建築の香りがします。しかし、外壁がラスモルタル・ペンキ塗りになったのは1950年に制定された建築基準法への防火対応が理由だと思われますし、いわゆる近代建築的なデザインの採用についての特別な意図を彼は全く語ってはいません。

つまり松村は、明快な目標に向かって、自分が最初に蒔いた種を、その種の内部にある手がかりだけを操作対象として育てていったということなのです。

5-2 「初めに形があるのではなく、形は結果である」

少し落ち着いて眺めてみると、日土小学校のデザインは不思議なものに見えてきます。セメント瓦の切妻屋根がのっています。特段の工夫は施されておらず、雨の多い南予地方という土地柄ゆえの機能的必然という風情です(写真4)。



写真4 日土小学校・東校舎の外観。切妻屋根と水辺連続窓の組み合わせが独特の雰囲気を生み出している

また木造建築でありながら、床以外の部分はすべて明るい色のペンキが塗られ、地域性を伝える建築的定番要素としての木の質感は消されています。一方、カーテンウォール化された外壁や外付けサッシュによる水平連続窓は、いかにも欧米の近代的なデザインですが、木造とスチールのハイブリッド構造に基づいており、構法上の発想が全く違います。また、柱・梁と壁との関係は大壁でないところも多く、近代建築が好む抽象的な「面」の構成は志向されていません(写真5)。



写真5 日土小学校・東校舎の昇降口。柱・梁とも丸面取りされているためにその間の壁が少し後退し、大壁と真壁の間の状態になり、「面」の構成が弱くなる

つまり日土小学校は、建築における近代的なるものと非近代的なるものを併置したデザインに見えながら、実は、松村はそのどちらにも主眼を置いておらず、むしろ、建築計画の新しさや建築的構成の明快さを、彼が戦前の修行時代に身につけ、最も合理的だと考える建築的語彙で抒情的に語り尽くしたという説明が、松村の設計した建物には一番ふさわしいのです。伝統や和の表現でもなく、地域主義の象徴でもなく、近代建築の模倣でもないのです。

松村はこういったことについて何も説明していません。日土小学校が最初に発表された『建築文化』1960年2月号には彼の文章が載っていますが、それは「1年間使つての教師側の苦情」を7項目にまとめたものです。どこにも形に対する彼の意図は書かれていないのです。

また独立後のものではありませんが、松村は「伝統論私見」(『国際建築』1965年1月号)という文章の中で次のように述べています。

伝統とは、形式の問題ではない。心構えの問題だ。初めに形があるのではなく、形は

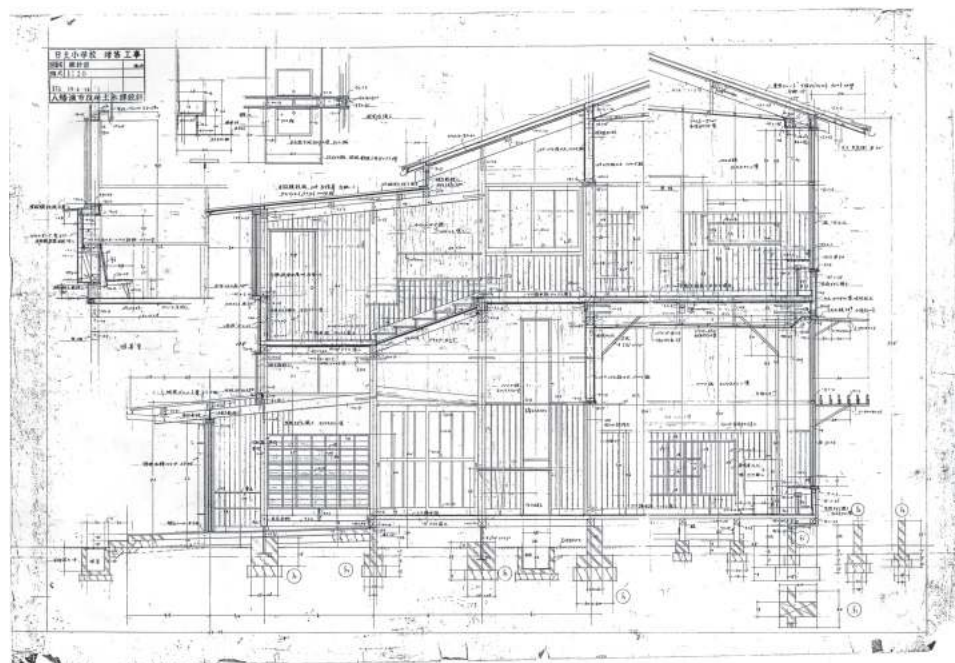


図1 日土小学校・東校舎の矩計図(八幡浜市役所蔵)。廊下と教室を切り離したクラスター形式、カーテンウォール化された川側外壁、環境制御のさまざまな装置などが高い完成度で設計されている

結果である。伝統を越えたとか、越えぬとか、棒高跳とは、ワケが違う。歴史の価値を学びとるには、その根にひそむものを、洞察する以外にない。そこまでの面倒を怠って、ただ、形式だけ拝借して、伝統をうけついだなどとは恐れいる。

ここで松村は、「伝統」について建築が果たすべきことは、それを「形式」化することによって単に過去の時間軸のどこかの地点を連想させることなく、歴史の「根にひそむもの」への洞察を示すことだといっています。伝統的な形を現代的に変形し、安易に自分の設計の中に取り入れることを戒めているわけですね。川添登や丹下健三による「伝統論争」なども意識していたことでしょう。

また、晩年に建築評論家・神代雄一郎とおこなった「風土と建築」というタイトルの対談（『ina REPORT (No.16)』（伊奈製陶、1978年）では、神代から「僕らも今回は地域にしっかり根をおろして、いい仕事をしておられる方をおたずねしているのですが、風土については、どうお考えですか」と尋ねられた松村は、自分に対する神代の解釈を次のようにやんわりと否定しています。

私は正直いって地方とか地域とか風土とかいうことを余り意識せんのですわ。というのは、最初いうたように、それが自然に体から結果として生まれればいいことでしてね。人間でも作品でも、いや味のあるのは大嫌いなんでね、自然にずっとにじみ出るのじゃないといけな。だから、余りそういうことを意識せずに、どこまでも真実を追い求めんといかん。特に地方ではどうこういわんでも真実を求めたら、そこに住んでいて、その土地の人の気持ち、だから作品をつくるというんじゃないに、それを使う人の気持ちになればいいんでしてね。私も1つの使用者になればいいんでして、ながめるためのものではない。ただ、私がつくったものを満足して喜んで、そこからそれを土台にして人間が少しでもよくなってくれればいいという気持ちで、終始一貫しているんですよ。

これを読んで私は、松村は、歴史や地域といった文脈から建築に意味が付与されることを徹底的に拒否していると思いました。

こういう方法は、前川國男・坂倉準三・丹下健三といった近代建築の巨匠たちとは違います。彼らは、ル・コルビュジェ的造形をさまざまな言葉を手がかりに変形し、建築における意味を排除しようとした近代的なるものの上に、日本における非近代的なるものもつ意味を付与しようとししました。また、地域主義的な建築家（松村と同じ瀬戸内圏であれば浦辺鎮太郎や山本忠司など）とも違います。彼らは、日本の伝統的建築や自然の風景の断片をさまざまな変形し、建築における非近代的なるものもつ意味を、近代的なるものを通して漂白しようとしたからです。まして、言葉による観念的な説明を先行させ、そこから連想される形に恣意的な意味を付与しようとする現代建築家とは全く違うわけです。

5-3 「立ち込めるノスタルジア」

自分が設計する建築が文脈に依存した意味を生み出すことを拒否するとすれば、松村は何を目標にして設計していたのだろうと私は不思議に思いました。そのことを考えるヒントが、建築評論家・佐々木宏による日土小学校に関する文章でした。

松村の独立後の作品がまとめて雑誌に掲載された唯一の機会が、『近代建築』1967年5月号の「松村建築設計事務所の作品」という特集です。その冒頭に、佐々木の「松村正恒の作風のことなど」という文章がありました。それによれば、佐々木はこの文章を書くに当たり、八幡浜市を訪れ、日土小学校はもちろん、一連の病院関連施設や学校建築を見学したようです。佐々木は日土小学校の印象を以下のように記しています。

私は、この学校で勉強したことがないのだが、いつの間にか、ここで小学校の日々を送ったような錯覚にとらわれ始めていた。遠い幼い日のノスタルジアが立ちこめてくるようであった。たまたまその日は休みで、あたりは川のせせらぎと、風に動く葉ずれの音だけなのに、その中から子供たちのしゃぐざわめきが聞こえてきそうであった。

この、いささかセンチメンタルな描写は、日土小学校を実際に体験したひとたちに共通する感想のように思われます。しかし同時に、私にはこの文章は少し奇妙だと思えました。なぜならば、佐々木自身が子供の頃に体験した小学校の空間が日土小学校のようなものであったはずがないからです。つまり経験していないのだから「懐かしい」はずはない。そのことは、私も含め、この建物を見た多くの人たちにも当てはまります。しかし「ノスタルジアが立ちこめてくる」。奇妙なことだといわざるを得ません。

では、佐々木は、あるいは私たちは、何に対して「ノスタルジア」を感じるのだろうかとは私は考えました。そして思いついた説明は、「われわれは日土小学校を見たときに、自分が体験した過去にではなく、より一般的・原理的思考へと引き戻される。つまり、教育とは何だろうとか、子供の頃の理想的な暮らしとはどうあるべきか、とか。そしてそのときの移動感や距離感が『ノスタルジア』を生み出すのだろう」というものでした。

松村が形を決定する根拠とした恣意的な意図へと連れ戻されるのではないのです。つまり、「建築家」の存在が消え、ことの本質が浮かび上がるというわけです。

すでに引用した日土小学校に対する松村の文章の冒頭には、以下のような詩的な文章があります。

山のせまった谷あい、せまい敷地を求めて学校が建っていた。広げようもない。改築を機に、大木を倒して河に近づけた。惜しかったけど。静かな流れである。テラスに桜の花が散り、糸をたれると魚がはねる。5月の薫風にのって、ミカンの花の香りが教室にただよう。蛍の乱舞する夏の夜、柿の色、ミカンの朱、落葉の沈む冬の河。いつ訪ねても、あきることのない清くすんだ環境である。

「教師側の苦情」の列举とは対照的な語り口です。描かれているのは、日土小学校の周辺環境にすぎないように思えます。しかしよく考えてみると、いずれも彼の設計した日土小学校が存在してこそ出現した光景であり、

日土小学校を川に近づけたことによって獲得された自然と学校との新しい関係というべきでしょう。私は、こういう描写を可能にすることこそが松村の設計の目標だったのだなと思いました（写真6）。

5-4 松村正恒の言葉と建築の無関係な関係

松村の言葉も不思議でした。彼の文章は、既に引用したものでもおわりのように、普通の建築家とは内容も語り口もひと味違っています。建築雑誌に発表されたものはもちろんですが、没後にまとめられた『無級建築士自筆年譜』（住まいの図書館出版局、1994年）や『老建築家の歩んだ道』（私家版、1995年）（写真7）に収められた文章や講演録には、抽象的な建築論は見当たらず、身近な歴史や社会を論じた文章ばかりが並んでいます。中でも、大正期から昭和前期に彼が見聞きした貧しい人々の暮らしや、それに対する彼の悲しみや怒りをストレートに書いたエッセイが多く、松村という人物の原点を思いしらされる感じがします。

たとえば、彼が農地開発営団の職員として戦前の日本海側の貧しい農村を調査しているとき、汽車の中で出会った少女の話です（「人それぞれの生き方 老建築家から教師の卵達へ贈る言葉」『老建築家の歩んだ道』）。

五十年前の話、貧しい東北、寒村の駅に汽車が止まる、両親に見送られて少女一人乗り込む、荷物は教科書を詰めたカバンのみ、私の前の席に。小さい女の子が近づいてきた。この少女、旅芸人の一座に売られてきたのです。

昼になる、腹は減る、親方は知らぬふり。少女は、薄汚れたハンカチを開き、なけなしの饅頭の中から駅弁ひとつ、箸を二つに折って子役と分ける。小さい駅を出る度に、少女は窓を開け、受持ちの先生の名を呼び上げる、教室の光景が頭の中に浮かんでくる。学校に行けると信じているのでしょう、教科書を開いて、子供に読んで聞かせる、大きい駅に着く、せきたてられて、やがて消えていきました。

松村は愛媛大学教育学部の学生に対する講演でこの思い出を紹介し、学校や教師という存在の意味を若い学生たちに問いかけました。

現代の建築家を書く文章の文体や語彙は、それぞれのデザインの感触によく似ていると思います。言葉によって意図を組み立て、それを手がかりにして形を決めたりその形を説明するのですから当然のことでしょう。それに対し、松村の文体や語彙と彼が設計した建築との間には、大きな隔たりがあります。少

なくとも私にはそう思えます。八幡浜市役所で彼が設計した建築群の爽快なイメージと、彼の情緒的な語り口のずれは、松村が言葉を設計の単なる手がかりにはしていなかった証拠だと思います。つまり、私がつい批判したくなる「建築外の言葉の安易な翻訳」は起こり得なかったというわけです。



写真7 松村の遺稿集『老建築家の歩んだ道』の表紙。自分の生い立ちや若い頃の思い出、ロータリークラブなどでの講演などが納められている

【6】松村正恒の設計方法

さて、このように説明してくれば、松村と彼の建築を見て私がなぜ「建築家」・「作品」批判をする気にならなかったのかは明らかでしょう。強引に他領域から持ち込んだ言葉による「作品」作りの操作もなければ、そういったことをする「建築家」でもないからです。

これ以上詳しい説明をする紙幅はありませんが、私はこの分析をさらに行ない、博士論文とそれに基づく『建築家・松村正恒ともうひとつのモダニズム』（注2）という本をまとめ、松村の設計方法の特徴を以下のような、いささか抽象的な言葉で整理しました。

- (1) 自己参照的メカニズムによるデザインの展開
- (2) 建築の意味が確定することの拒否
- (3) 価値観を明示した総体的建築の提示
- (4) モダニズム建築への逆照射



写真6 日土小学校の川側の光景。校舎が建ったことで周囲の環境の中に新たな関係が生まれている

(1) は5-1、(2) は5-2で書いたことですね。(3) は、(1) (2) の方法によって、建築家の意図ではなく、より本質的な価値を教えてください建築が、5-3で書いた「ノスタルジア」のように一気に立ち現れるというような意味です。そしてこのように考えると、日土小学校に代表される八幡浜市役所時代の松村の仕事は、もしその建築が存在しなければ私たちが見るこのできなかった世界を、新しい価値の集合として示したことだと要約することができ、思い描く新しい世界像の提示こそが「近代化」という行為だと抽象的に定義すれば、松村はまさにそのことを実践したモダニストであり、彼のつくり出した建築こそ「近代」建築であったといえるだろうと結論づけました。それが(4)です。

(1) (2) からすると非文脈的な方法に見えますが、(3) (4) によって、きわめて社会的な、つまりは文脈的な建築が生み出されるというメカニズムです。建築を建築の言葉だけで考える方法論といってもよいでしょう。日土小学校を生み出したのは、「子供のため」といった精神論ではないのです。

[7] 「思想やコンセプトの表現としての建築ではなく、思想やコンセプトであるところの建築」

さて、読者の中には、「お前は自分の個人的な感傷を大袈裟に話しているだけだ」とお感じの方もいらっしゃるかもしれません。ただ私は、[6] に書いたような抽象化ができる以上、松村正恒という建築家の存在は、これからの建築を考えていく上での手がかりとして大きな意味をもっていると考えています。建築の設計方法を建築外の言葉の呪縛から解放し、建築と建築家を本当の意味で社会的な存在にするために、です。尻切れとんぼにはなりますが、最後にその根拠をひとつ挙げて終わりにしたいと思います。

私は、[6] にまとめた方法は建築家の青木淳さんの思考にとっても似ていると感じています。彼は、初期においては「動線体」という言葉を手がかりにして、チューブ状に連続する空間を志向した建築（「湯博物館」や住宅「H」など）を設計していましたが、その後この言葉を捨てました。そして、「決定ルール、

あるいはオーバードライブ」（『新建築』1999年7月号、『原っぱと遊園地』所収）という文章を書くことにより、多くの現代建築家が依存する安定した「図式」によって形を決めるのではなく、無根拠に設定された「ルール」を共有した上で、そのルールの「オーバードライブ」、すなわち読み替えや更新を繰り返し新たなルールを作りながら設計を行なうことを実践しています。

その結果生み出された大型公共建築としては、「青森県立美術館」（写真8）、「杉並区大宮前体育館」（写真9）、「三次市民ホール」（写真10）があり、いずれもこれまでの美術館、体育館、市民ホールというビルディングタイプの常識的イメージを打ち破りました。そして、まさにそれらの建物が出現しなければ手にする事のなかった「美術と建築との関係」「郊外住宅地の日常生活」「地方都市における文化施設の役割」についての新たな価値を生み出したのです。

また、彼が多くの現代建築家と違うのは、その語り口です。建築外の領域の抽象的な概念に頼ることなく、彼の論考を集めた『原っぱと遊園地』（王国社、2004年）という書名に象徴されるようなわかりやすい言葉で自らの考えを伝えようとするのです。

私には、「無根拠なルール」は松村建築の近代建築的なヴォキャブラリー、「オーバードライブ」は松村が採用した自己参照的メカニズムによる爆発的な進化、「原っぱと遊園地」といったわかりやすい言葉使いは松村の語り口と対応するように思え、上記3つの公共建築と日土小学校との立ち現れ方が重なって見えてくるのです。

青木は日土小学校を見たときの感想を、「松村正恒は思想やコンセプトの表現としての建築ではなく、思想やコンセプトであるところの建築をつくらうとしていたのだと僕は思った」（拙著『建築家・松村正恒とうひとつのモダニズム』の帯文）と書いてくれています。言い得て妙だと思います。そしてこの言葉は、松村と彼の設計した建築はもちろん、青木と彼の設計した建築、そしてこれからの「もうひとつの」建築家と建築のあるべき姿を示しているのではないかと思います。

（敬称略）



写真8 青森県立美術館



写真9 杉並区大宮前体育館



写真10 三次市民ホール

（はなだ よしあき）

注

- 以下の文献等を参照されたい。
 - ・保存活動の経緯は、花田佳明「日土小学校の保存活動の現状について」（『建築雑誌』2008年2月号）。
 - ・保存再生工事の詳細は、『八幡浜市立日土小学校保存再生工事報告書』（日本建築学会四国支部日土小学校保存再生特別委員会編、八幡浜市教育委員会、2010年）。
 - ・花田佳明「日土小学校の保存再生がくれた夢」『新建築』2009年11月号
- 花田佳明『建築家・松村正恒とうひとつのモダニズム』（鹿島出版会、2011年）

設備の頁

一時避難エリアの活用
により歩行困難者等の
避難安全性を高めた
超高層分譲住宅

大知啓介

株式会社竹中工務店 大阪本店
設計部 設計第2部門 設備グループ 課長

序論

昨今、建築物はますます高層化が進展しており、また高齢者や障害者などあらゆる人々に対するバリアフリー化が進んでいる。日常において、高層建築物のエレベーターは、垂直移動手段として欠くことのできない役割を果たしている。しかし、現行の高層建築物における避難施設等に係る法令基準は、高齢者や障害者など歩行困難者等の火災時の避難を十分考慮されているとは言い難く、階段利用が困難な避難者は大きな不安を抱えている。

このような背景の中、三菱地所レジデンス(株)他3社が事業主である「ザ・パークハウス中之島タワー(住戸数894戸、地上55階、大阪市)」(図1)にて、「一時避難エリアの活用による歩行困難者等の避難安全性を高めた計画」を当社から発案し実現した。これは分譲共同住宅では国内で初めての適用であり、以下に内容を報告する。



図1 ザ・パークハウス中之島タワー

本論

避難時のエレベーター利用について世界で関心が高まる中、日本でも2013年10月に東京消防庁から「高層建築物等における歩行困難者等に係る避難安全対策」が発行されている。これは、図2に示すように一時避難エリアの設置による「水平避難」と非常用エレ

ベーター(以下、避難誘導用エレベーター)の利用を含む「垂直避難」の2段階で構成されるもので、東京では病院や超高層複合ビルで既に適用認可された建物も存在する。一方、大阪地区では基準となる指針が無く適用物件も無い状況であったが、当建物は建築防災計画評定委員会による避難誘導計画の審議を経て建築防災計画評定の取得を図った。

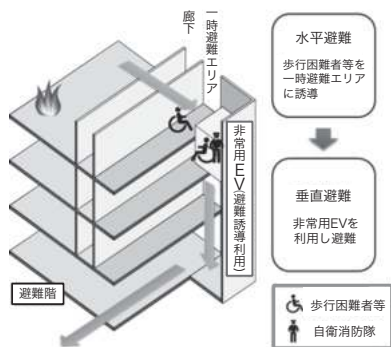


図2 避難誘導用エレベーターによる避難誘導イメージ

計画内容について

(1) 一時避難エリアの設置

当建物では、歩行困難者等の避難安全性を高めるために、図3に示すように、特別避難階段と非常用エレベーターに接続した付室を環状中廊下の対向に2か所設け、これを一時的に同一フロア内で水平避難し安全に留まれる場所と位置付けて、「一時避難エリアへの水平避難」を計画した。一時避難エリアには、その旨を明示する標識および文字板や防災センターと相互連絡可能な通話装置の追加設置を計画した。

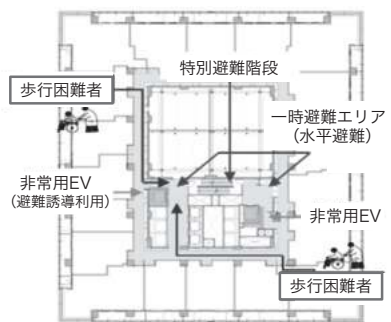


図3 歩行困難者等の水平避難イメージ

(2) 歩行困難者等の避難方法

火災発生を覚知した歩行困難者等は、区画された共用廊下(安全区画)を経由して、一時避難エリアで待機【水平避難】し、歩行困難者等以外は、一時避難エリアを介して特別避難階段で垂直避難する。次に歩行困難者等の一時避難エリアから避難階への避難方法は、「①階段利用」、「②消防隊による救助待機」、「③避難誘導用エレベーター利用」等、状況に応じた対応とする【垂直避難】。当建物での避難誘導用エレベーターは行政との協議において西側の非常用エレベーターに設定

し、東側の非常用エレベーターはロビーに連結送水管放水口が設置されていることもあり従来の消防隊活動用と位置付けた形で認められた。

(3) 自衛消防隊による避難誘導の役割

自衛消防隊は、歩行困難者等を早期に一時避難エリアに誘導するとともに、全体の避難誘導の効率化を図り、歩行困難者等の避難安全を確保することに従事する役割を担う。自衛消防隊は、図4に示すように、主に管理会社からなる本部隊と住民からなる地区隊で構成される。本部隊は、避難誘導を統括する自衛消防隊長、避難誘導用エレベーターを操作する操作専従員、住民の避難誘導を行う避難誘導員(出火階およびその直上階の一時避難エリアに配置)から構成される。また、地区隊は、避難誘導員を補助する役割を担う。これら自衛消防隊による避難誘導は公設消防隊到着までの活動であり、公設消防隊到着後は避難誘導用エレベーターを速やかに消防へ受け渡すルールとしている。

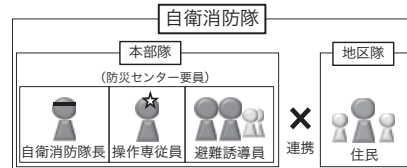


図4 自衛消防隊の構成

(4) 避難誘導用エレベーターの利用条件

避難誘導用エレベーターを利用した垂直避難を行う条件として自衛消防隊の避難誘導体制が整っていることが必要であり、避難誘導用エレベーターが利用可能な自衛消防隊の体制条件を取り決めている。体制条件を満たさない場合は、一時避難エリアへの水平避難までとし垂直避難は行わない。これら運用ルールも含め建築防災計画評定委員会にて審議されている。

最後に

今後益々高齢化の進む社会において、火災時のエレベーターを利用した避難は安全性を向上させる方策として有効な手段になると思われる。今回、大阪地区における分譲共同住宅にて計画を実現したことは大変有意義なことであり、今後は、歩行困難者等の存在をあらかじめ把握できオペレーションルールの策定が比較的行いやすく、そのニーズが高いと思われる福祉施設や病院、ホテルなどにおいて水平展開が考えられる。

(おおち けいすけ)

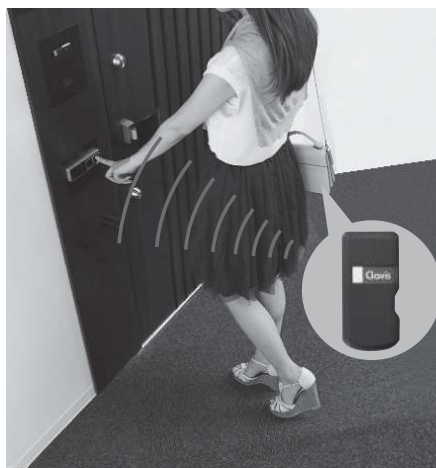
大知啓介

1992年に株式会社竹中工務店に入社。
以後、設備設計業務に従事。

企画広告

新製品レビュー

キーはカバンに
入れたまま。
『Tebra』なら
ハンズフリーで
かんたん施解錠。



株式会社シブタニ クラビス事業部

錠前・サッシ・ドア用金具などあらゆる建築金物の企画・開発・製造・販売する総合金物メーカー。近年ではハンズフリーマンションセキュリティシステム「Tebra-テブラー」をはじめとする電気錠システムの開発も自社で行い、お客様のニーズにスピーディにお応えできる企業活動に努めています。

●東京

〒113-0033 東京都文京区本郷1-24-1
リーフスクエア本郷ビル
TEL：03-5802-6887

●大阪

〒542-0082 大阪府大阪市中央区島之内
2-12-21
TEL：06-6211-0640
URL：http://www.clavis.jp

女性や年配の方にも大人気！ 快適・便利なハンズフリーシステム 『Tebra』。

『Tebra-テブラー』とは、マンション内のセキュリティをハンズフリーで解除できるシステムです。大きな荷物や赤ちゃん、ペットを抱いている場合も、キーを取り出す必要がありません。

共用部では、Tebraキーひとつで様々な機器と連携し、便利なサービスをご提供します。エントランスオートドアや共用口扉のハンズフリー解錠はもちろん、集合郵便受箱や宅配ボックスでは自分のボックスのみを解錠し、宅配物をスムーズに受け取ることができます。また、エレベータの自動呼び出しも可能です。住戸玄関では、リーダのボタンを押すだけで、キーを取り出すことなく施錠・解錠できます。

<動作イメージ>

●共用部専用 Tebra pass

リーダの前に立つだけでセキュリティを解除。



●専有部専用 Tebra

リーダのボタンを押すだけで2ロックを施錠・解錠。



<使用機器紹介>

◆共用部専用 Tebra passリーダ



※写真は長距離型

●検知距離が異なる3タイプをラインナップ。

長距離型：検知距離約2m

中距離型：検知距離約80cm

近距離型：検知距離約10cm

◆専有部専用 Tebraリーダ



- ボタンで簡単に施解錠操作。
- 音と光で施解錠をお知らせ。
- 6秒以上静止でTebraキーがスリープ状態になり誤作動を防止。
- 上部シリンダー及びサムターンを施錠すると下部は連動施錠。
- Tebraリーダで警備会社の警備システムをセット・解除できます。

◆認証キー Tebraキー



- 42億以上の豊富なID違いで高セキュリティ。
- 軽量でシンプルなデザイン。
- キー収納型のため停電時や電池切れの際も安心。
- 共用部ではリモコン操作可能。(約3m以内)
- 電池交換時期を作動確認ランプの色でお知らせ。

新築だけでなく、リフォームにも対応し、 取付が簡単なシリーズもラインナップ。

『Tebra』は新築だけでなく、既存物件の改修工事に対応したシリーズもご用意しております。共用部ではエントランスオートドアを大がかりな配線工事不要でハンズフリーにできる『Tebra one A-テブラワンエー』システムがごございます。専有部では配線工事不要で、既存玄関扉に後付けしハンズフリーにできる電池式の『Tebra cell-テブラセル』もラインナップしております。



Tebra one A



Tebra cell

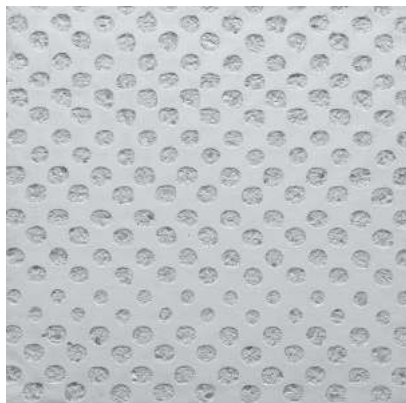
製品の詳細は、クラビスホームページまたは左記連絡先までお気軽にご連絡ください。

企画広告

新製品レビュー

グラフィック
コンクリート～新しい打ち放し
コンクリート～

船場センタービル



GCコレクションパターン

日本興業株式会社

コンクリート2次製品メーカーとして、土木部門、景観部門、エクステリア部門を展開しており、建築外構全般についてご提案させていただきます。

〒540-0036

大阪市中央区船越町2-4-6

船越センタービル7F

TEL：06-7173-2790

FAX：06-7173-2793

(graphic concrete輸入総代理店)

株式会社ビベル

〒160-0016

東京都新宿区信濃町3番地エスコート101

TEL：03-5341-4243

FAX：03-5341-4244

上質な面仕上げ技術

打ち放しコンクリートを美しく仕上げるため、これまで多くのアプローチがなされてきた。昨今、とくにコンクリートの素地仕上げは注目されており、多様な仕上げが求められている。

グラフィックコンクリート（以下GC）は「洗い出し」の技術を使ってグラフィカルなパターンを、打ち放しコンクリート表面に施す技術である。さまざまなプレキャストコンクリート製品に応用でき、プレキャスト製品を製造する国内工場で規格にあった製品に“GC仕上げ”を施すことができる。GCはプレキャストコンクリートの表面「洗い出し」を、独自の加工技術により応用したもので、昨今求められる多様な建築条件とデザインにおいて上質な新しいコンクリート面の仕上げとして注目されている。

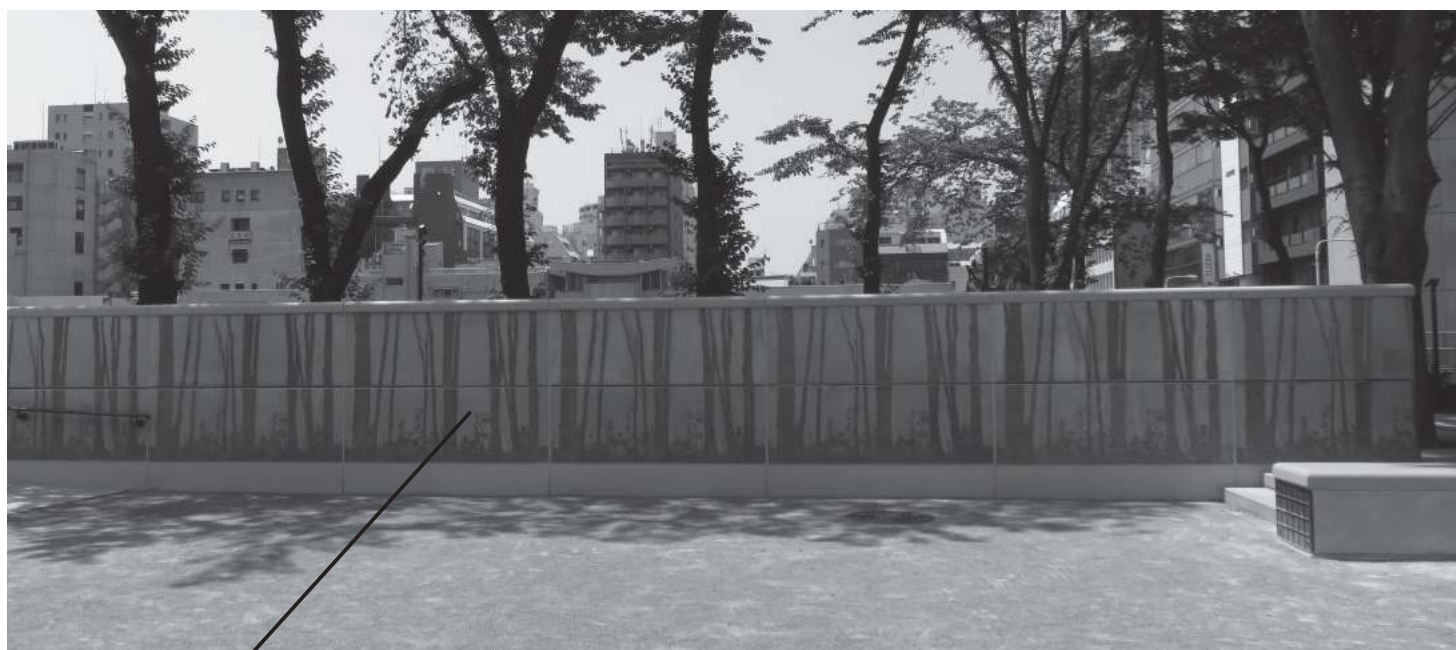
洗い出しで自然な美しさ

GCは、北欧・フィンランドで開発された。1998年から6年かけて開発され、すでに欧米各国で普及しており、日本国内でもカーテンウォールなどですでに多数の実績がある。極寒の地、北欧では冬の建築現場施工条件が厳しいため、プレキャストでの建築工法が古くから根付いており、その技術も高いことで知られている。フィンランドは地盤が岩盤の立地で地産の石材も多様で美しい。

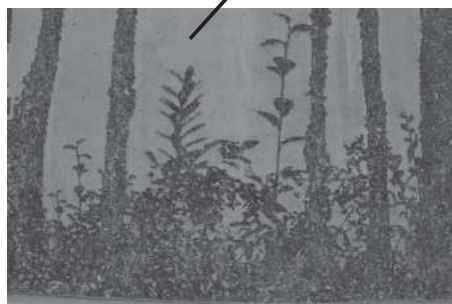
洗い出しは、コンクリートの表層が硬化する前に洗うことによって表層面のセメント層を洗い流し内在する砂や骨材（種石）を露出させる技法で、伝統的な美しい左官技術の一つとして歴史は深い。混入する種石の大きさや種類によって自然な美しさを演出でき、上質感が求められる内外装の仕上げとして建築物に幅広い表情（テクスチャー）を施すことができ、露石面は耐久性・耐火性にも優れている。

プレキャスト工法（工場生産）を利用した複合的な建築コンクリート部材の表面仕上げ





南池袋公園 設置



南池袋公園 部分拡大

GCの可能性

GCは、プレキャスト工法を利用した複合的な建築部材の外壁（カーテンウォール）や構造部材、GRC、ランドスケープ（土木）二次製品やインテリアなどでの屋内外部パネル、コンクリートファニチャーなど、高品質で工業的に生産できるプレキャストコンクリートの美しい仕上げとして、国内でも民間企業、公共施設、商業施設、交通施設、公園などで多様な用途に広く採用されはじめています。またコンクリートの無垢な質感（凸面）に洗い出しの（凹面）パターンで構成するテクス

チャーは、特注のオリジナルデザインが作成できるほか、豊富なコレクションパターンからも選ぶことができるので容易に採用できる特徴がある。その表情（テクスチャー）への評価はさまざまだが、凹凸面のバランスをデザインすることで見る人の視線を切り替え、隠されていたコンクリートの美しい素材感を引き出しながら経年で変わらない建築的なテクスチャーを施せる技術は、新しい打ち放しコンクリートの仕上げといえる。

（田中竜太／隈ビバル）

近代建築工業製品の3大要素の一つであるコンクリートには砂石が必須材料で、洗い出しによってコンクリートそのものの自然の素材を活かした仕上げになる。

製造工程は、まずコンクリート硬化遅延剤をプリントした特殊なシート（GCシート）をコンクリート打設型枠に敷く。その後、脱型したコンクリートの表面を圧水洗浄（洗い出し）して製造する。GCシートを用い、全国どここのプレキャスト工場でも合理的に製造することが可能である。



船場センタービル 御堂筋側 設置



船場センタービル 堺筋側 設置

information

1 長谷寺の名宝と
十一面観音の信仰

飛鳥時代の創建といわれる長谷寺は、朱鳥元年（686）道明上人が天武天皇のために千体釈迦像（国宝・銅板法華説相図）を造立した本長谷寺を始まりと伝えられている。神亀元年（724）に徳道上人が聖武天皇から勅を賜り、二丈六尺の十一面観音立像を造立して以来、観音の聖地として発展してきた。その盛んな有様は、平安時代の王朝女流文学や日記類からも知ることができる。長谷観音の信仰は、王朝貴族ばかりでなく庶民にも広まっていく。徳道上人は西国三十三所観音巡礼の創始者ともされ、長谷寺も札所の一つとなり多くの巡礼者を集めた。長谷寺は長い歴史の中で、観音霊場としての長谷寺のほか、真言宗豊山派総本山、花の御寺、伊勢や春日、天神、あるいは修験道といった信仰との結びつきなど多様な側面を持ち、そこから生まれた美術を伝えてきた。本展では、長い歴史の中で形作られた長谷寺の豊かな美術や、観音の美術、また長谷寺とかかわりの深い豊山派寺院の名宝、長谷信仰の広がりを示す長谷寺式十一面観音像の作例などを紹介する。



本尊 脇侍像のうち
重要文化財 難陀龍王立像
長谷寺蔵

写真 難陀龍王立像（なんだりゅうおうりゅうざう）

長谷寺本尊十一面観音立像の、向かって右に立つ脇侍像。本尊の立つ岩座や長谷寺山内を守護する八大龍王のひとりとされ、頭上に龍を載せる姿で表される。春日明神とも称する。現在の像は、正和5年（1316）に造立され、その後2度の火災を免れたもの。

期 間 2月6日(土)～3月27日(日)
火～金 10:00～20:00
月・土・日・祝 10:00～18:00
※入館は閉館の30分前まで
休 館 日 2/8・15・22・29の月曜日
会 場 あべのハルカス美術館
大阪市阿倍野区阿倍野筋1-1-43
あべのハルカス16階
TEL.06-4399-9050
観 覧 料 一般1,300円、高大生900円、小中生500円
※障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は半額

2 ボッティチェリ展

サンドロ・ボッティチェリ（1444/45－1510）は、優雅で美しい聖母や神話の女神を描いた画家として知られる。その作品は多くが板に描かれ、きわめて繊細であるため、まとまった数の来日はこれまでに叶わなかった。日伊国交樹立150周年記念として実現する本展は、フィレンツェをはじめ世界各地から20点以上ものボッティチェリ作品を集め、その画業を一望する大回顧展である。



《聖母子（書物の聖母）》
1482－83年頃 テンペラ、板
ボルディ・ベッツォーリ美術館
©Milano, Museo Poldi Pezzoli,
Foto Malcangi

フィリッポ・リッピの工房で修業を積み、生涯のほとんどをフィレンツェで過ごしたボッティチェリは、メディチ家の画家として名を馳せ、大型の祭壇画から私的な神話画まで、幅広い主題の絵画を手掛けた。同時代の芸術家たちが、遠近法や明暗法を駆使した自然主義的な表現に向かうなか、ボッティチェリは中世美術を思わせる装飾的、象徴的な様式を貫き、独自の絵画世界を作り上げる。本展においては、初期から晩年までの宗教画、神話画、肖像画を通して、ボッティチェリ作品の特徴と魅力を紹介するとともに、師のフィリッポ・リッピや弟子のフィリッピノ・リッピの作品をあわせて展示し、15世紀フィレンツェにおける絵画表現の系譜をたどる。

期 間 4月3日(日)まで
9:30～17:30（金曜日は20:00まで）
※入室は閉室の30分前まで
休 館 日 月曜日（ただし3/21・28は開室、3/22は休室）
会 場 東京都美術館
東京都台東区上野公園8-36
TEL.03-5777-8600（ハローダイヤル）
観 覧 料 一般1,600円、大学生1,300円、高校生800円、
65歳以上1,000円
※中学生以下無料
※障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

information

3

志村ふくみ
—母衣（ぼろ）への回帰—

現代日本の染織分野に独自の世界を展開する志村ふくみは、大正13年（1924）に滋賀県近江八幡市に生まれ、母・小野豊の影響で、織物を始めた。昭和32年（1957）の第4回日本伝統工芸展に初出品で入選し、その後も受賞を重ねる。そして、平成2年（1990）には、紬織の重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された。



《秋霞》1959年
京都国立近代美術館蔵

草木からの自然染料で染められた糸によって織りあげられた作品は、多くの人を魅了し、国際的にも高く評価されている。「民衆の知恵の結晶である紬の創作を通して、自然との共生という人間にとって根源的な価値観を思索し続ける芸術家」として、平成26年（2014）に第30回京都賞（思想・芸術部門）を受賞し、平成27年（2015）には文化勲章を受章した。

このたびの展覧会では、代表作を中心に、初期の作品から最新作までを一堂に展示することで、60年におよぶ創作の歩みを紹介するとともに、志村ふくみの魅力とその芸術の核心に迫る。

期 間 2月2日(火)～3月21日(月・祝)

9:30～17:00

※入館は16:30まで

休 館 日 月曜日（ただし3/21は開館）

会 場 京都国立近代美術館
京都市左京区岡崎円勝寺町（岡崎公園内）
TEL.075-761-4111

観 覧 料 一般900円、大学生500円

＊高校生以下・18歳未満は無料

＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

4

伊豆山神社の歴史と美術

静岡県の東端、相模灘に面する温泉郷「熱海」。一説に、海中から熱湯が涌出したとの伝承がその名の起源という。相模灘を望む伊豆山山腹に鎮座する伊豆山神社は、伊豆権現あるいは温泉が神格化された存在であることから走湯権現とも呼ばれた。平治の乱の結果、伊豆国に配流されていた源頼朝（1147～99）が平氏打倒の兵を挙げる際、挙兵を後援し鎌倉幕府樹立へと導いたのも、

ほかならぬ伊豆権現の神助だったとされる。以降、東国の守護神として絶大な信仰を集め、歴代将軍や幕府要人は伊豆山神社と箱根神社に参詣するいわゆる「二所詣」を重ねた。

奈良国立博物館では、平成24年（2012）に開催した特別展「頼朝と重源—東大寺再興を支えた鎌倉と奈良の絆—」で伊豆山神社より銅造伊豆山権現像を拝借し、同社の歴史と信仰の一端を紹介する機会を得た。この像は、鎌倉時代にさかのぼる伊豆山権現像の優品でありながら、全身に広がる腐蝕がいちじるしく、とりわけ面相部を覆う分厚い錆が像容の正確な把握を困難にしていた。このたび、奈良文化財研究所の協力のもと保存修理を実施し、像表面の錆落としを行ったところ、下層から造立当初の威厳ある顔立ちが現れ、またまばゆい輝きを放つ鍍金が多く残存していることが判明するなど、特筆すべき成果を得ることができた。

本展では、面目を一新した伊豆山権現像の姿を修理後初公開し、あわせて伊豆山神社伝来の貴重な宝物の数々を関西で初めて一堂に展覧する。



伊豆山権現立像
静岡 伊豆山神社蔵

期 間 2月6日(土)～3月14日(月)

9:30～17:00

＊2/8～14は20:30まで

＊3/1～11・13・14は18:00まで

＊3/12は19:00まで

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 2/15・22・29

会 場 奈良国立博物館 西新館 第1室
奈良市登大路町50番地
TEL.050-5542-8600（ハローダイヤル）

観 覧 料 一般520円、大学生260円

＊この料金で、東新館で開催中の特別陳列「お水取り」および西新館で開催中の名品展「珠玉の仏教美術」も観覧可能

＊高校生以下・18歳未満・満70歳以上の方は無料

＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

＊子ども（中学生以下）と一緒に観覧される方は一般410円、大学生210円【子どもといっしょ割引】

本欄掲載の1～4の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（82円）を日本建築協会事務局までお送りください。

日本建築協会
月間の動き

平成27年12月

編集委員会

第9回広告企画・編集合同委員会

12月3日(木) 19:00~19:40

日本建築協会会議室

出席者 米井委員長ほか5名

議 事 (1) 1月号特集 都市の記憶をたどって

(2) 2月号特集 非日常の棲み処(すみか)・・・寝泊まりの進化(仮)

(3) 3月号特集 東海特集

(4) 4月号特集 私の空間作

(5) 5月号特集 人・物・情報の移動～「つたえる」から「つたわる」へ～(仮)

(6) 6月号特集 UR周年記念

(7) 広告依頼先検討

第2回建築計画系分科会

12月16日(水) 19:30~21:50

Fooding Bar Ruelle 堂山

出席者 樋口幹事ほか5名

議 事 (1) 2015年特集を振り返って

(2) 次期分科会の運営

(3) 2016年特集の企画

第5回インテリア・住宅系分科会

12月9日(水) 19:15~22:00

堂島ホテル ザ・ダイナー

出席者 黒柳幹事ほか5名

議 事 (1) 2016年特集の企画

第8回設備分科会

12月2日(水) 18:10~20:00

日本建築協会会議室

出席者 橋本幹事ほか6名

議 事 (1) 設備の頁の企画

(2) 2016年特集の企画

(3) その他

第8回法令分科会

12月16日(水) 15:10~17:00

日本建築協会会議室

出席者 黒川幹事ほか4名

議 事 (1) 法令コーナーの企画

(2) 2016年特集の企画

第8回作品作風小委員会

12月17日(木) 18:30~19:15

神戸県民会館会議室

出席者 西田小委員会委員長ほか5名

議 事 (1) 作品の選定

(2) 作品の掲載状況、予定

(3) gallery掲載報告、予定

(4) その他

事業委員会

第12回U-35小委員会

12月16日(水) 19:00~23:00

竹中工務店会議室

出席者 若江リーダーほか2名

日刊建設工業新聞社インタビュー対応

議 事 (1) 3rd action

(2) 次回予定／その他

出版委員会

第8回出版委員会

12月17日(木) 18:05~19:15

日本建築協会会議室

出席者 西委員長ほか9名

議 事 (1) <プロのノウハウ>と特装本の経過報告

(2) 制作進行中の書籍

(3) 今後の出版テーマ

教育委員会

第2回工高生教育小委員会

12月15日(火) 18:00~19:00

日本建築協会会議室

出席者 谷口小委員会委員長ほか4名

議 事 (1) 第61回工高生デザインコンクール実施報告

(2) 第62回工高生デザインコンクール募集規定

第8回大阪府住まいづくり教育普及協議会

12月18日(金) 10:30~12:00

場 所 大阪府建築士事務所協会会議室

議 事 (1) 出前講座実施について

(2) その他

100周年関連事業委員会

第5回史料研究会

12月10日(木) 18:25~20:20

日本建築協会会議室

出席者 山形委員長ほか4名

議 事 (1) 100周年記念誌

(2) 再読一論考・記事編一の連載

第6回10年委員会

12月9日(水) 18:30~19:35

日本建築協会会議室

出席者 前川副委員長ほか6名

議 事 (1) 学生のための見学会 今後の見学先検討

(2) そぞろ歩く御堂筋 今後の展開

100周年記念事業委員会

第7回幹事会

12月1日(火) 19:00~21:00

日本建築協会会議室

出席者 設楽委員長ほか6名

議 事 (1) 各WG経過状況報告

(2) 100周年記念事業の検討と寄付募集

懇親会

2015年建築関係団体合同忘年懇親会

12月14日(月) 18:00~20:00

シティプラザ大阪

参加者 260名

編集委員会(平成27年度)

■副会長

設楽 貞樹

本多 友常

■編集担当理事

西 博康

松崎 公一

佐藤 榮一

杉本 浩

竹中 統一

松本 眞一

吉村 英祐

◎米井 寛

■副委員長

○勝山 太郎

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

△田中 直人

紅谷 昇平

松田奈緒子

三宅 次郎

守井 辰

吉村 英祐

★建築計画系

荒木 宏之

神戸 嘉也

静 茂夫

下坂 浩和

中辻 浩介

野田 隆史

橋本 祐典

東 拓郎

△樋口 展寛

三谷 帯介

米山 剛史

渡部 剛

★インテリア・住宅系

今井 充彦

川合 隆之

工藤 理隆

△黒柳 亮

酒井 雅男

塚口眞佐子

ペリー史子

間瀬 一博

■構造分科会

伊藤 栄治

△岡田 健

岸本 光平

司馬 勢也

瀧野 敦夫

角田 耕一

橋本 宗明

宮久保秀樹

向井 洋一

■設備分科会

有尾清二郎

北野 勝也

高村 聡

寺井 千佳

長澤 康弘

夏井 重行

△橋本 直樹

藤原 謙一

桝井 貴廣

宮崎ひろ志

山本 雅洋

■施工材料分科会

東 琢

木谷 在憲

桜井 和男

高橋 秀一

藤丸 啓一

山口 紀宏

△吉田 正友

■法令分科会

磯林 雅之

岡本 亮二

香掛 靖

△黒川 正樹

河野 学

前田 俊文

■作品作風小委員会

東井 嘉信

居内 章夫

池上 明

稲垣 和江

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉橋 尉仁

倉渕奈千子

澤田 純一

高木 秀晃

鞆野 淳司

豊田 充広

▲西田 佳代

芳谷 晴彦

増田 敬彦

■広告企画小委員会

大谷 金由

小川 雄介

小山 昭

金築 雄

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事

印刷 2016年1月28日

発行 2016年2月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 榊中島弘文堂印刷所

デザイン 多田正治(多田正治アトリエ)

定価 1230円(税込)

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

コンクリートのひび割れ対策に

NETIS 登録済み
KT-040018-V

DENKA
DENKI KAGAKU KOGYO KABUSHIKI KAISHA

高性能膨張材

デンカパワーCSA

JIS A 6202
適合品

特 性

- ・乾燥収縮の低減
- ・自己収縮の低減
- ・水密性の向上(防水性)
- ・温度ひび割れの低減

主な用途例

- ・合成デッキスラブ
- ・土間スラブ
- ・RC 構造物
- ・自己充填コンクリート
- ・マスコンクリート 他

膨張材以外にも

- ・無収縮グラウト材
(タスコン)
 - ・躯体防水材
(シャガード)
 - ・ポリマーセメントモルタル
(RIS シリーズ)
- など、各種混和材(剤)を
ラインナップしています。

●資料のご請求お問い合わせは・・・

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

小浦産業株式会社

〒550-0004 大阪府大阪市西区靱本町1丁目14番6号
TEL 06-6443-6181 FAX 06-6443-6270



美しく豊かな環境づくりに貢献いたします。

土木事業、景観事業、エクステリア&ガーデン事業を柱に地中から地上までトータルに景観をとらえた製品開発をおこなっております。



日本興業株式会社

本社 〒769-2101 香川県さぬき市志度 4614-13 tel:087-894-8130
http://www.nihon-kogyo.co.jp

< 中部・近畿支店 >

土木資材営業所

TEL:(06)7173-2790 FAX:(06)7173-2793

景観資材営業所

TEL:(06)7173-2790 FAX:(06)7173-2793

景観資材営業所 (金沢事務所)

TEL:(076)246-5667 FAX (076)246-5668

和歌山営業所

TEL:(0736)62-8790 FAX:(0736)62-8748

兵庫営業所

TEL:(079)264-1525 FAX: (079)264-0893

営業推進部

TEL:(06)7173-2792 FAX: (06)7173-2793

名古屋営業所

TEL:(052)745-8125 FAX:(052)745-8085

名古屋営業所 (静岡事務所)

TEL:(054)287-0205 FAX:(054)287-5560